
ガンダム 00 マイスター始めてみました

雑炊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガンダム00 マイスター始めてみました

【Nコード】

N7756S

【作者名】

雑炊

【あらすじ】

いつの間にか自分ではない誰かになっていた一人の男。
そんな男が矛盾を孕みながら、争いの続く世界で出来るだけ頑張った。

これはそんな彼と、周りの人間が織り成す、ちょっとした御伽噺。

初遭遇

プロローグ（前書き）

始めました三作目。楽しんで頂けたら幸いです。

初遭遇

プロローグ

えーっと・・・一体何が起きているのでしょうか？

そんな事を思った俺の目の前に広がっている光景は、凄く未来的なものだった。

おそらく何かの兵器のコックピットと思われるところの入り口に、自分は変な拳銃を持って、それを目の前の黄緑色のパイロットスーツに身を包んだ人物にその銃口を向けている。

・・・いや、ホントにどうなってんの？これ？

ホントに何がなんだか分からない。

もしかしてこれが二次創作とかでよくある憑依って奴なのだろうか？

・・・とりあえず・・・

「・・・ええつとお・・・」

「・・・？」

とりあえずこれは言わなきゃダメ、だよなあ・・・

「・・・なんかごめんなさい？」

「・・・・・・・・・・は？」

いや、は？じゃなくって・・・・・・・・

「いや・・・・・・・・たぶんあれだったんですよ。あれ。ほら、例えば熱に浮かされた麻疹みたいな。きつと“イヤッホオオオオオ！！俺TUEEEEEEEEE！！”みたいな。ほら！中二病ですよ！中二病！！きつとそうだ！そうに違いない！！じゃなかったら俺こんなこと出来ないもん！！っ！かなんで拳銃持ってたの俺！？っ！かあれ！？なんかさっきまでの記憶がまったく無い！？何？このタイミングで記憶喪失とかそんな感じですか！？何ですかそれ！？ああああああああもおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

ただいま、俺、喋ったことにより緊張の糸が弾けて、大根RAN中相手を見てみると、いきなりこんな事を喋りだした俺を見て呆然としております。

ホントごめん無さ「あ・・・・・・・・君・・・・・・・・！！」

「はい！ナンデショウカ！？」

「・・・・・・・・さつきから言っている事が支離滅裂で君が何を言いたんだか分からないんだが？」

・・・・・・・・フ。そんなことか。そんなこと決まっている。俺が言いたいこと
。それはつまり

「……………土下座でもジャンピング土下座でも、ローリング土下座でも、断崖絶壁バンジーでもなんでもやりますんで、許してくださいかね？」（ＴＴ）――」

「……………ハア……………」

溜息吐かれた！ショック！！やっぱり俺は此处で殺されてしまうのでしょうか！？

これが俺、
“……………” から“アムロ・レイ”と名乗るようになった男と、俺が生涯“師匠”と慕った、イノベイドからさらに進化した“イノベイター”となった“人間”、“リボンス・アルマーク”。

そして俺が最も一緒に戦場を駆け抜け、果てにはまったく別の存在へと進化した機体。

この世界で始めて造られた戦^{ガンダム}うための力との初遭遇であった。

初遭遇

プロローグ（後書き）

えゝ．．．．．他の小説がスランプに陥りましたので、リハビリ兼ねて三作目を投稿してみました．．．．．あの、なんかごめんなさい．．．．．

とりあえず主人公は結構強くなりますが、そこそこです。

チートにはなりません。

彼の容姿はこんな感じ。

- ・見た目は刹那の肌を黄色人種にして、目の色を黒くした感じ。
- ・パイロットスーツは白。
- ・普段の服は青のジーパンにスニーカー。シャツの上からフード付きのヨットパーカーの上から、ボマージャケットを着込んでいます。

亀更新ですが、よろしく願います。

一話 ガンダム乗ってみました（前書き）

ネタが降りてきたので一気に書き上げました。

色々とおかしい所があるかもしれませんが、楽しんで頂けたら幸いです。

それではどうぞ。

ガンダム乗ってみました

早いもので、俺が師匠と初遭遇してから数年が経っていた。

……話が飛びすぎだ？ 気にするな。俺は一切気にしない。

……そんなこんなで俺が今何をしているのか、というところ……

•

•

•

•

『うっ……のっ！いい加減に当たりなさいよ！』

「そんなの嫌に決まってるでしょ姉さん？　つつつか姉さんって一々攻撃するときに、一瞬武器が震えるから攻撃が読み易いんだよ。その癖直したほうが良いよ？」

「んなっ！？あたしってそんな癖あったの！？」

「……うんゴメン。今の全部嘘だわ」

あんなええええええええええ！！！！！！

㊦

．．．とまあ、こんな感じで絶賛姉さん
 ヒリング・ケアと
 模擬戦中である．．．．．っと

「はい、隙あり」

そう言いながら、俺は姉さんの乗る黒いアストレアのプロトGNソードによる、横薙ぎの攻撃を避けながら、Oガンダムのビームサーベルを横に振るった。

『っ！！！』

振るわれたビームサーベルは正確に相手の腹と腰の間に吸い込まれていき、次の瞬間バチッという音と共に、アストレアが真っ二つになって爆散した。

と、同時にコックピットのモニターにシミュレーション終了の文字が浮かび、模擬戦が終わったことが告げられた。

「はい、これで35戦33勝1敗1分け。……そろそろ止めない？流石に腹減ってきたんだけど？」

『煩い！！もう一回。もう一回よ！大体なんで第二世代の機体が第一世代の、しかも素人が乗った機体に負けるのよ！？ありえないでしょ！？』

「いやもうそれはパイロットの腕の問題じゃ『何か言った？！』……いえ、何も」

『よし、もう一戦いくわよ。今度こそ撃墜してあげるから覚悟しなさい？』

……いやもうそれ死亡フラグの類だろ。

そんなことを思ったが、口に出したら絶対後でまた面倒臭い事になるので、「はいはい」と言いながら流すことにした。
ヴンという音と共に再びシミュレーターが立ち上がる。

こっちの機体はさつきと同じOガンダム。
姉さんの機体は・・・・・・・・・・

・・・・っ！

次の瞬間、太い桜色のビームの奔流が此方に向かって飛んできた。
咄嗟に機体を傾けて、グレイズの要領でそれを避けることに成功した。

・・・今の粒子ビームは・・・・・・・・

そう考えながらビームが飛んできた方向を確認する。其処には・・・
・・・

「ってやっぱりIガンダムかよ！姉さん汚ねえぞ！それ下手したら
第三世代とも対等に渡り合えるような機体じゃねえか！！」

『うつさい！それにこれなら流石のアンタでも勝てないでしょ！！』

「無茶苦茶だチクショウ！？」

そう言いながら右手のビームピストルを発射する。

向こうもそれは読んでいたのか、右に滑る様にしてビームを避けると、右手のGNバスターライフルの照準を此方に合わせてきた。

銃口からビームが発射される。

それを宙返りの要領で回避した俺は、OガンダムをIガンダムに突っ込ませる。

それを見た向こうも、バスターライフルでは不利と思ったのか、砲身を畳んで、代わりにビームサーベルをシールドから抜き放ち、同じようにこっちに突っ込んできた。

『今度こそあたしが勝ああああつ！！！』

「・・・んにやろう。やれるもんならやってみる細いドラム缶体型が！！何に乗っても無駄だって事を教えてやるよ！！！」

「『ぶつ飛ばす！！！！！！！！』」

「お疲れ様。中々面白い物を見せてもらったよ」

「そりゃどうも。お蔭でこっちは昼飯食うのが無駄に遅くなっちゃまった」

茶化してきた師匠に対応しながら、俺はお茶を片手に昼飯のおにぎり（具はおかかと梅干と焼きたらこ）を食べ始めた。
一応あの後の結果を説明しておく、

○ガンダム

シールド破損・左腕中破・脚部スラスタ小破・ビームピストル大破・頭部中破・左肩小破
エネルギー残量・10%
勝利

Ⅰガンダム

シールド、両肩、右足、左腕、左足首、胸部大破・腰部、頭部小破・
右腕小破
エネルギー残量・撃破の為0%
敗北

決め手・左腕と頭部を犠牲にした特攻

というわけで俺の勝ちと相成りました。

ヒリング姉さん？シミュレーターの中で真っ白になってましたが何か？

というかそもそもあの人は本来味方とのコンビネーション攻撃で、本領を発揮するタイプの人なので、実は単体での戦闘能力はあまり高くは無い。精々ヒクサーさんとどっこいどっこい位だろう。

……とは言っても、常人と比べたら遥かに高いんだけどな。

「それにしても君の成長には目を見張るものがあるね。数ヶ月前までは、僕達の内の誰にも勝てなかったのに、いつの間にかほぼ互角

以上の戦いが出来る様になってきている」

「誰の所為でこうなったと思ってるんだ？毎日毎日あんな鬼畜な条件下で訓練させやがって。大体なんだ？Iガンダムと第二代ガンダム全部、各百機ずつ、Oガンダム一機だけで全滅させるとか。お蔭で大体のガンダムタイプとの戦闘方法が徹底的に身体に染み付いたわ」

ホントにあればつらかった。何せ一回撃墜される度に全種ノルマ10機追加されるから、全然終わらなくて泣きそうになった。お蔭で強くなれたけど、もう一度やれ、とか言われたら絶対拒否する。

「フフフ・・・だが、それのお蔭で此処まで強くなれているんだ。あまり邪険にすることは無いと思うけど？」

「るっさいわ師匠。・・・・・・・・まあ、一応結構感謝はしてるよ」

それ、どっちの意味だい？、と言いながら、再び瞳を金色に変えて正面を見据える師匠 リボنز・アルマーク。

彼がこうなっているのは、大体は他のイノベイドとヴェーダを介してリンクしているか、もしくはヴェーダ自体とリンクしているからだ。

・・・・・・・・暇になったな、昼飯も食い終わったし・・・・・・・・

そう考えた俺はその場を立ち上がり、自室に戻ろうとする。すると師匠に呼び止められた。

「ああ、そうだ。実はそろそろテストも兼ねて君にミッションをやって貰おうと思うんだけど」

「・・・・・・・・・・は？」

そう言つて俺は身構えた。

この人がこうやって突然何か言い出すのは、俺に対して何か悪巧みを思いついた事に他ならない。

絶対に碌でも無い事に決まっている。

すると師匠は苦笑しながらこう言ってきた。

「そう身構えないで欲しいな。なに、わざわざ戦場に行け、という訳ではないよ。実は近じか実行部隊が地上で最後の実戦テストを行うらしいから、その監視に行つてきて貰いたただけだよ。勿論君の判断で戦闘に介入してもいい。ただし前にも言つたように、介入する際には実働部隊のマイスター達とはあまり関わらないようにしてくれ」

どうかな？、と言つてこちらを見据えてくる師匠。

それにしても実行部隊か・・・・・・・・・・どんな奴らか見てくるのも面白

そうだな・・・・・・・・・・でもなあ・・・・

そんな風に考えに考え抜いて俺が出した答えは

「……分かった。行ってくる。その代わり一つ条件がある」

「……随分と彼に肩入れしているね、リボنز」

そう言つて僕に言い寄つて来たのは、塩基配列パターン0988タ
イプのイノベイドであるリジェネ・レジェッタだった。

「そうかな？僕としては、あまり肩入れしているつもりは無いんだ
けどね」

そう言つて再びヴェーダとのリンクに戻る。
しかし彼はそのまま話を続けた。

「君からしてみれば、ね。だが僕らから見れば、君は彼にかな
り肩入れしているようにしか見えないよ？どうして彼にあそこまで

するんだい？彼は人間だよ？僕らとは違って、何も特殊な能力も持っていないし、脳量子波だって使えないただの平凡な人間だ。君がそこまでする理由は無いと思うけど？」

・・・フン。まったく、君と言う人間は・・・

「何の能力も無い、か。これを見ても君はそんなことが言えるかい？」

そう言つて彼にあるデータを手渡す。

彼は怪訝そうにデータを見るが、だんだんとその顔は驚愕に染まっていた。

それは此処最近の彼の模擬戦のデータともう一つ。

全てを見終わつて絶句している彼に僕はこう言い放った。

「僕は彼の機体に、あのGNドライブを搭載しようと思う」

それを聞いたリジエネの顔が今度こそ固まる。

少しの沈黙の後、彼は恐る恐る口を開いた。

「そ、そんな・・・それは・・・君は、本気でそれを言っているのかいリボンス？」

「ああ、本気だよ」

そう言いながら、僕は彼に向き直つてはつきりと言った。

「だってその方が面白そうじゃないか」

さあ、見せてもらおう、アムロ・レイ。君が本物なのかどうか、確

かめさせて貰おう。

リジエネの手から毀れた数枚の書類。その中の一枚にはこう書いてあった。

『アムロ・レイ』

身体の一部の細胞が、人間ともイノベイドとも似つかないものに
変異していることが確認。

調査の結果、その細胞は、個々がそれぞれ超微量ながら脳量子波
に近い波を発していることが確認。

と、同時にその細胞はゆっくりとはあるものの、彼の身体全体
に広がっていることが前回の結果と比較することで確認されている。
以上の結果より、彼の身体はその一部に関しては全く別の生命体
になっている事が予想され、近い将来、彼はその全く別の存在へと
変化する事も予想される』

一話 ガンダム乗ってみました（後書き）

どうも、雑炊です。

何かネタが大量に降りてきたので、当分こっちばっかになりそうです。

因みにキャラが何人か変かもしれませんが、もし「此处はこうだろ」というのがありましたら、どしどし送ってください。

出来るだけ直していこうと思います。
それではまた次回。

二話

戦闘に介入してみました（前書き）

今回は、今日の今日までGWに入ってから一回もネットが使えなかったので、そのリハビリがてら書き上げたものだったのですが・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・内容が少々どころか結構変かもしれない
ません。

何かあったら感想に書き込んでくれるとありがたいです。
それでは本編をどうぞ。

二話

戦闘に介入してみました

とりあえず任務の為に、ちょっとした新装備を取り付けたOガンダムに乗って、地球に降下中です。

それにしても流石GN粒子。ちょっとフィールド張っただけで大気圏突入したのに、本体は何とも無いぜ！

『浮かれている場合か。予定されていたポイントまでは、残り2？をきったぞ』

そう此方に語りかけてきたのは、グラーベ・ヴィオレント。

現時点で俺が知るイノベイドの中では、師匠を除いて最もMSの操縦技術が高い人だ。

彼の強さは並ではなく、あんなに地獄の訓練をした俺でも、彼との模擬戦の勝率は4割程度である。

とにかく正確な動きをするため、遠距離／中距離の戦いでは殆ど隙を見出すことが出来ない。

閑話休題

『あ、本当だ。それじゃグラーベさん。援護頼みます』

そう言っただけの岩場に機体を着陸させた俺は、ステルスモードを発動して、Oガンダムを外界から認識できないように隠した。

近くに、黒く塗装されたサダルスードに乗ったグラーベさんも降りてきて、同じ様にステルスモードになる。

今回実働部隊である戦艦“プトレマイオス”

通称トレミー

のメンバーに提示されたミッションは、この付近にある建設中のユ

二オンの基地を襲撃する事だった。

・・・とは言っても精々実戦テスト扱いの内容な為、この基地に配備されている機体はその殆どがリアルドであり、ハッキリ言ってガンダムを相手にするには役不足間が否めない。

・・・むしろこのミッシヨンの目的は、マイスターの皆さんに実戦での感覚を体験してもらおうっていう感じがするんだが、そこらへんどうなのだろうか？

一応フラッグが三機ほど配備されているらしいが・・・まあ、よっぽど油断しない限りはやられたりしないだろう。

「・・・なんか俺の出番無さそうだな・・・」

『我慢しろ。第一お前の存在は本来、俺達以外には知られてはいけないのだぞ？』

「いや・・・それは分かつちゃいるんですけど・・・なんか、こう、ね」

・・・そう。そうなのである。実は俺の存在は師匠達以外で知っている人間は、ほぼ0に近い。

監視者の人達ですら俺のことを知らない、と言うのだから驚きもんである。

その理由は俺も分かつてはいない。

なんでも師匠が言うには「君は計画を根底から破綻させる可能性がある」とのこと。

・・・おれ、そんな能力も権力も持っていないのですが・・・

と、そう俺が思い返していた時、

『・・・始まったぞ。十時の方向だ』

そう、グラীবさんから通信が入った。
慌てて十時の方向を望遠モニターで見やると、確かに若干攻防による爆風の様なものが見える。

『・・・どうやらデユナメスとエクシアが先行して部隊を攪乱。その後サキエルが合流して基地を殲滅するというミッションプランのようだな』

サダルスードが回収したデータを元に、グラীবさんはそう推測した。

これが俺が師匠に言った条件、サダルスードを援護に持って来させるという事の原因である。

サダルスードは元々狙撃タイプのガンダムであるデユナメスのプロトタイプに当たる機体であり、同時に索敵能力がかなり強化されている。そのため、今回のようにかなり離れていても、かなりの情報が収集できる。

それにしても、

「サキエル、ねえ・・・」

と言いながら、俺は今回のミッションに参加するガンダムの中の一機のことを思い返していた。

ガンダムサキエル。

他の四機のガンダムが、近接格闘、狙撃または射撃戦、飛行形態による高機動戦闘、大火力の火器による殲滅にそれぞれ特化している中、このガンダムだけは武装の変更により、どんな戦法でも取れるオールラウンダー型だ。

一応他のガンダムと同じく、専用武器としてGNビーム薙刀と、シールドと兼用のGNアローという武器を装備することにはなっているが、それ以外の武器はビームライフルとビームサーベルだけと結構シンプルだ。つか薙刀に至っては、最早ネタ武器でしかないような気がするし、GNアローに至ってはまだ開発中らしい。

・・・計画の発動までに間に合うんだろうか？GNアロー？

と、目の前の戦場に動きがあった。

どうやらグラীবさんの予想は当たったようである。

実際、見ていたから分かるがあの後直ぐに赤と白の機体が戦闘に参加したのが分かった。

が・・・・・・

「・・・うん・・・遠すぎてよく分からないぞ・・・?」

流星に戦場から離れ過ぎていた為か、基本的な能力しか持たないOガンダムでは本当に薄っすらとしか確認できない。

流星にこのまま此処に居ても意味が無いと判断して、近くによって行く事にした。

「グラীবさん。ちょっと此処からじゃよく見えないので、ギリギリのラインまで近づいてみます。なので万が一の場合は援護頼みます」

そう言ってOガンダムを戦場へ近づけていく。

グラীবさんが何か言おうとしていたが、私は何も見なかった事にして、ズンズンと近づいていく。

・・・ごめんなさいグラীবさん。後で何か奢りますから。

「おお・・・こりや凄いな・・・実働部隊の名前は伊達じゃない・・・ってか？」

辿り着いたところで見た光景。

それは一種地獄絵図の様相を呈していた。

地面にはビームで身体の一部を抉られたリアルドが、死屍累々と横たわっており、一部の機体は何か鋭利な刃物で切られたかのように真っ二つになっている。

と、Oガンダムの頭上を通り過ぎる影が三つ。

その後姿から、おそらくこの基地に配備されていたフラッグだろう。三機のフラッグはそのまま此方に気付かずに、少し離れたところに居る3機のガンダムへと向かっていった。

・・・まあ、あれだけの腕があれば、高々フラッグ三機には早々やられたりしないだろう。

そう考えた俺は、Oガンダムの踵を返してさっきの所へ戻ろうとした。

が、次の瞬間、

ギャキッ！！

と言う音が聞こえて、思わず振り返った。

其処では、何故か3機の内の一体の赤と白の機体

確かサキエ

ル、とか言ったっけ？ がさつき見た三機のフラッグの内の一
体と取っ組み合っており、動きを止められている。

さらにその後ろからはもう一機のフラッグがソニックブレードを構
えて、サキエルを串刺しにせんと突っ込んで行っていた。

エクシアとデUNAメスに目を向けるも、残っていた他のリアルドに
足止めされていて、とてもじゃないが援護は望めなさそうだ。

・・・チッ！ああもう！！

そう心の中で悪態を吐きながら、頭から追加装備の外套を被ったO
ガンダムの右手に持たせたビームピストルから光弾を発射して、突
っ込もうとしていたフラッグの腕を、両方とも吹き飛ばす。

「すみませんグラীবะさん！！万が一の事態が起こってしまったの
で、出来るだけ援護頼みます！！！」

突然のことに呆気にとられる三機を睨みながら、グラীবะさんに通
信を入れつつ、俺はOガンダムを其処に突っ込ませた。

「くっ・・・この・・・離せっ！」

慢心していた！

私はそう心の中で呟いた。

今回のミッションは、元々、このガンダムサキエルの最後の実戦テストとして実行されたものだった。

そのため、標的となった基地も、建設途中の戦力のあまり無い此処が選ばれていた。

それに配備されているのは殆どリアルドだけだったので、ガンダムであれば大丈夫、という根拠不明の自信があったというのもこんな事態に陥った原因かもしれない。

何とかしてフラッグの拘束から逃れようとするも、上手く腕を絡ませてきて、中々振り解けない。

・・・・・・如何にかしなければ・・・・・・

私がそう思った時だった。

突如として、サキエルのレーダーが背後から此方へと近づく何かを捉えた。

「今度は一体何・・・・フラッグだと!？」

しかも相手はソニックブレードを構えて、此方を串刺しにせんと突撃してくるではないか!

他の二人　刹那とロックオンを見るも、二人とも他の機体に足止めを食らっており、援護は期待できそうもない。

その間にもフラッグは此方へと迫ってきている。

何とかして拘束を外そうともがくが、一向に外れる様子はない。

そうしている内に、背後のフラッグはもうあと少しという所まで来ていた。

・・・・・・これまでか・・・・・・

そう思い目を閉じる。

そもそもあの日家族が皆殺しにされた日から此処まで生き残ってこれたのが僥倖だったのだ。

今此処で殺られても、悔いはない。

・・・いや、有るか。

自意識過剰かもしれないが、ここで私が殺られれば、少しとはいえ、やっと心を開いてくれた刹那やフェルト達に少なからずショックを与えてしまつかもしない。

・・・刹那、フェルト、ロックオン、ティエリア、アレルヤ・・・はまあいいか。（酷いよ！？）今何か聞こえたが無視して、クリス、リヒティ、スメラギさん、ラッセ、イアンさん、モレノさん・・・

「みんな・・・ゴメン・・・」

そう言って私は目を閉じる。

・・・しかし何時まで経っても来るべき筈の痛みと衝撃が来ない。怪訝に思っただけ目を開けると其処には

私の身体に突き立てられる筈のソニックブレードを持っていたフラッグの手が、

ピンク色の閃光に吹き飛ばされている光景だった。

……まさか此方の増援！？でも……一体誰が？

まさかアレルヤか、ティエリアかと思ったが、次の瞬間フラッグに突っ込んできた影を見た瞬間、その疑問は解消した。

……厳密に言つと、全く別の質問に置き換わっただけなのだが。

突っ込んできたのは、茶色い影だった。

それは良く見ると、何か人型の物がマントを頭からすっぽりと被っている事が分かった。

大きさからそれはMSだという事は分かったが、問題は今これが撃ったであろうビームだ。

現状、世界中何処を探しても今の様なビームを撃てるのは、太陽炉を搭載したMS　つまりガンダムしかありえない。

という事はこの機体はガンダムなのだろうか？

しかし一体誰が作った？

まさか私達の知らない所で、全く別のガンダムが製造されていたのだろうか？

頭の中が疑問で多い尽くされていく。

そんな私に聞きなれない声の人物が話しかけてきた。

『其処のガンダム。ボーっとしているなら邪魔だから撤退しろ。後は此方で終わらせておく』

『な、何を言っている?』

……いや、何をつて……

「今ので分からなかったのか? 簡単に言つと“そのままだと邪魔に
しかないから、他の二機と一緒に撤退しろ”と言つたんだ」

『な……ふざけるな! 私はまだ戦えるぞ!』

「喧しい。武器も何も無い状態で如何するつもりだ?」

ちよつと離れた所に、薙刀の柄つぽいのが突き刺さっているのが見えるが、あそこまで取りに行っていたら、また後ろから攻撃されかねないぞ。

そう思いながらも今突き飛ばしたフラッグと距離を取りながら、サキエルを雁字搦めにしていたフラッグの頭部をビームピストルで吹き飛ばす。

頭部を破壊されたことで慌てたのか、フラッグの拘束が少し緩まる。その隙を突いて、サキエルはフラッグを蹴り飛ばし、一気に近づいて肘にマウントされていたビームサーベルで、フラッグを切り捨てた。

『武器なら^{これ}ビームサーベルがある』

そう言いながら、機体の前でビームサーベルを構えるサキエルのマ

イスター。

・・・とは言っても、射撃武器も何も無いのに、真面目にビームサーベルだけで戦うつもりなのだろうか？・・・だとしたらコイツどんな馬鹿だ？例えばガンダムであっても、リニアライフルの集中砲火を食らったら、流石にタダでは済まないのだが・・・

そう考えていると、さっきまでエクシアのほうに回っていたリアルドの数機が此方にやってきた。

どうやら機動戦で翻弄しようとしているらしく、全員が飛行形態のままだ。

・・・と、いう事はこいつらさっきまでエクシアと戦ってた時もある状態だったのだろうか？

・・・ま、あんまり関係ないか。

そう心の中で呟きながら、Oガンダムをリアルドの方へ飛ばす。

飛んでる途中で、先程フラッグが投げ捨てたのであるリニアライフルがあつたので、拾って左手にマウントし、牽制のつもりで一発撃ってみる。

案の定リアルドの編隊は、リニアライフルの球を避ける為に散開するが、その内の一角にサキエルがビームサーベルで切りかかり、2機を切り捨てた。

その後ろからリアルドがリニアライフルでサキエルを狙うが、それを見逃すような俺ではない。

「その行動はミスだ、リアルドのパイロット」

そう呟きながら、銃口をサキエルに向けていたリアルドに向かって、リニアライフルを発射する。

当たり所が悪かったのか、弾が直撃したりアルドは、そのまま爆散した。

『やるな！』

サキエルのパイロットから賞賛の声が掛けられるが、俺としてはこんな事位当たり前である。

こっちはお前らみたいにルーキーじゃないぞ？・・・あ、いや実戦自体は出た事無いから俺もルーキーか。

今迄模擬戦で相手をしてくれた人（及びデータ）の皆が皆（主に姉さんとか姉さんとか姉さんとか）確実に俺を殺しに来ていたので、いつの間にか実戦を経験したような気になっていた。

これはまずいから、後で直さないとなあ・・・っと、今はそんな事考えている場合じゃなかったな。

「これくらいは当たり前だ。それよりもそっちにまた何機が行ったぞ？」

そう言つてサキエルの方へ向かおうとしていたリアルドの内3機を、ビームピストルから発射した光弾で火の玉へと変える。

撃ち落としたリアルドのパイロットに向けて心の中で念仏を唱えながら、こちらをスルーしてサキエルの方へ向かつて行った残りのリアルドを見やる。

どうやら其方も既にサキエルが撃墜した後のようだ。

それを確認してから回りを見渡しても、敵機の姿は一体も確認できない。

・・・終わつた、か？

いや、まだ油断はできない。こういう時に限って油断している奴は

やられるものなのだ。

実際に体験した事があるので、まだホツとする訳にはいかない。

「……………グラーベさん」

『確認してみたが、今の所、この付近に近づいて来るような機影は確認できないが……………警戒するに越したことは無いだろう』

……………ですよね。

そう思いながらも、左手のリニアライフルはそのままに、右手のビームピストルを、Oガンダムに取り付けた“ちよつとした新装備”

アンチ・ビーム・コート
GNABCマントの裏側にあるラッチに取り付ける。

このGNABCマントは、俺が師匠に万が一の事を考えて提案した装備の一つだ。

見た目はただの馬鹿でかいマントだが、表面にGN粒子をコーティングする事によって、GNキャノン程度の威力の物なら、一回だけ完全に無効化できる、という代物だ。

勿論頭からスッポリと被れば、今回の様に一種の偽装としても使える。

……………勿論実体兵器に対しても、ある程度は耐えられるぞ？
そしてマントの裏側には、幾つかのGNビームピストルをマウントする為のラッチも設置されている。

今回はこのような小規模な戦闘だったので、一丁しか持って来てはいなかったが、本来はここに合計六丁のビームピストルがマウントされる予定だ。

『どうやらもう大丈夫の様だな』

……………おい？

何でお前はそんなに無防備でこっちに近づいて来るんだ？

普通もうちよつとは警戒したまんまだろう？

．．．．．あ。

そんな事を考えていると、不意にサキエルの後ろで動く影があった。先程サキエルが撃墜したリアルドの内の一機のような。

どうやらまだ息が有ったらしい。

せめて一矢報いようと、手に持ったリニアライフルの銃口を此方へと　　厳密にはサキエルへと　　向けている。

それを見た瞬間、迷う事無く左手のリニアライフルをそちらに向けて引き金を引く。

放たれた銃弾は、サキエルの頭部の真横すれすれを通りながら、リアルドの頭部ごとコックピットを貫く。

ジジジ．．．ドオオン！！

そんな音を立てて、リアルドが爆散する。

これで本当の意味で、今回の俺達の“敵”であったユニオンのMS部隊は全滅した。

同時に、左手のリニアライフルも弾が切れる。

．．．．．今無意識に引き金を引いたけれど、もしも弾が切れていたらどうなっていたんだろうか？

そう思い、今更ながら肌に鳥肌が立った。

．．．．．あ、危なかったあああああ！

うん、まだまだ俺も未熟だな。うん、もっと修行しないとな。うん。

『な．．．．あ．．．？』

不意に聞こえてきた声にハツとする。

声の一つでも掛けるべきかと思ったが、そのときリーダーに此方に近づく光点を見つけた。

同時に脳裏に甦る師匠の言葉。

•

ヤバイ

•
•
•
•
•
•

ヤバイヤバイ

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

. ヤバイヤバイヤバイヤバイ
 ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ
 ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ

やばい！マジでヤバイ！！こんなま帰ろう物なら一機に俺の命はレツドゾーンだ！

白！

下手をすれば何時の間にか取り付けられていた自爆装置が発動

なんて事になりかねん！！

如何する！？如何すればいい！？如何すればいいのさ俺ええええええ
え！！！！！！？？？？？

「ラ・・・・・・・・」

□ ?
ら ? □

ラ
・
・
・
・
ラ
・
・
・
・
・

「ライフカアアアアアアドオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

とりあえずあの後慌ててとある家系に代々伝わる戦術を使い、その場を有耶無耶にして、ひいこら言いながら、このミッションのために経済特区の日本のあるマンションに作られたアジトに帰ってきてから、師匠に言われたのは次の一言だった。

『とりあえずペナルティとして、今度は第三世代のガンダムも含めた“地獄の修行” 逝ってみようか』

ぎゃーす

二話

戦闘に介入してみました（後書き）

どうも雑炊です。

今回はオリキャラとオリガンダムを出してみましたか……。如何だったでしょうか？

因みに今回は戦闘の件だけで、10数回書き直しました。
……。その結果がこれです。本当にすみません。
この機体の設定等は、そのうち詳しく書こうと思います。オリキャラに関してはストーリー中で説明していこうと思います。

で、今回はGNABCマントについての説明を。

性能に関しては、要するにクロスボーンのABCマントのOO版と思ったださって結構です。見た目もあんな感じ。以上！

ではまた次回

三話

同居する事になりました（前書き）

第三話です。

今回は計画の発動と、マイスターとの接触です。
それでは本編をどうぞ。

三話

同居する事になりました

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
死ねる・・・・・・・・・・・・・・・・」

そう言つて俺はアジトのテーブルに突つ伏した。

あの後、師匠はマジで俺にあの“地獄の修行改”をやらせ、俺はそれを甘んじて受ける事となった。

・・・・・・・・結果として3日位シミュレータから出られなくなつたのだが。

で、今俺が何処にいるかと言うと、今は日本のとあるマンションの中にある一室で寝泊りしている。

ひよんな事から、お隣さんと関わりを持ってしまったが・・・・まあ其処まで大した事ではない。

さて、そんな感じで死んでいると、不意にテーブル上の通信端末から音が鳴つた。

どうやら誰かから通信がかかってきたようだが・・・・ハッキリ言つて、もう誰が掛けて来たのか容易に想像がつく。

溜息を吐きながら通信端末を起動させる。案の定出てきたのは師匠だった。

『やあ。いい感じに死んでいるようだね』

「・・・・・・・・・・・・・・・・だれのせーだ・・・・だれの・・・・・・・・」

師匠のからかいに力無く返す。

実際もう疲れすぎて脳味噌がまともに動いていない。

するのは好きではない。

だと言うのに、その自分自身がそんな事を言っただけなのさ。

頭を振ってから、少しでもそんな事を考えた自分に自己嫌悪していると、師匠がこんな事を言ってきた。

『そつえば、計画の発動までもう一週間を切った所だが、そつちでの暮らしはどうだい？』

「んあ？」

珍しい。普段はこんなことは師匠が言う筈がない。大抵こういう時は決まって「頼み事があるんだけど」とか、「戻って来る時にこれをお土産として買ってきて貰いたいんだが」とか言い出すのだが、こんな風に単純にこつちの近況を訊いてくる、と言うのは滅多に無いのだ。

こういう時、間違って「師匠。頭でも打ったか？」等と聞いてしまうと、普段の数倍キツイ頼みごとが待っているの、突っ込みたい衝動をグツと堪えて敢えて普通に応答する。

「ああ、特に問題は無いよ。精々お隣と友好的な関係持った位だ」

嘘だ。実は数日前に、とある不良グループとイザコザを起こしてしまい、あまりにうつとおしかった為、ヴェーダの機能をこっそり使って、奴らのメンバーを末端に至るまで調べ上げて一人一人懇切丁寧オハナシに説得したと言う事があった。

そのときのイザコザにお隣の弟さんと、その彼女も巻き込んでしまった。

お隣との関係も其処からだ。

が、その事を素直に喋っても面倒なことが起きるだけなので、ここ

は伏せておく事にした。

『ふうん……まあ、いいけど。ところで、今君が住んでいる部屋には、まだ空き部屋があった気がしたんだが？』

………うん？

なにやら雲行きが怪しくなってきたぞ？

第一師匠、何故このタイミングでそんな事を訊く？

頭の中で鳴り始めた警鐘を気にしつつも、どうせ誤魔化しても意味が無い事は分かっているので、正直に俺は質問に答えた。

「ああ。一応一部屋位しかないが、これ位の広さだったら後二人……いや、無理すれば三人位は……」

ここで師匠の笑みが深まったのを目撃した俺は一瞬固まった。

もうこの時点で嫌な予感が物凄い事になっているが、ここまできたら言い切ろうが言い切らなからうが一緒なので、俺は一端止めた言葉を再び紡ぎだした。

「………三人、くらいは住めると思い、ます」

『何で敬語になるんだい？』

そりゃ、アンタの笑顔が嫌な予感的な意味で怖すぎるからだよ。とは言えず、乾いた笑いでその質問に返す。

それを見た師匠は一瞬不機嫌そうになったものの、直ぐにいつもの表情に戻った。

『まあ、いいか。それよりも三人は住めるんだね？それはよかった』

「・・・・・・・・良かつたって、何が？」

うん。もうお約束になってきたこのパターン。いい加減にしてくれ、と声に出して叫びたいが、無論後が怖いのでグツと我慢する。・・・・今情けないか思ったり言ったりした奴。後で体育館裏に来なさい。先生とお話だ！！

そんな俺の内心の叫びに気付かないまま、師匠はその言葉を言った。俺にとってのある意味での死刑宣告を。

『実は実働部隊のマイスターの内の二人が、当分の間だけどそっちに滞在する事になったんだ。それで早急に部屋を探す必要があったんだけど、それなら安心だ。引き受けてくれるね？』

・・・・Oh、じーず。または、がつでむ。神様。俺何か悪い事しましたか？

あれから数日が経った。

その日俺は、お隣に住んでいる沙慈・クロスロードと、そのガールフレンドであるルイス・ハレヴィに半ば無理矢理表に連れ出されていた。

因みに連れてこられた理由は『荷物持ち』・・・

・・・聞いた瞬間に「帰って良いか？」と言ってみたが、ルイスは「だめ」と言うだけで全く取り合ってはくれず、沙慈は乾いた笑いを漏らすだけだった。

そんなこんなで、三件目のブティックを出た位の事だった。

「……地球で生まれ育った、全ての人類に報告させていただきます。私達は、ソレスタルビーイング。機動兵器“ガンダム”を所有する、私設武装組織です……」

そんな歳をとった男の声が、町中から聞こえてきた。

俺達の正面にあるビルに取り付けられた街頭テレビにデカデカと映し出されるのは、CBの創設者“イオリア・シュヘンベルグ”の演説。

街行く人たちは皆足を止め、その演説に戸惑いを見せている。

「……………」というよりも実感が湧かないんだろう。

だって、一応CBの一員である俺が聞いていても、何処と無くイメージが湧いてこないんだもの。

そりゃ、いきなりガンダムなんて物を出された上に“紛争根絶”なんて夢物語とも思えるような物を掲げられても、普通の人間だったら実感なんて湧く筈がない。

「沙慈……………」

俺の左前方を歩いていたルイスが、沙慈に心配そうな声を掛けて歩み寄る。

沙慈もそんなルイスをゆっくりと引き寄せる。

「……………」どうでもいいけど、こんな往来で、しかもこんな状

況でいちゃつくんじゃねえバカップル。

周囲の注意が殆どイオリアのおっちゃんの演説に向いているとはいっても、一部の人間はこっち見てるぞ。

っーか実感とはまた違ったドス黒い物湧いてくるからいい加減にやめろ。

内心でそんなしょーも無いことを呟きつつも、俺はイオリア・シュヘンベルグの演説に耳を傾けていた。

西暦2307年。この日この時より、地球上に存在する殆どの文明は大きな変換点を迎える事となった。

その先駆けとなったのは、プトレマイオスのガンダムマイスターたちが駆る、太陽炉を搭載した5機のガンダム。

そしてサポート組織であるフェレシュテが保有する太陽炉の内の1個と、それを動力とする5機のガンダム。

そして……………

「……………そういえば今日の夕飯どうすんべ……………スーパーって今開いてっかな……………」

「？」

「何でこの状況で夕飯の心配なんかできるの！？」

「いやいや。むしろこんな状況でいちやつけるお前らにこそ、その言葉を送りたいよ」

「……今ここでこんな状況だというのに夕飯の事を心配し、尚且つ友人達と漫才をしている、一見すると普通の一般人にしか見えない少年が保有（？）している、出自不明の太陽炉を搭載する『^{リスト・ガンダム}ガンダム』だった。」

それから三日後。
ソレスタルビーイングのアジト（表向きはアムロの家）。その玄関の前。

其処にはアタツシukeースを持った、二人の少女が静かに佇んでいた。

一人は沙慈やアムロと同じく日系で、年の頃は大体17、8歳といったところだろう。

背も高く、175cm位はありそうだ。

しかし肌の色は白く、髪が黒くなかったら白人と言っても通りそう
だ。

彼女はその長く伸ばした黒髪を、首の後ろで束ねていた。

もう一人は肌が浅黒く、見た目も何処か少女と言うより少年っぽい感じがする。

辛うじて服装で女の子と認識できるが、髪型がボーイッシュということもあり、男物の服を着ても特に違和感が無さそうだ。

此方は前述の少女とは対照的に、背は160cm程しかなく、アタツシukeースもかなり小さい。

年の頃は・・・大体15、6歳位だろうか？

「・・・刹那。本当に、荷物それだけで良かったのか？」

日系の少女が、浅黒い肌の少女に問いかける。

どうやら彼女の荷物が異様に少ない事を心配しているらしい。

「大丈夫だ。問題無い。必要最低限の物は持ってきてある」

それに対して浅黒い肌の少女　刹那は言葉少なく返す。

それっきり二人の間に会話は無くなった。

1分か、5分か、10分か・・・このまま永遠にこの無音空間が続くのではないか？そんな事を日系の少女が考え始めたくらいだった。

「……ユリ。押さないのか？」

突然刹那が日系の少女　ユリに問いかけた。

問いかけられたユリは、一瞬彼女が何を言っているのか分からなかったようだが、すぐにその意味が分かり、顔を赤くした。

確かにこんな真昼間から、人の家の前で未成年の少女が二人、何分も佇んでいたら怪しいことこの上ない。

ユリは慌てて目の前の玄関の脇にあるインターホンを押した。

ピンポーン

そんな音が鳴り響く。

と、次の瞬間。

ジリリリリリリ！！ジリリリリリリ！！

ガタッ

ガゴッ！！

ゴッガッ

ガン

ゴビン！

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ………
ビッターン！！！！

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
ダ
ダ
ダ
ダ
ダ
ダ
ダ
ダ
ダ
ダ
！！！！

コ
ッ
ン

ズザザザザザザ！！

ゴトン

ツホワアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！

! ! ! ! ! ! ! ! ! !

ホワッ
ホワアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！！！

ゴツチーン

アッ
――！！！！！！

[illegible]

と、そんな音が聞こえてきた。

[illegible]

二人は何も喋らない。否、喋れない、と言つたところだろう。何せ今日から潜伏する場所に既に入っていたエージェントを呼び出そうとしてインターホンを押したら、中から聞こえてきたのは、何かがずっこける音、何かを打ち付ける音、転がる音に壁に激突した音。

極め付けは走つて来るような音がしたと思ったら、なにかが軽くぶつかったような音がして、とんでもない声量の叫び声が聞こえて来たのだから。

よく見ると二人とも大量に冷や汗をかいていた。

そのまま数分間ほど周囲を気まずい空気と沈黙が包む。

そしてユリがこの空気に耐え切れず、意を決してもう一度インターホンを押そうとした時だった。

ガチャっという音が鳴り、玄関が開く。

其処から出てきたのは……………

「……………はいいらっしやい。師匠の言つてたホームステイの二人が……………とりあえずずっとそこに居るのもどうかと思うから中に入りなさい。丁度昼飯の時間だし……………」

……………頭を抑えながら凄くやる気の無い声で喋る、刹那によく似た彼女と同じくらいの少年だった。

彼の姿に二人は呆氣に取られる。

「……………何をしている？」

そう言つて訝しげに此方を見てくる少年。
ユリと刹那は慌てて中へと入っていった。

「着替えはその筆筒の中に入れておけ。どうせ幾つか棚は余っているから好きに使っても構わんぞ。それが終わったら早速昼飯を………って、追い待てお嬢。幾らなんでも荷物少な過ぎないか？服とかはどうなっているんだ？」

「問題は無い。必要最低限の物は入れてきた」

私がそう言つと、私に良く似たエージェントの男は溜息を吐きながらこう言つた。

「……ハア。それじゃダメなんだよ。確かに最低限の物があれば活動に支障は無いだろうが、君とあつちの姉ちゃんは少しの間とはいえ、当分此処に住むんだぞ？男ならそこまで問題じゃないが、君みたいな可愛い女の子が、そう毎日同じ服ばかり着てたら逆に怪しまれる」

そこまで言つてから、男は「まったく………」と言いながら私の荷物を探る。

「……よく分からない。」

確かに言っていることは一理あるのだろうが、何故私が毎日同じ服ばかり着ていたら怪しまれるのだろうか？

そのまま男は荷物を探っていたが、暫らくすると動きを止めてゆっくりとこつちを振り返ってきた。

「……おい」

「？　どうした？」

「・・・いや、マジでお前の荷物ってこれだけか？」

「ああ、そうだが・・・何か問題でもあったのか？」

「・・・」

そう私が返すと、男は突然頭を抱えて俯いた・・・

私が少し不安になりながら彼を見てみると、部屋の奥からユリが出てきた。

どうやら荷物の整頓は終わったらしい。

彼の様子に気付いたのか、不思議そうな顔で此方に近づいてきた。

「・・・刹那。彼は一体どうしたんだ？何か困っているようだが・・・」

「・・・分からない。どうやら私の荷物に何か不備があるという事は分かった・・・だが、それが何なのか分からない。本当に分からないんだ。あれほど何度も再チェックを重ねた上に、あのティエリアにも不備が無いか確認を取ったというのに・・・」

「・・・そうか・・・って待て？確認を取った、と言ったな？もう一度、誰に確認を取ったのか、ハッキリと教えてくれないか？」

私の答えに一瞬納得したような素振りを見せたユリだったが、次の

瞬間何かを聞き間違えた、といった風に、再び私に質問してきた。それに対して、私は特に誤魔化す必要も無い為、正直に話す。

「ティエリアだ」

と。

それを聞いた瞬間に、ユリも彼と同じく頭を抱えた。

「……刹那。今度からそういった荷物を人に見せる場合は、あいつ以外の人間に見せる。それこそロックオンやスメラギさんとかにしておけ。じゃないといつか痛い目見るぞ……」

そう言つて溜息を吐くユリ。

「……どういう事なんだろうか？

何故ティエリアはダメで、ロックオンやミス・スメラギは良いのだろうか？

「……よし、決めた」

私が疑問に思っていると、彼が突然そんな事を言った。

「……一体何を決めたのだろうか？

彼がゆっくりと此方を向く。

その顔には少しの決意と、諦めが浮かんでいた。

「……この後昼飯を食べたら、ここらへんの地理の把握も兼ねて、お嬢の服を買いに行く。流石に“女の子”として“お嬢の服が下着とかも含めて、今着ているのを含めても各2着しかない”のは、問題がありすぎる」

私の後ろでユリが盛大に溜息を吐く音が聞こえた。

何故溜息を吐く？荷物を最小限にしたのは、やはり不味かったのか？

「……………神よ。出来ることなら聞いてくれ。出来ることなら私は貴方を今すぐ愛弓でぶち抜きたい……………」

……………ユリ、何を言っているんだ？

神はこの世にはいないんだぞ？

三話

同居する事になりました（後書き）

いかがでしたでしょうか？

どうも雑炊です。

今回は一応日常パートということで、戦闘シーンは無しです。
次回は日常と戦闘パートを半々位にしようと思います。

・・・しかし流石にテスト終了直後の疲れた頭で書くと、やばい
ですね・・・

果たして刹那の口調はこれで合っているのか・・・（汗

とにかくまた次回！

四話

買い物しました。ついでにちょこつとミッション行ってきました。

今回は外伝からちょこつとだけあのキャラが登場です。

それと少しのキャラ崩壊もあります。

それが駄目という方は気を付けてください。

それでは本編をどうぞ。

四話 買い物しました。ついでにちょっとミッション行ってきました

前回までのあらすじ

アムロ、ガンダムマイスター二名と同居開始 あれれ？おかしいなあ？一名荷物が少なすぎるよ？ 服が無さ過ぎるぞ・・・

・（汗 デパートに買いに行きますよー 今此処

・・・これは一体どういうことなんだろうか？

そう思いながら目の前の光景に頭を抱える。

あの後、私と刹那は周辺の地理の把握を踏まえて、刹那の服を買いにエージェントの少年 確かアムロと言ったかな と共に、デパートに来ていた。

で、今は刹那の服もある程度買い終わり、食料品も買ったので帰ろうとしていた所だったのだが・・・

「
・・・
」

・・・この様に、突如としてアムロがとある物の売り場の前で、ある一点を凝視したまま動かなくなってしまったのだ。
何度か声を掛けたものの、全く動かない。

それが今から10分前。
流石に見かねたのか、

「このままでは今後の活動に支障が出る。私が連れ戻してくる」

と言って彼に近づいていった刹那が、そのまま彼と同じ状態になったのが、今から5分前の事だ。

「……………おい二人とも……………そろそろいい加減にしてくれないか……………」

……………反応は、無い。

……………泣いてない。泣いてないからな!?

いつそ此処まで綺麗に無視されたら、気持ち良くなってくるぞ!?
……………ごめんなさい。本当は少しだけウルツと来ました。

「……………にしても、二人とも何を見ているんだ?」

思わず口に出してしまったが、本当に気になる。

あのアムロという少年とは今日が初対面だからどうかは分からないが、刹那とはそれなりに付き合いがあるので、大体その性格は把握している。

彼女の性格は、簡単に言えば“無口な超ガンダム馬鹿”だ。

以前彼女の目の前で思わず口走ってしまったが、そのときは今まで見た事が無いくらいに満面の綺麗な笑顔を浮かべていた。

……………どうやらガンダム馬鹿と呼ばれた事が物凄く嬉しかったらしい。

……………そのガンダム馬鹿が、あそこまで惹かれる物とは一体

何なのだろう………？

流石に物珍しく思った私もだんだんと彼らへ近づいていった。

………因みに此処は何処かというと、デパートの二階にあつたおもちゃ売り場の、ゲームソフトのコーナーだ。

………結論だけ言わせて貰おう。結局私もそれに魅入られて、その後三人で50分くらいその場に立ち続けてしまった。

因みに私達が1時間と5分間ずっと見ていたそのゲームの名前は『スーパーロボットジェネレーション VS：MAXON』という名前だった。

………パッケージにガンダムに良く似た機体が書かれていたが………刹那。お前が立ち止まってた理由って、まさかソレじゃないだろうな？

………迂闊だった………

まさかこんなもんが売られていたとは………

「……ええ、買いましたとも。買いましたともさ!!
だっしょうがないじゃん!このゲームなぜか知らんけど師匠が結構気に入っていて、ソレスタルビーイング号の中に第一作から全部あるんだもん!ヒマな時に誰かがやり始めると、そのまま強制的にトーナメント開始ですよ!?師匠と俺とブリング兄さんとデヴァイン兄さんなんか、ほぼ全部の機体の全コンボ制覇してるからな!!
そんだけやり込んでんだから最新作出てたら買っしかないじゃないか!!!???」

「……失礼。」

と、言うわけで、アジトへと帰ってきてから、即行で夕飯を作って食い、マイスターの内の一人の刹那の服のお披露目会をした後、買って来たゲームを早速プレイしているわけだが………

「……ユリ……って言ったっけ?」

「ああ……」

「一つだけ訊いていい?」

「……なんだ?」

「………なんで射撃系の機体使ってるのに、わざわざ接近戦仕掛けてくるん?」

「……う、うるさいな!私はこういった戦い方が好きなんだ……ってああ!刹那!?後ろからブラックホールキャノンなんか撃つな!!」

「……シュツツバルトなどで接近戦を挑んでいる貴様が悪い」
「ですよー……と、ダウン寸前のところすまんが、スプラッシュ
ユブレイカーでとどめっ」と

画面に映る俺の機体 アシユクリーフの肩から青いボールが飛び出して、ユリの操るシュツツバルトに殺到する。

対するユリはシュツツバルトの右手に持たせたアサルトライフルで幾つかを打ち落とすが、やはり全ては無理だったらしく、打ち漏らしたブレイカーに当たってご退場と相成った。

と、此処でユリの所属しているチームの戦力ゲージが0となり、彼女の負けが確定した。

当の本人はボコボコにされたのが悔しいのか、地団太を踏んでいるが、個人的な意見を言わせて貰うなら、基本中距離〜遠距離戦向けの機体であるシュツツバルトなどで勇猛果敢に接近戦を仕掛けて来るなど言うもんである。

因みに今の状況は、とりあえずアーケードモードをスーパーアースゲイン等で何回か回った後、隠し機体を全部出した状態で今はフリーバトル祭り第15ラウンドといったところか。

なお、最大で8人对戦が可能なこのゲーム、主な対戦方式は個人戦かチーム戦。基本的なルールとしては、全員1000のコストゲージが表示され、そのコスト分がなくなったら負けとなる。

因みに、ゲージがまだ残っている場合は何度やられてもまた復活できる。

ただしゲージの残りが使用している機体のコストよりも足りなかった場合は、再出撃時に自機の体力が半分以下になってしまう。

今俺が使っているのは、本作品中全体的にバランスの良い性能に仕上がっている“アシユクリーフ”だ。

コイツは、今さっき使った遠隔兵器の一つであるスプラッシュブレイカーに加え、高出力ビーム砲のビットガン。威力、飛距離、命中精度ともに申し分ないビームカービン。更に近接専用のビームセーバーに可変機構まで搭載していると言う、全体的に射撃系よりの機体だ。

だというのに、コンボの殆どは格闘攻撃から入るものが殆どで、最初期の作品から使っている俺に言わせて見れば、“射撃系機体の皮を被ったバリバリの格闘系機体”である。

対する刹那が使っているのは、ヒュッケバインという機体だ。コイツはブラックホールキャノンという必殺武器がある以外は、基本アサルトライフルとビームセイバーといった基本的な武装しか持っていないため、初心者にも扱いやすい仕様になっている。

が、その分コンボの数が半端ではなく、直前の行動をキャンセルして別の行動が出来る行動キャンセルというシステムを持っているため、使いこなせるとかなりの強機体と化す。

しかもブラックホールキャノンは、出が遅い代わりに威力と範囲が半端ではなく、特定のコンボから止め技として繋がれると、ハッキリいって殆どの機体はそれだけでワンキルされてしまう。

……顔がなんとなくガンダムに似ているのは気のせいだろう。うん。

因みに師匠がよく使う機体は、意外な事にスーパー系の“スーパーアースゲイン”。もしくは“ゲシュペンストMk-2タイプS”か、“バンプレイオス”と言った俗に言う“スーパー系”の機体が多い。本人曰く「必殺技が格好いいじゃないか！特に蹴り技が！！」との事。

あと、低確率で“ダイゼンガー”を使ってくるが、これで勝った後、師匠の顔は何故か物凄く劇画チックになる為、本人は気にしないが周りが気にして彼にダイゼンガーを使わせようとしなない。（因みに

原因は不明)

そういえば先日連絡したときに、自分専用のスーパーロボットを作るとか冗談だった気が……本当に冗談だよな？

他の皆の機体も挙げていくと、

ヒリング姉さん：基本的に“ビルトシュバイン”。ただし状況に応じて様々な機体を使用。大体接近戦を挑んで来るので、いつも遠距離武器でボコボコにされている。

リヴァイブ兄さん：“グルンガスト三式”、または“スレードゲルミル”を使っている。このとき、彼は何故かドリルブーストナックルを凄い頻度で多用し、しかもこの時だけ人が変わったかのような熱血キヤラになる。しかし何故か斬艦刀やシシオウブレードといった武器はあまり使わない。

ブリング及びデヴァイン兄さん：二人とも何故か確実に“R-2”を使用する。しかし、ハッキリいつて何に乗っても高確率で勝ちを攫っていくので、R-2を選んでいるのはただ単に好みだからだと思われる。俺の知る限り二人よりも強い人ってあまりいないと思う。

リジエネ兄さん：強機体の一つに数えられる“ダークブレイン”や、“アストラナガン”。“デイス・アストラナガン”や“ツヴァイザーゲイン”や“ケイサルエフェス”等を多用してくる。が、毎度の事のように一番最初に負けてボコボコにされる。特に師匠が敵にいる際には、速攻で彼の使っている機体を師匠が潰しにかかるため、下手をするといつの間にか負けていたなんて事が無くはない。多分一番下手。

グラীবេさん：“アルトアイゼン”系統の機体を多用してくる。が、

ある程度様子を見てから突っ込む癖があるので、そこを狙われて撃墜される事が多い。

ヒクサーさん：“ヴァイスリッター”などの狙撃系機体を使ってくる。基本的に格闘はしない主義の人。グラーベさんと組まれるとともえげつないコンビネーション戦法を見せてくる。

と言った感じが・・・って!!

「ブラックホールキャノン・・・発射!!」

「でえええええええええ!!」

ちよつと物思いに耽っている間にチャージしていたのか、刹那がブラックホールキャノンを打ってきやがった!

咄嗟に変形して逃げるが、そこを狙っていたのか、刹那のヒュッケバインはキャンセルダッシュを使って発射をキャンセルしながら此方へと突っ込んできた。

「チッ! ^{ハナ}最初から ^{コンボ}コイツが狙いか!」

「可変状態からでは格闘攻撃へ対処は出来まい!」

そう言いながら刹那はビームセイバーで切りかかってくる。確かにこの戦法は可変状態の機体に対しては結構有効だ。だが・・・

^{アシユクリーフ}「コイツに対してその戦法はミスだ!」

そう言いながら、俺はスプラッシュブレイカーを射出する。

この武器は基本的に近々遠距離までオールラウンダーに使える武器なので、こういう時に役に立つ。

それを見た刹那は慌ててキャンセルダッシュで距離を取るが、元々追尾機能のあるスプラッシュブレイカーは、そのままヒュッケバインを追いかける。

その間に俺はアシクリーフを人型に戻し、必殺技のチャージを開始しておく。

「私に・・・触れるなっ!!」

チャージが半分くらい経った所で、今まで逃げていた刹那が反撃に出た。

ヒュッケバインにビームセイバーを持たせた後、ロックをアシクリーフから、自身を狙っていたスプラッシュブレイカーの一つへと変更。

そのままタイミング良くセイバーを振るってスプラッシュブレイカーを切り払いながら、こっちへと再び突撃してきた。だが

「・・・・掛かったな？」

既にこっちのチャージは

「っ!!しまった!!」

「さあ景気良く

」

完了している!

「吹っ飛べやあああああ!!」

次の瞬間、アシユクリーフを中心に青い波動がフィールドに広がる。これがアシユクリーフの必殺技である、“スプラッシュブレイカー（MP）”である。

この技は一度発動すると、この様に青い波動がフィールドに広がり、その範囲内の敵に大ダメージを与え、運が良ければ、そのままコンボに発展できる。

今回はギリギリ範囲内という部分だったのでコンボには繋がられなかったが、まだビットガンがある。

俺がそれで止めを刺すために、武器を構えると、向こうもこの距離では間に合わないと判断したのか、咄嗟にブラックホールキャノンを構える。

そのまま両者は手に持った砲門から光を放つ。そして

1P：WIN！！

「っしやああああああ！！見たかああああああ！！これが素人と玄人の違いじゃあああああ！！！！」

結果は俺のアシユクリーフの体力が残り10%以下ギリギリで残り、刹那のヒュッケバインが撃墜され、彼女の戦力ゲージが0になった事で俺の勝利となった。

喜び過ぎだ？

馬鹿野郎。もしこれが師匠だったらどこぞの悪役の如く「フフフフフフ・・・フハハハハハハ！ハ！ハッハッハッハ！」などと高笑いを上げながらこちらを見て来るんだぞ。これぐらいはまだマシである。

「私は・・・ガンダムには・・・なれない・・・orz」

刹那がそう言いながら床に倒れ込む。

というかお前、やっぱりヒュッケバインをガンダムと認識していたな？

そのネタは色々と危険だから今度からやめるように。

心の中でそんな事を言いつつ、次の試合の準備をしようとする。

「なあ」

と、ユリに止められた。

「ん？どした？」

「いや、熱中していて今まで気付いていなかったのだが・・・」

そう言いながら彼女は窓の外を指差した。

なんぞや？と思いながらも、彼女の指の先へと目を向けると・・・

ピピピピ・・・

「許さぬ」

そう言いながら僕の隣にいる人物 リボンスは険しい顔で腕を組んでいた。

「……まあ、確かにその気持ちは分からないでもない。
分からないでもないのだが……」

「許さぬ」

「……そろそろそうやって怒るの止めたらリボンス？まあ、あのゲームの最新作先に彼に買われて悔しいのは分かるけど……」

僕がそう言つと、リボンスは僕の言葉を鼻で笑つてこう言つた。

「ハッ。そんなみみっちい事で、僕がここまで怒るとでも？」

「……じゃあ何で怒つてたのさ？」

「そんな事簡単さ」

そう言うってから、彼は少し溜めた後、目をカッと見開いてから、

「スーパースゲインは僕が一番上手く使えるんだあああああ
あああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

[illegible]

と叫んだ……つて。

「ハア！？そんな事で君は今までに怒ってたのかい！？」

「当たり前じゃないカリジエネ・レジエッタ！ スーパーアースゲインは僕が一番上手く使える事など君達にとっては周知の事実だろう！？ だというのに彼はそれを使い、あまつさえそれでアーケードモードを最高難易度でノーミスでクリアするなど……！！」

「……君、この間彼の使うスーパーアースゲインに負けてなかったかい？」

「何か言ったかな、紫ワカメ!？」

「・・・・・・・・・・いや、何も言っていないよ。うん」

「・・・もう突っ込むのも面倒臭いので、僕は彼を放置する事にした。まあ、彼の怒りでいつも被害を受けるのは、基本的にアムロ唯一人なので、放置しておいても問題は無いだろう。」

「とりあえず・・・・・・・・」

「よし。とりあえず彼の部屋に、他のプトレマイオスのクルーを何人か追加で潜伏させるとしよう。それに彼の事だから、男を向かわせるよりも女の子を向かわせた方が彼にとっては大変だろうから・・・そうだな、とりあえずフェルト・グレイスと・・・ヒリングを追加させて、それから・・・ブツブツブツブツブツブツブツブツブツ・・・」

「リボンズ? あんまり彼を虐めないであげてね? 下手したらフラグ乱立させて凄い修羅場になっちゃうかもしれないし・・・」

「どうやってアムロを困らせられるか考えているリボンズを止める事にしよう。」

「修羅場? 修羅場だと!? そうかその手が・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ・・・」

「・・・・最近思うようになったけど、君とアムロってホントに似てきたよね、その変な思考回路」

「ハッ。ヘッポコゲーマー紫ワカメの君如きが何を馬鹿なことを・
・」

「・・・・・・・・」

・・・・・・・・あつたまきた。

「・・・・・・・・よしりボonz。今からスパジエネVS：MAXON買
つてくるから勝負だ。今日こそ僕のツヴァイで冥府魔道へ落として
やる」

「そつちこそ、僕のゲシユペンストで蹴り潰してあげるよ？」

「その言葉、忘れるなよ？」

そつ言いながら僕は踵を返す。

上等だよりボonz。今日こそそのニヤケ面を絶望に染めてやるよ。

「……なんだ？今の電波？」

何か師匠とリジエネ兄さんが言い争っているような気がしたけど……

「……どうしたの？」

「……いや？別に？」

「その間は一体何なのよ……？」

あの徹夜事件から大体1週間くらいが経った。

今俺は中東でとあるミッションを遂行している、ソレスタルビーイングのサポート組織『フェレシユテ』、そこが所有している“ガンダム”の様子見に向かっていた。

勿論乗っている機体はOガンダムだ。GNABCマントも頭からすっぽりと被っている。

因みに今回はヒリング姉さんが“GNセファール”で同行してくれている。

え？刹那とユリはどうしたって？二人は2、3日ほど前に、次のミッションの為にブトレマイオスへと戻っていった。

「……と。姉さんそろそろポイントに到達するから準備して」

『はいはいっと……んじゃ、ドッキング始めるわよ』

姉さんの言葉と共に、GNセファールの後部ブロックが、機首と分離する。

そのまま後部ブロックはOガンダムとドッキングし、コックピットのモニターの一つにドッキングが完了した事を告げる画面が表示さ

れる。

これが最近Oガンダムに追加された、GNセファアとのドッキング形態。

その名も“Oガンダム・S”^{セファア}である。

これは元々“ガンダムラジエル”の支援機として作られたGNセファアを、他の機体にもドッキング出来ないかテストする為の形態で変わった事と言えばGNプロトビットが2つ使えるようになり、セファアの後部ブロックはそのままGNコンデンサーと同じ働きをしてくれるので、せいぜいGNビームガンの威力がちょっと上がるだけである。

……つまりちょっと強くなるだけで、そこまで元々の性能に変化は無い。

……しかも元から付けられていたマントのお蔭で、その見た目は結構不恰好な物になっている。

……が、文句は言えない。

『ちよつと、あれじゃない？』

GNセファアに乗っていた姉さんが何かを見つけたらしい。

見れば近くの岩山から黒煙が上がっているのが見えた。

……うん、どう考えてもあそこだな。

「姉さん。おそらく姉さんの言う通りターゲットはあそこだ。俺がステルスモードで先行するから、後からゆっくりと来てくれ」

『はあ？何言ってるの？あたしが人間如きに負けるわけ無いでしょ』

……いや、ね。

「・・・・・・・・戦闘機で戦う気ですか貴女は？」

『うつ・・・・・・・・』

これが姉さんの悪い所だ。

イノベイドという人よりも高い能力を持つ存在の所為か、彼女は基本的に身内以外を見下す傾向がある。

実際俺も会ったばかりの頃は見下されていたし。

因みに彼女が俺を見下さなくなったのは、模擬戦で二回勝ったぐらいだから・・・・・・・・大体5〜6年位前か？

ま、何はともかく・・・・・・・・

「ハ口。敵とターゲットの機体識別しといて。それなら最悪戦闘になつてもある程度は対処できる筈だ」

「ソコマデワカラン」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ、そ」

・・・・・・・・何だかなあ・・・・・・・・

今俺が声を掛けたハ口は、何だか何時の間にかガンダムに乗っていった奴だ。

色は明るい黄緑色で、目は他の奴と同じく赤い。

それだけではなく、こいつは他のとは違い、小さいが手足があり、単独で飛行できたりと結構多機能で高性能だ。

元々は、俺が地上へと降りる前に、ガワと中身の部品だけ貰って個人的に作っていた物だったのだが、どうやら師匠が面白半分に色々つぎ込んだ後、完成させてしまったらしい。

因みにこれが乗っている事に気づいたのは、今回のミッションの為にガンダムに乗り込んだ時だ。

話を聞く限り、この間の実働部隊の監視の時には既に乗っていたらしいが……全く気付かなかったorz

……と、落ち込んでる場合じゃないな。

「ハロ。ステルス実行。ただし完璧にはし過ぎるな？」

「アムロ、ナンデダ？ナンデダ？」

「さあ？何故でしょう」

そう言いながらステルスが発動した事を確認した俺はOガンダムを飛ばした。

「……こりゃー酷いな……」

ターゲットがいると思われるであろうポイントに到着した俺の目に飛び込んできたのは、人革連のものと思われるMSの残骸。そして、指揮車が今まさにビームに打ち抜かれる瞬間。

そしてそれを行っていたのは、

血に濡れたかのように全身を紅く染めた、

エクシアに似た機体。

「・・・あれが“アストレアType F”・・・“フォン・ス
パーク”の駆る・・・“フェレシユテ”保有のガンダムか・・・
・・・」

ソレスタルビーイングのサポート組織である“フェレシユテ”は4
機の“第二世代のガンダム”を保有しており、その内の3機を偽装
して使っている・・・らしい。

で、今俺の目の前で暴れに暴れまわっていた紅く塗装された機体が
エクシアのプロトタイプとなった“ガンダムアストレア”である。
本来は白を基調として、所々が青い機体なのだが、今はフェレシ
ユテが保有していると言う意味と、偽装の役割も兼ねて紅く塗装され
ている。

で、その肝心のアストレアはそのまま気が済んだかのように、それ
へと飛んで行こうとした。

・・・そう、飛んで行こうとしたのだ。

が、突然空中で体勢を整えたかと思うと、アストレアはそのまま手
に持ったビームライフルを構えると、そのままそこからビーム弾を
放つ・・・って！

「な！？まさか！？」

ハッとしてビームの行く末を予測する。

するとその射線上にあったのは、姉さんの乗っていたセファアの機

首部分だった。

・・・・・・・・マズイ!!

そう思った俺は、咄嗟にビームガンから同じ様にビーム弾を放つ。打ち出された弾は、上手い事ライフルの弾へと直撃し相殺する。が、ホツとする間もなく、アストレアは此方を見つけたのか、GNビームサーベルで此方へと切り掛かってきた。

「ウツ!?!」

あまりに咄嗟の事だったので、思わずビームサーベルでそれを受ける。

そのまま両者は拮抗し、動かなくなる。

先に動いたのはアストレアの方だった。

このままでは埒が明かないと思ったのか、此方のどてっばらを蹴っ飛ばしそのままビームライフルで此方に撃ってきた。

俺はそれをシールドで受けながら、ビームガンとGNプロトビットで反撃する。

因みにGNプロトビットは脳量子波の使えない俺の代わりに、ハロがコンピュータ制御によって動かしている。

が、師匠と俺のものはや魔改造としか思えない性能アップによって、その動きはイノベイドが動かしているのとはなんら遜色無い物になっている。

GNプロトビットとビームガンから放たれたビーム弾がアストレアに殺到する。

しかし当の本人はそんな物がどうしたと言わんばかりにそれらを避けながら、Oガンダムへと突っ込んでくる。

それを見た俺は、ビットでは対処できないと判断して、再びビーム

サーベルを抜き放ち、もう一度アストレアと切り結ぶ。

そのまま当分の間、また弾いて、射撃戦して、再びビームサーベルで切り結んで、といった攻防を繰り返していたが、流石に時間の方がおしてきたので、俺は頃合を見てシールドから煙幕弾とジャマーを発射し、そのまま全速力で離脱した。

流石にあれ以上戦闘を続けて消耗する気は毛頭無かったし、それ以前の問題にあのままだっていても勝ち目が一切無いと思ったからだ。因みに別に性能差で負けたとは思ってはいない。

第一世代の機体とはいえ、このOガンダムは結構強化されており、やろうと思えば第三世代のガンダムを一手に引き受けても、圧倒は出来ないにしろギリギリ一体くらいは大破できる程度に戦えるほどの性能は有している。

「……………だというのに勝てる気がなかった。

これは最早単純に言えば、腕の差。

つまりパイロットとしての技量が、向こうの方が遥かに上だと分かった結果だった。

実際先程の攻防で、Oガンダムは掠った程度とはいえ被弾している。

「あ……………クソッ……………」

そう言いながら俺はメットを外して頭をわしゃわしゃと掻き毟る。

そして、

「……………もっと強くなりてえなあ……………」

極めて自然に、そんな言葉が出た。

．．．．． 気に入らない。

あたしはそう考えていた。

本当は認めたくは無いが、あたしの弟的なポジションにいるアムロ・レイというガキは、はつきり言っただけであたしの身内の中では大好きなリボンスの次くらいにMS戦では強い。

だからこそ、今日遭遇した、あの赤いアストレアには腹が立った。

．．．．． 気に入らない。

それはあたしの乗っていたGNセファールのステルスが、見破られたというのもある。

だが、本当はもう一つ腹が立ったことがある。

．．．．． 見ていて分かった。

あいつはMSの腕はアムロよりも遙かに上だと。

．．．．． つまりそれはアムロよりも弱いあたし達一部のイノベイドよりも強いということだ。

．．．．． 気に入らない。

だからこそ腹が立つ。

アストレアのマイスターは元犯罪者の只の人間だったはずだ。
．．．しかし、その“只の人間”にアムロは負けた。

．．．．．気に入らない。

だから、あたしは、

．．．．．殺してしまおう。

アムロよりも先に、

フォン・スパークを、

潰してしまう事にした。

．．．．．何時になるかは分からないけど。

『．．．．．もつと強くなりてえなあ．．．．．』
．．．．．』

不意にそんな声が聞こえた。見ればアムロがメットを外して頭を掻き毟っている。

「．．．．ふふっ」

そんな彼を見てたら、なぜか少し笑ってしまった。
とりあえず戻ったら、アムロに思いっきりスイーツでも奢って貰おう。

だってあいつはあたしの弟で、

……あたしはこいつの姉なのだから。

「……………チツ、逃げられたか」

「センサーニ反応ナシ、センサーニ反応ナシ！！アンノウン撤退確認、アンノウン撤退確認！！」

「……本当にそう思うか？ハナヨ」

「センサーニ反応ナシ！！センサーニ反応ナシ！！帰還、帰還！！」

「……ハッ、わあつたよ」

あの所属不明のアンノウン……いや、GNセファールを取り付けたMS。

時々マントの隙間から見えた白い装甲や使っていた武器からして、カラーリングは変わっていたがおそらくあれは“Oガンダム”だと分かる。

元々はオレが今いる組織である“フェレシユテ”が管理する筈だったMSだ。

だが、実際にはイオリアじじいの計画が発動する少し前に保管場所が変更され、今の今まで行方不明だった筈だが……

「それにしてもあのOガンダムのパイロット、意外と頭が回るみたいだな……」

あのGNセファールのパイロットから感じた違和感はよく覚えている……あれは、オレ様がCBにスカウトされる前につけた違和感とまったく同種のものだ。

“まったく痕跡を残さない完璧すぎるが故の違和感”……あんな芸当ができるのは、あの黒髪のニイちゃんだけだと思ってたんだが……

……いや、それよりも問題はあのOガンダムのパイロットの方だ。あのパイロットは、おそらくその“完璧すぎるが故の違和感”を無くす為に、敢えてステルスに穴を作ったのだろう。

センサー自体には引っかけがなかったが、よくよく考えてみれば、視界の隅で極小さくだが何かはためいていたし、気になるか気にならないかのギリギリのラインだったが、微かにアストレア以外のMSと思われる駆動音もしていた。

GNセファールのパイロットから感じる違和感と、周囲の人革連のM

Sの残骸から聞こえる音に紛れて上手く隠れていやがったが……

「……………まあいいさ。オレ様が楽しめるんならな……………」

そうだ、シャルのやつに、今回オレを監視していたMSがOガンダムだと教えてやろう。

きつと面白い反応をするに違いない！

そう考えると、自然と俺の口からは笑い声が出ていた。

「あげやげやげやげやげやげやげやげやげやげや……！」

さあ！Oガンダムのパイロット！今度会ったときには今回以上に俺を楽しませてみる……！！

四話

買い物しました。ついでにちよこつとミッション行ってきました。

如何でしたでしょうか？

どうも雑炊です。

今回はちよつとほのぼののパートを入れるつもりで、あんなゲームを出してみました。

某所でチラツと見かけた気もするのですが………うん。そこらへんは出来ればスルーでお願いします。

でも実際にあつたらやってみたいと思いませんか皆さん？

因みに今回出てきたプレイヤー機体は、もう完璧に私の趣味です。スーパーアースゲインとかアシユクリーフとか分かる人いるのだろうか？

で、出ました外伝キャラ“フォン・スパーク”！本名“ロバーク・スタッド Jr”！

はつきり言つて口調が合ってるかすごく不安ですが、皆さん如何だったでしょうか？

というわけで今回はここまで。

実はまだ英語の和訳の宿題とかがあるので、こんな事してられない筈なんですけどね………

まあともかく！ではまた次回！

五話

同居人が増えました（不本意）（前書き）

とりあえず今回は戦闘シーン無しの日常パートです。

あまり本編とは関わりが無い………筈、です。

なのでスルーして頂いても大丈夫………かもしれません。

あと、今回はちょっと一部キャラ崩壊がありますので、そういうのはちょっと………と言う人は、完全にスルーしてください。

それでは本編をどうぞ。

五話

同居人が増えました（不本意）

アストレアとの戦闘後、散々姉さんにケーキやゼリーやアイスやタルトetc.etc.....

そう言った、所謂スイーツを奢らされ、俺の財布が凄く軽くなった頃.....大体午後の6時くらいだろうか？
やっとなこは俺はアジトへと帰ってこれた。

「つて、何でついて来てるんだよ姉さん」

「ん.....かわいい弟の生活調査とか？」

「マジ帰れ今すぐに」

何故か一緒に姉さんもついて来たが。

とりあえず姉さんに、同居人である刹那とユリを刺激するなど言っておいたが、口元に浮かんでいる笑みから察するに、ほぼ確実にちよっかいを出す気だろう。

別にちよっかいを出す事自体はそこまで悪い事ではないのだが、この人の場合はそれが行き過ぎた物になる可能性がある。

その結果大乱闘になったという事になったら目も当てられない。
幸いにも、今この家には姉さんも大好きなあのゲームがあるので、万が一の場合はあれで決着をつけさせる事も可能だろう。
そう思いながら、俺はアジトのドアを開ける。

「ただいま」

「ん？ああ、アムロか。お帰り」

「ああ、戻ったのか。アムロ、すまないがこのR-1という機体のコンボを覚えてくれないか。どうやってもコンボの△技がT-1inkソードかナツクルにしかないんだ」

「あ……えっ……と……お、お帰りなさい」

……………ん？

あれ？おつかしいなあ？今なんか声が三人分聞こえたような気がするぞ？

……よし。とりあえずまずは整理しよう。

最初に聞こえた声は、多分ユリだ。一番無難だったからな。うん。次に聞こえた声はほぼ確実に刹那だろう。

つか刹那。何勝手にゲーム起動させとるか。あと、R-1は合体技以外ではコンボの△はソードかナツクルしかないぞ？

………で、問題は………

返事もそこそこに、俺は早足でリビングへと向かう。そこには

黄色を主体とした特徴的なスーツとピンクの髪の少女がオドオドしながら佇んでいた。

チュドーン！！

「ああ！またやられた！？」

「甘い、甘いぞユリ。その程度ではガンダムである私のR-1に勝

「ことは出来ない」

「喧しいわこのガンダム馬鹿！もう一度、もう一度だけ勝負だ！今度こそそのトリコロールの可変機を私のビルトビルガーのコールドメタルソードの錆にしてくれる！！！」

「フツ、上等だ。何度でもかかって来るが良い。私が、私こそがガンダムだ！！！」

「駆けるビルトビルガー！！奴のR-1よりも早く！！」

「……とりあえずその後ろでゲームに夢中な馬鹿二名。少し自重しろ。」

「……まあ、とにかく、これだけは言わせてくれ……」

「……なんか同居人増えとるうううううううううう！！！！！！！！！！」

「……ん？」

今何か聞こえたような気が……空耳かな？

まあ、空耳だったら別に気にしなくてもいいか。そう考えた僕はそのまま目の前の部屋に入った。

「アレハンドロ様。お待たせしました」

「ン、ありがとう。良いタイミングだ」

そう言いながら今僕がしている小姓のようなものの雇い主の“アレハンドロ・コーナー”は手に持っていた書類からこちらに顔を向けた。

僕はそのまま、彼の座っていた椅子のすぐ隣のテーブルに、頼まれていた飲み物と共に、とあるケースとチップを置いた。
程無くして、彼はそれに気付き怪訝そうな顔をした。

「ん？これは？」

それに対し、僕は自然に顔に笑みを浮かべながら受け答える。

「ビタミンカプセルとリストを入れたチップです。先程のご商談について、力になってくれる人物を思い出したのでリスト化しておきました。良かったらお使いください」

それを聞いたアレハンドロは少し啞然とした顔をする。そして直ぐに眩しい物を見るかのような表情になり、こう呟いた。

「・・・リボンス・・・本当に君は・・・何時でも私の欲しい物を与えてくれる・・・」

「ええ、勿論です」

「・・・君に会えたことは、まさに僥倖だよ・・・君こそ、神が私に遣わした天使だ・・・」

そう言いながら、彼は僕の右手を取った。

・・・しかし・・・天使、か。

以前までの僕なら其処まで何も思わなかったかもしれないけど、最近では普段からアムロに“鬼”だの“悪魔”だの“人間台風もどき”だの・・・果てには“ハチャメチャスパロボマニア（特定条件下でのみ劇画チックスパロボマニア）”と呼ばれていたから、この呼ばれ方は新鮮な気分になるな。

あ、勿論呼ばれる度に彼を酷い目に合わせるのは忘れないよ？当たり前じゃないか。

・・・まあ、確かに常人であれば、こういった事は中々出来ないだろう。しかしこの僕のような存在 ヴェーダとリンクできるイノベイドならば、これくらいの事は造作も無い事だ。

・・・まあ、アムロなら僕が「やらないと酷い目にあわせるぞ」、と言えば10分・・・じゃ終わらないか。

となると大体1時間ほどか。それくらいでこんな仕事は終わらせてしまっただろうけど。

・・・あしまった。ちょっと彼が慌てながら泣く泣く作業している所を想像して顔がにやけてしまった。

これは直さないと・・・しかし彼をからかうのは面白いから止められない。

そういえば、フェルト・グレイスは彼の家に辿り着けたのだろうか？
彼女があのカオスな状況のアジトに放り込まれれば、おそらくアム
ロは彼女のフロアでてんでこ舞いになるだろう……ああ、
考えただけでも面白そうだ。

いつそもうこの際だから、この前言ったように、ヒリングも彼と一
緒に生活させてしまおうか……？

それはそれでもっと面白いになりそうだ。

「……フフッ」

「？　どうかしたのかね？リボنز？」

「いえ……ちょっと楽しい事を思い出しまして」

「……フム、まあいい。所でリボنز。“あの件”はどうな
っているのかな？」

「おおまかなポイントの割り出しは終了しました。しかし、そのポ
イントの何処に在るのかまではもう少し掛かりそうです」

「分かった。いつもすまないな、リボنز」

「いえ……それでは作業に戻ります」

そう言いながら、僕は踵を返して、与えられた自室へと戻る。
それにしても、アレハンドロもアムロ程ではないにしろ、要所要所
の反応が面白いな……。基本上つ面以外は、間抜けで、何だか
小物臭がオーラになって出ているような人間なのに。

「……まあいいや。実際彼の下で働くのは其処まで嫌じゃない……当分は楽しませてもらう事にしよう。」

「さて……と……スパジエネでもやるかな……
今度こそ大雷凰を使いこなさなければ……」

「

作業？そんな物後回しに決まっているじゃないか。

こっちの方が今の僕にとっては最優先事項だからね。」

・・・・・・・・・・・・・・・・ハッ!?

今一瞬・・・・・・・・じゃないな。

時計を確認すると、もう午後7時を指しているから・・・・・・・・どうやら1時間くらい飛んでたみたいだな。

何がだつて? そんなことは言わなくても分かるだろう。

「それにしてももう7時か・・・・・・・・今から夕飯を作るにしても、このままだと出来上がるのは8時から9時くらいか・・・・・・・・」

思わずそんな台詞が口からこぼれる。

いつもは6時から30分はんの間に調理し始めるのだが、今回は色々としヨッキングな事があったのでいつもよりも30分ほど遅い。

まあ、それ自体は問題ではない。

むしろ問題なのは姉さんと刹那だ。

おそらく姉さんは、このまま夕飯を食ってから帰る気なのだろう。

ついて来た事から鑑みるにこれは確実だ。

もしもこれで、『気絶してたから夕飯できるの遅くなる』等と言ったら、間違いなく暴れだす。

刹那も刹那で厄介だ。

あいつは基本的には何もしないのだが、ある程度遅くなると何をする訳でもないのに台所まで来て、ジツと料理中の俺を見てくるのだ。しかも何を言っても無言で返すときやがる。

ハッキリ言つて最初の頃は鬱陶しい事この上なかった。

最近は慣れたが、それでも少し視界の中にチラチラ映るので、鬱陶しいとまでは行かないものの、結構気になる。

で、今回の場合、この二人+あまり面識の無い子

要するにど

んな反応を示すのか分からない子が一人居るのである。

おそらくある程度ならば常識人にカテゴリーされるユリが止めてくれるだろうが、それでも不安は残る。

とにかく今すぐに調理を始めなければ！

そう考えた俺は、若干駆け足で台所へ向かう。

．．．．．リビングから物凄く楽しそうな声と音が聞こえるが、
無視だ！無視！！

そのまま台所へと入った俺は、冷蔵庫を開けた。が、次の瞬間

[illegible]

俺は視覚的なショックを受けて、再び意識が飛びそうになった。

今回は何とか耐えれたが、このままではマズイと考えた俺は、そのままこの事態に対する打開策を考える。

そして考え始めてから約30秒後。

あれしかないか

考えは、出た。

えっと・・・どんな状況なんだろう？

私達の目の前には、今日始めて会った、このアジトに元から潜入していた刹那によく似た人 アムロが物凄い無表情で仁王立ちしている。

刹那とユリ、そして彼と一緒に帰って来た人 ヒリングって人も、さっきまでやってたゲームを一時中断して、彼に顔を向けている。

ややあつて、彼が口を開いた。

「緊急事態だ」

・・・・・・え？

「・・・どういう事だ？」

ユリが彼に問いかける。

彼は表情を一切変えずに答えた。

「なんと冷蔵庫の中に食材が全くとっていいほど無かった」

「買ってきなさいよ」

今度はヒリングさんが問いかける。

「……残念ながら、只今俺の財布の中には、ちよつと前のスイーツ祭りの所為で、たった500円しか入っていないのだが……」

「

そう言つて、アムロはヒリングさんを見た。

ヒリングさんはどうやら居た堪れなくなつた様で、目を逸らす。

「……アムロ。おながが空いたんだが」

「……いや、刹那……それは……」

「おい刹那ー？マイペースもいい加減にしろー？そんな綺麗な目で小首傾げて不思議そうな顔しても駄目だぞー？小動物みたいで可愛いけど……って姉さん？なんで刹那と同じ動きをする？」

「いや、こいつがやって可愛く見えるんだつたら、あたしはどんな感じかなーって」

「どつちかつていうと、小動物つて言うか、小学生つばい「オーイそれはどういう意味かなクソガキ？」……」

そのまま不穏な空気が二人の間に流れ始める。

ユリが慌てて二人を止めに入るけど、あんまり効果が無さそう……
……って。

「あれ？刹那。そのお菓子どうしたの？」

何時の間にか、この状況が出来上がる原因を作った刹那が、お菓子を食べているのに気付いて、私は彼女に質問した。
すると刹那は自分の足元に居る物を指差す。
それは………

「……ハ口？」

そう、黄緑色のハ口だった。

よく見ると、その手にはお菓子の袋が握られている。

「もしかして……くれるの」

「ホシイカ？ホシイカ？」

「えっと……まあ……ちょっとだけ……」

あまりにも刹那がおいしそうに食べるから、思わず本音がポロリとこぼれてしまった。すると……

「アゲル！アゲル！」

ハ口がそう言うてから、おもむろに自分の身体を開けた。驚いて思わず後ろへと後ずさってしまったが、今度は其処にあった物に驚いた。

其処にあったのはお菓子の山、山、山。

もう何処に一体入っていたのだからないくらい入っている。
ハ口はおもむろにその中の一つを掴むと私に差し出してきた。

これは・・・つまり・・・

「・・・くれるの？」

「アゲル！アゲル！」

「・・・ありがとう」

この子のそんな行為が何だか嬉しくて、感謝の言葉と一緒にハ口の頭を撫でる。

ハ口はそんな私に文句を言うでもなく、ずっと静かに撫でられていた。

「・・・・・・・・よし、そこでハ口と戯れている・・・・・・・・・・えーと・・・・・・・・フェルトだ。フェルト・グレイス（ボソツ）そうだフェルトだ。フェルトと、その隣で黙々とお菓子食ってるガンダム馬鹿女。しょうがないから、今日は外食するぞ。後5分が出るから仕度しろ」

さっきまですぐ隣でヒリングさんと険悪な空気だったアムロがそんな事を私達に言ってきたのは、それからすぐの事だった。

あの後、宣言通りに5分で支度をして、戸締りをしっかり確認して俺が4人を連れてきたのは、近くの定食屋だった。

此処はちよつと佇まいが古くて、中もけっして広いとは言えないが、店をやっている老夫婦はとってもいい人達だし、値段も中々リーズナブル……と言うか、下手するとお金が無くてもちよつと店の手伝いをするだけで、ご飯を奢ってくれたり、メニューも常連になったら、その人に合わせた物を作ってくれたり、中々良心的である。

因みに俺は此方へ始めてきた頃にしょっちゅうお世話になったので、おやっさんとおばちゃんとは顔見知りになっている。

「という訳で、おやっさん、バイトすっからいつもの奢って」

「あいよ、ちよつと待ってな！すぐに出来上がっからよ！」

まあ、そんなこんなで只今俺たちはもう既に店の中に入って席に着いております。

え？お金が無かったんじゃないのかって？

前述の通り、俺が全員分の食事代を働いて返す事で話がつきました。ハハハ、アレ？メカラアセガ・・・

「なあ・・・」

「うん？どうしたユリ？」

「・・・本当に、私達は何もしくて良いのか？せめて皿洗いくらいはした方が良いのでは・・・？」

そう言いながら此方を申し訳無さそうな目で見てくるユリとフェルト。

その向こうでは、刹那と姉さんがもう既にラーメンやらチャーハンやらを勝手に頼んでがつと食い始めている。

「・・・ってうわっ！？刹那の目がこれ異常無いほどに輝いている！？」

そんなに美味かったのかこの料理！？

確かに此処の料理って結構美味いけど、そこまで！？

「・・・って、涙まで流してる！？ああ、鼻汁！鼻汁でてるから！？っていうかそろそろ誰か彼女の様子に気付いてあげて！？何で誰も気付かないのって、早っ！？もう完食しやがった！？」

「おゝかわりー！！！」

おかわり頼みやがったあの女郎めうぢやう！？

っていうかおばちゃんもじゃんじゃか持ってきてるし！？

何だかどんどん皿の山が築かれていくよ！？

「あ、おばちゃん！あたしこの胡麻団子100個お持ち帰りです！」

「あいよー！！」

そして姉さんは一体何個胡麻団子お土産として頼んでんだ！？
此処まで来てちょっと怖くなってきた俺はコッソリとおばちゃんに
今どれくらいお金が掛かっているか訊ねてみた。

「んー・・・ちゃんと計算してないけど、大体15万くらいじゃない？」

『：あむろは めのまえが まつくらに なった：』

「・・・おいアムロ・・・大丈夫か？」

これはちよつとマズイな・・・あ、いや、料理の味が、という
わけじゃないぞ。

むしろそっちは物凄く美味しい。

むしろ問題は、今彼が払わなければならぬ代金を聞いた事による

ショックによって、口を開けて上を見ながらピクリとも動かなくなつてしまった事だろう。よく見ると瞳孔も開きっぱなしになっている。

とりあえず、先程からフェルトと一緒に成つて彼に声を掛けたり、身体を揺らしたりしているのだが、一向に動き出す気配が無い。

「……さて、如何したものか……………」

見ればフェルトは、あまりの事態に自分の器量では対処出来ないと判断したのか目に涙を溜めている。

刹那に至つては、未だに涙を流しながら頼んだ物を貪っている。

「……そろそろ止めた方がいいかな？」

とりあえずフェルトに彼女を止める様に言つておいてから、私はその向こうのヒリングという中性的な人物（アムロが“姉さん”と呼んでいた事から、おそらく女性だと思うが……）に目を向ける。

彼女も、流石に彼の状態（惨状ともいう）に気付いたのか頬を引きつらせながら先程頼んだ杏仁豆腐を食べている。

どうやら彼女はあれで打ち止めらしい。
ラストオーダー

「……というか、この惨状に気付いても食べ続けているのか……………」

「…………あの…………ウチの弟、大丈夫？何か様子がおかしいんだけど……………」

「…………一応彼がこうなつた原因には、貴女も入っていますからね？」

「いや…………それは…………その…………分かつちやいるけど…………ハハハハ……………」

「目を逸らして乾いた笑い声を上げないで下さい」

全く……………

「刹那、刹那」

ズゾゾゾゾゾゾゾ……………ゴクン「ん？フェルトか。どうかしたのか？」

刹那の方も、先程から声を掛けていたフェルトにやっと気付いたらしい。

とは言っても、先程まで自身が頼んだ物を全て食べ終わってからだったか……………そんなに此処の料理は美味かったのか？刹那？

「あの、どうしたって言うか……………その……………えっと……………」

そう言いながら、彼女は動かないままのアム口を指差す。
そんな彼女を見た刹那は、少し目を丸くして、こう言った。

「……………彼は一体如何したんだ？」

「あ、やっぱり気付いてなかったんだ……………」

そう言いながらフェルトは肩を落とした。

まあ、あれだけ集中して食事していれば気が付かなくても仕方が無い……………か？

その集中力を、実戦でも発揮してくれば良いのだが……………

「・・・フム。大体分かった。つまり私があまりにも多く注文してしまったお蔭で、合計金額が物凄い事になり、結果としてアムロはあそこで真っ白になっている訳だな。よく分かった」

「・・・分かってくれて嬉しいよ・・・」

あの後、結局フェルトでは埒が明かない、という事で、代わりにユリに何故彼がああなっているのか教えてもらったが・・・それほどに酷かったのだろうか？

確かについ先程、私が事情の説明を受けている最中に、ヒリング・ケアが伝票を見て、盛大に口に含んでいた水を噴出しているのを見たが・・・

「ユリ」

「如何した？」

「すまないが、少しその伝票を見せてくれないか？」

「・・・・・・・・別がいいが、見て驚くなよ・・・・・・・・」

そう言いながら、彼女が手渡してきた伝票を見る。

そこには『198,000』という数字がでかでかと書かれていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・ああ。

「何だ、このくらいか」

思わず口から言葉を漏らしてしまった。

本当はもつといつてるかと思っていたのだが・・・・・・・・どうやら値段が安い、というのは伊達ではないらしい。

ふと周囲を見渡してみると、ユリやフェルト、そしてヒリング・ケアの顔が驚愕に染まっているのが見えた・・・・・・・・何故だ？
因みにアムロは未だに固まったままだ。

「・・・・・・・・刹那、一つだけ聞かせろ」

私が頭を傾げていると、ユリが質問してきた。

「？ 如何した？」

「・・・・・・・・刹那、お前今、その金額を『このくらいか』、と言ったか」

ああ、何だそんな事か。

「ああ。此方へ来る前に、スメラギ・李・ノリエガから、資金として日本円で40万ほど貰っているからな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？！」

・・・・・・・・・・・・・・・・？ 何だ？

私が此処に来る前に、スメラギ・李・ノリエガから「何かあったときの為に使いなさい」と言って持たされた、お金の事を話したら、その場に居た“おやつさん”と呼ばれる男性と、“おばちゃん”と呼ばれる女性以外の人物が一斉に動きを止めた。

・・・・・・・・・・あ、いや、もう一人だけ止まっていない人間が居た。アムロだ。

彼は私がお金の事について喋った瞬間、耳をピクリと動かしてから、まるで『ギ・ギ・ギ・ギ・・』という音が聞こえてくるくらい、油を注していないブリキのロボットの様に、顔をゆっくりと此方に向けた。

その様子を見て、フェルトとヒリングが「ヒイツ！？」といったお互いに抱き合う。

暫らく彼は、そのまま死人のように虚ろな目で此方を見つめていたが、そのうちゆっくりと口を開いた。

「オイ・・・・・・・・刹那・・・・・・・・」

「・・・・・・・・どうした？」

「今・・・・・・・・お前・・・・・・・・40万・・・・・・・・持つてる・・・・・・・・つつたか？」

「ああ。言っ たな」

「・・・・・・・・・・じゃあ・・・・・・・・なにか・・・・・・・・？・・・・・・・・・・お前さん・・・・・・・・今この伝票に書かれている金額・・・・・・・・全部払えんのか・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・まあ、そうだな」

虚ろな目のまま私に質問を繰り返すアムロ。

私もそれに淡々と答える以外に道は無いので、正面から彼の求める答えを返す。

「・・・・・・・・というか、流石にこの目で見つめられ続けると、少し悪寒を感じるな・・・・・・・・」

「そう・・・・・・・・か・・・・・・・・なーんだ、そっか・・・・・・・・」

って、ん？いつの間にか、アムロがカウンターの方を向いている？
そしてその手に何かの瓶を持っている？

一体何を・・・・・・・・？

「・・・余談だが、私はこのとき以前ロツクオンが教えてくれた、“
どんな事があっても我を忘れてはいけない”という言葉の意味を、
実をもって知った。」

彼がその手に掴んだ瓶の正体は、大量の紅生姜が入った容器。

彼はその容器に徐に手おもむきを突っ込んで、中から大量の紅生姜を掴み出

紅生姜特有の辛さと酸っぱさに悶絶しながら床を転がっている私の頭には、その内そんな言葉が思い浮かんでいた。

．．．．．あゝビックリした．．．．．本当に１年くらい
タダ働きしなきゃいけないかと思った．．．．．流石にバイトする、
とは言っても、そこまでやるわけにはいかねえよ．．．

今、俺の目の前では、紅生姜を大量に口に突っ込まれた衝撃の所為
か、刹那が床で転げまわっている。

．．．．．しかし、同情はしない。
だってそうだろう？

予め金が無い、と言っていたのに突如暴走して物を頼みまくった上
に、おかわりまでしやがるんだから。

．．．．．まあ、よく考えたら、あの行動もちゃんとお金が足り
ると分かっていたからこそその行動だったのだろう。

でなきゃ、あの刹那が意味も無く暴走する筈無いか．．．．．
・

．．．．．そう考えたら、ちょっと申し訳なく思えてきたな．．
．．．．．（汗）

後で何か甘い物でも作ってやるか．．．．．材料があれば。

「おう、坊主。出来上がったぜ！」

そんな事を考えていると、おやっさんが何時の間にか料理を終えて、その手に俺がいつも頼む物を持っていた。

って言うかこの人、あの刹那と姉さんの怒涛の注文ラッシュを受けておいて、まだ余裕があるように見える。

・・・確か、もう80過ぎの御高齢の筈なんだけどなあ・・・

・？

そんな凄く些細な疑問を無視するかのように、彼は俺の前にその手に持った丼を置いた。

「へい！ 餡ころ丼一丁、お待ちどう！」

さて、腹も減ったし、お金の心配も消えたし、さっさと食って、帰ってスパジエネすんべ。

・・・・・・なに？これ？

今あたしの目の前には、はつきり言ってイノベイドのあたしでも理

解できない光景が広がっている。

原因は、今あたしの弟が食っている茶色い何かだ。

その茶色い物は、辛うじて“餡子”だと言う事は分かるが、問題なのはその量。

どう見ても、井の端から端までぎっしりと詰まっているようにしか思えない。

アムロはそんな事意に介さず、黙々と箸で食べ続けているが……

・胸焼けを起こさないのかしら？

よく見ると、名前の通り、ちゃんと井のようすで、あんこの下にはちやんとご飯がある事が見えたけど……

……いや、それでも限度つつー物があるでしょ？

思わず口から出そうになったそのセリフを呑み込みながら、代わりに心の中で呟く。

と、あいつは何か気に入らなかったのか、突然少し眉間に皺を寄せ、次の瞬間、

「……やっぱ混ぜてないとこれ少し食い難いな……
・（ボソッ）」

そう、あたしがギリギリ聞き取れるか聞き取れないかと言う声量でこつ呟き、何を思ったのか井の中のあることその下のご飯をかき混ぜ始めた……つて、ええ！？

な、何やってんのコイツ！？

止めようとも思ったが、覗き込んだアムロの目が、あまりにもキラキラしていて、思わず怯んでしまう。

その間にも、アムロは井の中の餡子とご飯をかき混ぜており、もう井の中は茶色と白のごちゃ混ぜ状態となっている。

その後、あらかた混ぜ終わったのか、アムロは再びそれに箸を付け

始める。

「……しかし本当に、見るだけで胸焼け起こしそうね。
それを本当に美味そうに食べるコイツもコイツだけど……」

と、何時の間にか先程まで床で転げまわっていた、ガンダムマイスターの一人である刹那・F・セイエイがアムロの横に立って、ジツと彼の食べている物を凝視していた。

「……何をやってるんだろっかあの子は？」

もしかして、あの井というのもおこがましい餡子と白米の集合体を食べたいとか思ってるんだろっか？

私が内心『まさか』と思っていると、今まで目の前の井に集中していたアムロが彼女に気付いて、声を掛けた。

「どうした、刹那？もしかして、また何か頼みたいとか言うんじゃないだろうな？」

「……いや、違う」

「……んじゃなんだ？」

「……」

「……」

「……」

「……？」

そのまま黙りこくる刹那に対して、アムロも無言で首を傾げる。

が、その内彼女の視線の先にある物に気付いたのか、ハツとした様な表情になってこう言った。

「あ、もしかして、餡コシころ井食べたいのか？」

「・・・！！（無言で首を縦に振る）」

「いや、それならそうと早く言えばいいだろう。何で黙りこくったまんまでいるんだ・・・言っておくが、俺はエスパーじゃないんだぞ？言葉にしてくれなければ、早々理解は出来ん・・・つて、コラ。目を逸らすな」

そう言いながら腕を組んで彼女の方へとアム口は身体を向けた。

そんなあいつに対して、刹那はまたしても無言のまま視線を逸らす。・・・何だかその姿が、主人に怒られている子犬か何かのようで、一瞬・・・ホントに一瞬だけ『カワイイ・・・』と思ってしまったのは、あたしだけじゃない筈だ。絶対に。

そのまま、また少しの間、二人の間に沈黙が訪れる。

そのまま20秒くらい経った頃だろうか。

そろそろ助け舟でも出してやろうかな、と思った所で、刹那・F・セイエイがこう口を開いた。

「・・・だつて・・・」

「あ？」

「・・・だつて・・・さっきの事で・・・まだ怒ってるかと思つた、から・・・」

・・・・・・・・え？

何？何なのこのカワイイ生物！？

若干の涙目で、ちよつとしゃくり上げつつ伏せ目がちにそんなこと
言ってくるとか、何この萌えのポイントを抑えているような物の言
い方！？

って言うか、言われたアムロも一瞬だけボソツとだけど、「何この
カワイイ生物・・・・」言ってたし！

つか良く見りゃ、周囲の人（この店の店主とおばちゃん以外）も
フェルトとかユリ含めて、全員口元を手で押さえている。

・・・・・・・・あ、客の一人の手の隙間から、ちよつと赤い物が見えた・
・・・・・・・・

「・・・・・・・・流石にもう怒ってねえよ・・・・」

気が付くと、何時の間にやら先程の衝撃からいち早く立ち直ってい
たのか、アムロが頭に手を当てる溜息を吐いていた。

・・・・・・・・いや、でもさっきの怒り方を見れば、まだ怒っていると
思われてもしょうがないわよ、アムロ？

そんなあたしの心の中での突っ込みを知ってか知らずか、アムロは
井の中の集合体を、箸で少し掬うと、

「ん」

と言って、刹那の目の前へと差し出した。

差し出された方は何故差し出されたのかが分からず、目を白黒させ
ているが。

「どうした？食べたいんだろ？ほれ」

そう言われて、やっと何故差し出されているのか分かったようで、少しの間箸の上に乗っているものを凝視していたが、その内ゆっくりとそれを口の中に入れた。

と、次の瞬間、彼女の目が再びこれ異常ないほどに輝く……で、それそこまで美味しかったの？

とりあえず、どんな味なのかくらひは訊いておこうと思ったあたしは、彼女に質問してみた。

「……ねえ……刹那……だっけ？それってそんなに美味しかったの？何か物凄く目が輝いてるけど」

そんなあたしの質問を聞いた彼女は、口の中の物を飲み込んでから、大きな声でこう言った。

「おはぎみたいで美味しい!!」

と。

「……っか、おはぎ知ってるんだ……」

あたしも、以前アムロがリボンスに頼まれて買って来たお土産であったから、それがどんな物で、どんな味かは知っている。

確かに美味しいと言う事も知っている。

「……でも、この味がそれみたいって言われても……
ねえ？」

「……ただ、そう言われると、本当に味が似ているのか確かめ
たくなるのよねえ……」

そう考えた私は、とりあえずアムロに向かってこう言ってみる事に
した。

「ねえ、アムロ」

「（ムグムグムグムグ・・・ゴクン）んう？姉さん、どした？」

「いや、別にどうってワケじゃないけど・・・それ、ちょっと頂戴？」

それを聞いたアムロは、少しキョトンとした後、少し目を細めてこう言った。

「・・・姉さん。昼間あんだけスイーツ食つといて、さっきもあんだけ食ったのに、またコレ食ったら流石に太るぞ？」

「上等だクソガキコラア」

イノベイドだけどねえ、最近流石にそこらへんは気にしてんのよ！！

そんなこんなで、その後あたしとアムロの間で、再び一触即発な雰囲気が発。

とりあえず此处で暴れては周りに迷惑がかかるという判断から、家に帰ってからスパジエネによるタイムンで決着を付けることになったのは、言うまでも無い。

あ、ちゃんと代金は、刹那が持っていたお金と、アムロの約1時間のバイトによってちゃんと全額払えてたらしいよ？

五話

同居人が増えました（不本意）（後書き）

如何でしたでしょうか？

どうも雑炊です。

今回は一応アムロの受難と、二期でやろうと思っているとあるネタ話の伏線をメインにさせて頂きました。

次回からはちゃんと原作に戻ろうと思っています。

で、次回くらいで再びオリキャラを一人入れようと思っています。因みに敵側です。

同時に今までやってなかった、オリキャラの紹介も、次回の後書きでやろうと思っています。

それではまた次回

六話

過去と対峙しました（またしても不本意）

前編（前書き）

モラリア編突入です。

そして新たなオリキャラ登場です。

そんで持って今回は前編です。

それでは本編をどうぞ。

さて、此処で今出てきた“超兵”とは何かを、俺が知っている限りで簡単に説明しよう。

超兵とは、物凄く解り易く言えば、『薬物や手術等で無理矢理反応速度や身体能力を異常に引き上げられた兵』……つまり他所で言う“強化人間”の事だ。

しかもヴェーダからの情報によると、どうやら超兵にカテゴリされている人は、その殆ど（と言うほど多くは無いが）が、イノベイド並に強力な脳量子波が使えるらしい。

……ただ、その超兵になるための施術の弊害か何かは分からないが、“超兵”は、ときたま解離性同一性障害　つまり多重人格になる事があるらしい。

実際問題、前述のキュリオスのマイスター、“アレルヤ・ハプティズム”は、自身の中に“ハレルヤ”というもう一つの人格を内包しており、驚くべき事にそのもう一つの人格“ハレルヤ”と、主人格である“アレルヤ”は、お互いに対話が可能であるらしい。

閑話休題

さて話を戻すが、それでもこの超兵という存在には、様々な問題があった。

例えば、超兵一人を戦場に送り出す為にかかる資金と年月が、それなりに掛かってしまう事。

他には、前述の解離性同一性障害もその一つだし、脳量子波の影響で“人の生の感情に触れてしまった場合、錯乱する可能性がある”という事もある。

ただ、これらはいくまでもほんの一部の人物にしか当てはまらない。特筆すべきなのは、“能力が高すぎる”という問題である。

今現在、人革連の主戦力は、その殆どが“ティエレン”系統の機体である。

以前俺も訓練で乗ってみた事はあったが、あれは酷かった。

何せ機体の操縦は立ちっぱなしだし、モニターはヘルメットの内側に直で映し出されるので目が疲れる。

追従性が少し悪いので、思うように動いてくれない事もあった。

「……まあ、戦闘訓練で出てきた時は、中の人のデータが物凄く強くて地獄を見たがな！！」

「うーか、地上用ティエレンのカーボンブレードだけでビーム弾を受け流すってどんなバケモノだ！？」

お蔭で一瞬固まってしまって、その際にコックピットのハッチの装甲と装甲の隙間を狙われて撃墜されたわ！

「うーか誰だよ『東洋の黒亀』って！？『ロシアの荒熊』じゃねーのかよ！！？？」

閑話休題

まあ、前述した通りに、ティエレンは追従性が少し悪い。

なので、ある程度能力が高いと、機体がパイロットの動きについてこられず、関節等がガタガタになるといった弊害が起こってしまうのだ。

故に近年では、そんな彼らの能力について来られるように、超兵器専用機が開発されたりしているのだが……

「……「チーッ」の銀色って言うのは解るんだけど……
「……なんで「タオッ」はピンクなのかね？」」

思わずそんな言葉が口を付いて出てきた。

「……よく考えてみたけど、結構どうでも良いな、これ……
……」

そんなお馬鹿な事を現在進行形で考えている俺が今何処にいるかと

いうと、ヨーロッパ南部に位置する小国“モラリア共和国”である。ここは、人口は十八万と少ないが三百万人を超える外国人労働者が国内に在住しており、約4000社ある民間企業の二割がPMC

傭兵の派遣、兵士の育成、兵器輸送、および兵器開発、軍隊維持、それらをビジネスとして行う民間軍事会社の事で、誘致した民間軍事会社を優遇して国を発展させてきた。

で、今回此処に俺がいる理由は、（聡明な読者の方々ならばもう解っているかも知れないが、）ぶっちゃけ実働部隊が此処に武力介入する事になったから、そのサポートも兼ねて監視しに来たのである。

・・・・まあ、そっちの方は、実は建前なんだけどね・・・

そんな事を考えながら、俺はガンダムを飛ばす。

今回は別に実働部隊に見つかっても大丈夫なので、結構ゴツイ追加兵装を施す事になった。

その名も『フルアーマー装備』である。

・・・まあ、ぶっちゃけて言っちゃくと、肩とか足とか胸部とか腰とかに追加装甲を取っ付けて、左腕に専用の小型シールドを取り付け、その上から専用アタッチメントでいつものシールドを取り付けている。

・・・とは言ってもただ単に重量が増えて機動力が下がっては困るので、追加装甲であるアーマーの幾つかには小型スラスターとブースターを搭載し、その結果機動力はむしろ向上しているのだが。右腕には追加装甲に左腕に付いているのと同じアタッチメントでナドレ用のビームライフル2丁を改造して連結させた、試作型2連ビームライフルが取り付けられている。

因みにこの試作型2連ビームライフル。元になっているのがナドレ用の物な為、ビームサーベルとしても機能させる事ができる。

が、デカイうえに腕に直接取り付けられているため、慣れていないと以外に使い難かったりする。

また、ビームサーベルは腰のサイドアーマーに増設された専用ラッチに移され、代わりに背面のGNドライブのコーンの右側には、固定式の実弾キャノン砲が装備されている。

「何故実弾？」と思った人はちよつとキャノンビームを変えた場合のこの機体の粒子消費量を考えてみようか・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・でもない事になるのがお分かりになるだろうか？

まあ、（一応）オリジナルの太陽路（の筈である）このOガンダムならそこまで問題にはならない筈だが・・・・・・・・念には念を入れて、個人的に変更しておいたのだ。

その分弾の所為で機体重量が重くなってしまったが。
因みに反対側には、射撃戦を主体とするこの機体のサポートの為に複合センサーが取り付けられている。

GNABCマント？勿論頭からスッポリと被っているし、ビームガンだって両手とマントの内側に計4個装備して、拳句の果てにビームサーベルをもう一本隠してありますが何か？

「・・・・・・・・にしても、モラリアの軍事演習にAEUまで参加してくると思わなかったなあ・・・・・・・・どうやら外交努力のたまものっぽいけど・・・・・・・・実際に、ガンダムっていう、超技術の塊が欲しいだけかな・・・・・・・・」

実は此方にもソレスタルビーイングのエージェントとして活動をしている人達は、様々な情報を送ってくれている。

ただし、その情報は実働部隊やヴェーダに送られる物よりもかなり断片化されていて、ハッキリ言って役に立たない物が多かったりする事の方が多い。

・・・・・・・・ただ、どんなに断片化されていたとしても情報は情報。
それらを繋ぎ合わせていけば、実働部隊等に送られている物には無

い物が見えてくる事もある。

今回もそんな感じで導き出された情報から、A E Uが今回の軍事演習に参加する事と、その部隊の中にP M Cから派遣されたパイロットが、A E Uから提供された新型機で参加するという事がわかった。
・・・ただ、新型機、とは言っても、イナクトのカスタム機らしいので、性能的にはそこまで警戒はしなくて良いとは思うが・・・

「・・・なんか、嫌な予感がするなあ・・・」

主に俺に降りかかる厄介事的な意味で。

アムロがモラリアへと到着するおよそ3時間ほど前。

P M Cトラスト 武器格納庫内部ハンガー

「合同演習ねえ．．．まさかA E Uが参加するとは思わなかったぜ」

そこに一人の男がいた。

中東系の顔立ちに、赤毛の髪と髭を蓄えた、野生的な．．．というよりも、何処か狂気を感じさせるその男は、P M Cに所属しているアリ・アル・サーシエスといった。

彼はこの格納庫に呼び出されて早々に、自分の上司に対していつもの軽口をたたいた。

「外交努力のたまものだ。我々ばかりがハズレを引くわけにはいかんよ」

彼の上司はサーシエスの軽口を気にもとめず、苦々しくつぶやく。

「そういう訳だから、偶にはA E Uにも骨を折ってもらわんな」

「ハッ、違いねえ」

そんな話をしながら二人が奥へ進んでいくと、ライトが付いていない部屋に出た。

明りこそないが、そこには巨大な何かが二つほどある事だけは分かった。

．．．．ん？コイツは．．．？

アリーがそれを訝しげに思い、上司に質問しようとした瞬間ライトがつけられ、それは照らし出された。

紺色にカラーリングされたボディに鋭い翼を持った戦闘機。

・・・そして暗い赤色 所謂ディープレッドにカラーリングされた全く同じ機体が、そこには鎮座していた。

「この機体をお前に預けたい」

「・・・・・・へえ・・・・・・A E Uの新型か・・・・・・」

A E Uイナクト。

奇しくも、世界で最初に（というのは実際には正確ではないが）ガンダムに倒されたMSである。

「開発実験用の機体だが、わが社の技術部門でチューンを施した。」

「こいつでガンダムを倒せと？」

サーシエスの顔に凶暴な笑みが浮かぶ。

元来、彼の本質は戦う事（というよりも戦争する事や、強い敵と殺しあう事）に喜びを見出す、戦闘狂（というより戦争狂）である。

故にガンダムの以上とも言える戦闘能力を耳にしてからは、思う存分そいつらと戦争がしたいと思っていた。

その念願がようやく叶うのだ。

・・・しかし彼のそんな期待は次の上司の言葉によって裏切られる。

「鹵獲しろ」

「・・・・チツ・・・・言うに事欠いてそれかよ・・・・・・」

上司の言葉を聞いたアリーは舌打ちを一つしてから、不満の声をあげる。

しかし凶暴な笑みはそのままだ。

何せ『鹵獲しろ』とは言われたが、『どんな状態』でとは指定されていないのだ。

・・・つまり、重要なデータが集中しているであろうコックピットさえ狙わなければ、後は何をしても良いとアリーは考えたのである。

「・・・・・・・・一生遊んで暮らせる額を用意してやる」

「ヒュ」 そいつは大いに魅力的だな」

そう言うサーシェスだったが、実のところ彼らの提示している金など、彼にとつてはどうでもいいことだった。

ただ、あの機体 ガンダムと殺し合いができると言うだけで胸が躍る。

・・・・・・・・クククク・・・・・・・・さあて・・・・デツカイ戦争を始めるとうや・・・・・・・・ええ！？ガンダムさんよ！！

これから始まる“デカイ戦争”・・・・・・・・それを思い浮かべて、アリーは内心大きな笑い声を上げた。

「あ！先生こんなところにいたー！」

この声が聞こえてくるまでは。

「……おい、何で手前がここにいんだ？」

さっきまでの凶暴な笑みから一転。急に疲れたような表情になってアリーは後ろを振り返った。
すると……

「ドーン！ー！！」

という言葉と共に、アリーの背部に一つの人影が突っ込んできた。

「グオオオオオ！？」

突然の攻撃に、流石のアリーも衝撃に耐え切れずにもんどりうつて倒れる。

そして彼の背中に体当たりをかました人影は、そのまま彼の身体に頬擦りをし始めた。

「わーい！わーい！先生だー先生だー！！」

「グウウウウウ……ええい！コノ……クソッ……放しやがれこのストーカー野郎！！！！」

「えー？やだー それに私は女だから、“野郎”じゃなくて“女郎”^{めらう}ですから放しませーん」

そう言いながら、人影は一向に彼から離れようとはしない。

そのままアリーは何とかその人影を引き剥がそうと四苦八苦していたが、何分が経ってからどうやら諦めたらしく溜息を一つ吐いて、自身の背中にしがみ付いている人影を見た。

人影の正体は少女だった。

アリーと同じ赤い髪をぼさばさに伸ばし、彼が着ているパイロットスーツの色違いの黒い物を着ている。

瞳は赤く、肌は中東出身の人間とは思えないほどに白く、髪の色がもっともつと薄ければ、アルビノと言っても文句は無いくらいだった。

顔からして、おそらく歳は16〜7歳程度だろう。

しかしそのプロポーションは見事な物であり、アリーが着ている物の色違いなだけだというのに、その姿からは大抵の男なら魅了できそうなくらい濃厚な色気が漂っていた。

というか彼の上司の男なんぞ、既に若干前屈みになっている。

“ハディージャ・アリエフ”。

彼女は最初アリーに拾われた時にそう名乗った。

彼女は元々、アリーがKPSA 今は無きクルジス共和国の

反政府ゲリラ組織に所属していた時に、とあるかつて民家だったと思われる廃墟の中でたった一人ポツンと居た所を、「何かの役には立つだろう」という理由で拾った、（おそらく）戦災孤児だった。

元々はここまで感情を顕わにするような性格ではなかったのだが、長く彼と一緒に生活していた所為か、何時の間にかこんな『先生（アリ・アル・サーシエス）大好き娘』、通称『アリコン（アリ・アル・サーシエスコンプレックス）娘』と化してしまっていたのだ。

しかもその根本も彼と同じ様な物（戦争狂等）になってしまった為、当のアリーからしてみれば、鬱陶しいやら同属嫌悪で胸糞が悪くなるやらで、かなり苦手な人種であった。

しかも彼女はアリーとは違い、以上性癖持ちである事も、アリーにとっては都合が悪かった。

以前一度だけあまりにも鬱陶しくなったアリーは一計を案じ、適当な理由で彼女に殴る蹴るといった暴行を徹底的に行った事があった。アリーとしては、これで自分を嫌いになってくれれば万々歳……・……だったのだが、次の瞬間彼女が言い出したのは、次のような事だった。

『私は………変態です………あなたに蹴られて殴られて罵られて感じている、変態エロガキです。だから………やめないで。もっと、もっと蹴って………殴って………・……ねえ？どうしてやめるんですか？お願いだからもっと踏んで下さい。あんなの、あんなの初めてだったの。力を加えられる度に電気が走って、私が虐げられている事実が溜まらなく興奮して………・……お願いします！もっと………もっと踏んでっ！さっきのがもっともっと欲しいのっ！いけない私をもっと罵ってっ！』

・ ・ ・ ・ ・ その場に居た全員が（アリー含め）
いきなりこんな事を言い出した彼女に対してドン引きである。

・ ・ ・ ・ ・ つまり何が言いたいかというと ・ ・ ・ ・ ・ 彼女はドMなのだ。

しかも真性の。

しかもコレを行った場所が、K P S Aのメンバーが多数集まる所でやったのだから尚更マズかった。

この発言により、アリーと彼女 ハデージャーは『ただの保護者と被保護者という関係ではない』という誤解がメンバーの中に生まれてしまい、その後当分の間彼は好奇の目に晒されるだけではなく、“ロリコン”という不名誉なあだ名を付けられる事となったのだ。

閑話休題

「 ・ ・ ・ ・ ・ ったく ・ ・ ・ ・ ・ さっきの質問、もう一回言っぞ。 “ 何で
てめえ手前がここにいんだ？ ” 」

色々と諦めた表情で、アリーは再び先程自分が彼女に投げかけた疑問を口にした。

そもそも今回、この仕事は自分一人しか派遣されなかった筈なのである。

・・・だというのに、このたちの悪いストーカーもどきDM娘までここにいるというのはどういう事なのだろうか？
すると、その疑問の答えは意外なところから返された。

「それは私から説明しよう」

つい先程まで彼らのやり取りに一切口を挟んでこなかった上司がそう返す。

それを聞いてアリーは少し眉間に皺を寄せて彼を見る。

そんな彼の視線を意に介さず、何時の間に取り出したのか上司の男は両手で小さなネットブック（すごく簡単に言うと（厳密には違うが）ノートパソコンを小さくしたもの）を持っており、それで何かの動画を再生していた。

動画はかなり画質が悪く、それがまともな物で撮影された物ではないという事を示していた。

「これを見る」

そう言つて上司の男はネットブックをアリーに差し出す。

アリーはしばらくネットブックのディスプレイで再生されている動画をつまらなそうに見ていた。

・・・しかし、ふとある処で彼の視線がある一点に釘付けになる。

動画に映っていたもの。それはとある何処かの海の海面だった。

しかし動画から聞こえてくる音の中に、波の音に混じって独特な言語
日本語が聞えた事から、アリーは動画の場所を、今や

ユニオンの経済特区となっている“日本”の何処かの港か、もしくは日本近海のどこかと推測した。

……だが、これだけでは彼の興味を惹く物にはならない。彼の興味を惹く物が映ったのは、動画が丁度2分45秒を指したときだった。

……突然、海面が丸く盛り上がる。

そのことにアリーが少々驚いているうちに、『ソレ』は姿を現した。

茶色い外套をすっぽりと被った、巨人。

そうとしか形容できそうもないように彼には思えた。

よくよく見てみると、外套の中はかなり重装備なのか、ちゃんと収まりきらずに所々該当の表面を膨らませている。

頭と思われる所からは、ライトグリーンに光る目が二つほど覗いており、その巨人に何処か人間っぽさを纏わせている様な感じがする。巨人はそのまま海面から出た後、2〜3秒ほど空中を見つめていたが、突如として緑色に光る粒子を撒き散らしながら空へと飛び上がり、やがて地平線の彼方へと消え去っていった。

動画を見終わってからしばらくの間、アリーは言葉が出なかった。が、だんだんとその顔に狂笑を浮かべつつ、彼は上司へと口を開いた。

「オイオイオイオイ………大将。この俺の勘からして、ひよつとするとコイツは……」

そう途中まで言った彼の言葉を聞いて、上司の男はこう言った。

「………ああ、そうだ」

……少しの溜息を混じらせながら。

「おそらく、まだ世界中の誰にも確認されていない“ガンダム”だ」

・・・・・・その場をしばらくの間沈黙が支配する。

やがて先に口火を切ったのは、上司の男の方だった。

「この映像は、たまたま付近を通り掛っていた子供が、偶然、携帯端末で撮影した物だ・・・・さて、ここまで見せれば、なぜ彼女がここに連れてこられたのか理解できるな？サーシエス」

そう言いながら、上司の男はハディージャを指差して、アリーに問いかける。

それを聞いたアリーは、先程から浮かべていた狂笑の中に若干の諦めと疲労を浮かばせながら、こう言った。

「・・・・・・つまり、合同演習へ参加して、今世間を騒がせている方のガンダムを鹵獲しろって言うのはカモフラージュ・・・・・・本命は・・・・・・」

「・・・・・・彼女と協力して、このガンダムを鹵獲しろ。ただしこちらに至っては、コックピットさえ残っていれば良い。思う存分にやれ」

そう言って、上司の男は彼らに背を向けた。

おそらくこれから合同演習参加のための手続きなどをするのだろう。そんな彼の後姿を見送りながら、アリーは内心踊りだしたいような気分だった。

何せ“まだ世界の誰にも知られていないガンダム”という存在と、これから思う存分にやり合う事が出来るのだ。

戦争狂の彼にとってこれ以上の喜びはなかった。

しかも今回は上司から直々にコックピット以外は如何なっても良いという御許しまで出ていると来ている。
正に言う事無しだ。

「……………うにゅ？先生、お話終わった？」

……………こいつさえ居なければな！

そう思いながら、アリーは再びハディージャを見る。

どうやら彼にしがみついたまま寝ていたらしい。

溜息を吐きながら、アリーはハディージャに問いかけた。

「……………で、だ。ハディー、手前^{てめえ}本当になんで此処に来た？ただ俺に会いに来たって言うんなら、お望み通りにボコボコにしてやるが？」

「……………そっちの方が良いかもしれないなあ……………（ボソッ）」

「なんか言ったか？」

「ううん。何でも無いです」

慌てて手と顔を振るハディージャ（愛称：ハディー）。

しばらく彼女はそうやっていたが、ある程度経ってから、突如真面目な顔になってこう言った。

「……………感じたから、かな？」

「あ？そいつはどういう「なんだかは分かりません」……………」

「でも……………」

「でも……………何だ」

そして次の瞬間。

彼女は先程までのアリーの狂笑にも劣らないくらいの獰猛な笑みを浮かべて、こう言った。

「でも……………久々に、あたしがすごく殺したかった懐かしい顔に合えるような気がするんです」

そう言つて、彼女はクスクス笑い出した。

そんな彼女を見て、アリーは内心彼女の標的となっていた二人の少年と少女を思い出す。

肌の色や瞳の色以外はそっくりで、もしかしたら双子なのでは？と思つた事もあつたその少年と少女の顔を思い浮かべて、彼は内心二人に合唱した。

勿論あの二人があゝの状況下で生き残っているとは考え難い。

ただ、漠然と「生き残つてそうだな」という思いを、彼は不思議と抱いていた。

「おおおおおおおおう!!??」

その頃、モラリアの上空を飛んでいたとあるガンダムの中で、一人の少年が盛大に身震いをしたが……。これが原因だったかは定かではない。

そして時間は戻り、アムロがモラリアへと到着してから1時間後。

「……っし。予定されたポイントへと到着。後は……『ピピッピッピッピ』……と、繋がった。ハロ、ボイスチェンジャー起動。音声サンプルはNo.5で」

「リョウカイ！リョウカイ！」

ハロの言葉と共に、コックピット内部の正面コンソールの脇にある赤いランプが点滅を始める。

これでボイスチェンジャーがONになったという事が分かった。それを確認した俺は、すぐに通信のスイッチを入れた。

「エージェントへ。此方【O-01】。所定の位置へと到着完了。これより実働部隊の支援及び援護を行う。AEU及びモラリア軍の現在の動きを求める」

とりあえず所定の位置へと到着した俺は、今のセリフの中でも言った通りに一番近い所で待機しているCBのエージェントに連絡をとる事にした。

「……そういえば、CBのエージェントも、俺の事はどんな人物だか良くは知らない、と師匠が言っていたな。」

「……大丈夫なのだろうか？組織的な意味で。」

『始めまして【O-01】。此方エージェントの“王留美”^{ワシユミン}です。以後、お見知りおきを』

前述のようなアホな事を考えていると、突然に通信が帰ってきた。表面上は普通にしながらも、内心慌てて通信用モニターに目を移すと、やや翠がかった髪をストレートに下ろした、東洋系の顔立ちをした少女がそこに映っていた。

年の頃は……俺よりも1、2歳くらい上っぽい。

名前から、おそらく中国の人だろう。

とにかく相手が自己紹介してくれたのに、自分は何も言わないというのは失礼な気がするので、一応此方も自己紹介することにした。

「自己紹介ありがとう、お嬢さん。もう知っているかもしれないが、私の名前は【O-01】という。よろしく頼む」

いつもと口調が違うつて？

察してくれ。

基本演技が下手糞な俺は、こうやって口調やキャラを変えないと、ぼろっと元の口調で喋りそうになってしまふんだよ……

『……勿論偽名ですよ？』

「……存外、いきなり凄い事を聞いてくるな君は……勿論

偽名だ。残念ながら本名は明かせないのでね」

苦笑しながら彼女の質問に答えを返す。

まあ、ミツシヨン以外で普段活動する時は、本名なんだけどね。

（ホツ）『・・・そうですよね（ボソツ・・・失礼致しました。それで、A E U及びモラリア軍の現在の動きでしたかね？』

・・・オイ。取り繕えたと思っているようだけど、おもいつきしホツと息を吐いた音ともう一言聞こえたぞ。
もしかしくなくても、【O・O1】っていうのを本名だと思いやがったな？

しかし俺は今の心の声を口に出さずにグツと我慢した。

・・・まあ、出した所でまた面倒な事になるのが目に見えてただけなんだけどさ・・・

「・・・ああ、そうだ。大まかでいいから、教えてくれないか？」

『分かりました。ミス・スメラギの戦術予報と、此方で収集したデータを元にして、A E U・モラリア混合軍の現在の動きを、今後考えられる動きのシミュレーションデータと共に逐一そちらに御送り致します』

「助かる」

俺がそう言つと、留美さんは『それではくれぐれもお気をつけて』
と言つて、通信を切った。

と同時に、先程彼女が言っていたデータが送られてきたのか、ハ口が目から立体映像を展開して、おそらく此処らへん一帯の地形デー

タと思われる物を映し出した。

その立体映像の所々に、紅い光点がかなりの数で密集しているのが見受けられる。

おそらくこれが、A E U、モラリア混合軍の機体なのだろう。

そしてその光点の塊から、ピンク色の光点がブワーッと広がっている。

そのどれもが規則性のある動きなどをしている事から、たぶんこれがシミュレーションデータだと考えられる。

で、どの赤い光点の一団から同じ距離だけ離れた所に、ポツン、と一っだけ光っている青い光点がある。

おそらくこれが俺　　Oガンダムなのだろう。

立体映像の地形と周囲の地形が殆ど合致している事から、これはもう間違いない。

「・・・・・・ってことは、ついさっきから左下に移ってる水色の5つの点は・・・・・・」

そう言いながら、その5つの光点を見てみると、それぞれの光点があるポイントまで来たと思うと、一斉に別々の方向へと向かっていった。

つまりこれは・・・・・・

「・・・・・・実働部隊の“ガンダム”・・・・・・ってワケね・・・・・・こいつらが出てきたって事は・・・・・・」

俺がそう呟いた次の瞬間だった。

突如として、正面のコンソールにC Bのマークが出てきたかと思うと、次の瞬間そこにはこんな事が書かれていた。

【ミッションスタート】

と。

「……そんじゃ、始めますかね。ハロ。サポートよろしく」

「マカセロ。マカセロ」

そう言っ言葉返してくる相棒を見て、俺は苦笑を一つこぼすと、
予め決められていた次のポイントへと、Oガンダムのステルス状態
を保持したままゆっくりと移動し始めた。

徒歩で。

ガシヨ
ン・
・
・
・
ガシヨ
ン・
・
・
・
ガシヨ
ン・
・
・
・
・
・

「……今思ったけど、これってミッションに規定された時間までに、ポイントまで辿り着けるんだろうか……？」

思わずそんな言葉が口を突いて出てくる。

師匠曰く、ステルス状態を保持する為にこの移動方法なのらしいのだが……

「本当に意味あるのか？この移動方法………？」

因みに後日聞いた話だが、やっぱりこれは師匠が俺をからかって面白がるためのデマだったらしい。

師匠曰く、

「まさか本当にやるとは思わなかった。でも面白かったし、結果的に規定時間内に到着できていたし、ステルスも本当にそこそこ保持できていたっぽいから、後悔も反省もしていない。むしろもう一回くらいやらせてみたい」

だそうな。

え？その後どうしたかって？

無論殴りかかりましたよ？

“ペ　サ　流星拳”とかいうので迎撃されたけど……………

六話

過去と対峙しました（またしても不本意）

前編（後書き）

如何でしたでしょうか？
どうも、雑炊です。

今回は、冒頭に、私なりに超兵というものがどんなかを纏めて見ました。

・・・・・・・・すみませんナマ言いました。

本当はキュリオスが重力ブロックを押し返す話に主人公が介入できそうも無かったから、その分入れてみただけです。

不快になった方が居たらすみません・・・・・・・・。。。

で、新オリキャラ登場でございます。

彼女はケイン青川様が感想で書き込んでくれたアイデアを基にしています。

ケイン青川様、本当にありがとうございました！

・・・・・・・・あと、この子勝手にDMにしてすみませんでした（滝汗

で、留美さん初登場です。

口調あっているか分かりませんが（汗

そしてOガンダムが、次回から本格的に活躍開始でございます。

フルアーマー装備の方は、OO公式の物ではなく、基本的にFA-78-1の装甲をOガンダムに取っ付けたような物をイメージしていただけると幸いです。

それではまた次回！

七話

過去と対峙しました（またしても不本意）

後編（前書き

後編でございます。

今回はちゃんと戦闘らしい戦闘も入っている・・・かな？

後今回は後書きにちょっとしたアンケートがあります。

それでは本編をどうぞ。

七話

過去と対峙しました（またしても不本意）

後編

「1、2、3、4、5、発射」

ドキューン……

チュポーン……

「うし、命中つと。次は……」

え？何をやってるかだつて？

指定ポイントに到達したから、実働部隊のガンダムを援護する為に、右腕の2連ビームライフルで、バレないように、各機体と交戦しているリアルドとかを、チマチマと一機ずつ撃墜しているだけですけど何か？

指定時間までに間に合ったのかつて？

……意外や意外、残り2分で到着しましたよ。

しかもステルスにも穴はなかったし。

到着して、各部のチェックが終わった瞬間に思わず『師匠すげー！

！』って叫んじゃったよ。

……とお。

「よそ見してる場合じゃなかった」

そんなセリフと共に、再びトリガーを引くと、銃口の先でエクシアに死角からリニアライフルで攻撃しようとしていた、AEUヘリオンベルベトウムが、銃口から放たれたビームによって爆散した。（ベルベトウムって何ぞ？という人の為に簡単に説明すると、ヘリオンは製造された時代によって、性能は勿論、見た目、同時に名前

が異なっており、最初期はイニティウム。中期はメディウムとなっており、残った現在使われている最新型（という訳ではないが）及びその派生機をひつくるめてベルベトウムと呼称される。以降は別に最初期型と中期型が出てくるわけではないので、ただ単にヘリオンと呼称します。あしからず。）

おそらくパイロットは今何が起きたかも解らずに、あの世へと旅立っただろう。

・・・せめて一瞬で消し飛べたのは、果たして幸運だったのかそれとも不幸だったのか・・・

別に任務だし、こつちだつて死にたくないから、という理由で人殺しを正当化しようなんて思つてはいない。

・・・でも、そんな風にある程度割り切らなければ、身体はともかく心が罪悪感等で押し潰されてしまう。

「・・・等とそんなとりとめも無い事考えてる場合じゃないか、クソッ！」

そう叫んで、俺はほぼ反射的にOガンダムにバックステップを取らせてその場を退避した。

一瞬遅れて今さっきまで居た場所にミサイルが殺到する。

見上げれば、そこにはヘリオンが4機ほど編隊を組んで此方へと向かつて来ているのが見て取れた。

・・・・・・気付かれた。

別段驚きは無い。

そもそも指定ポイントに到着してから、一切その場を動かずにビームによる狙撃をしていたのだ。

むしろ今まで気付かれなかったのが奇跡である。

そんな事を考えている内に、ヘリオンの内の一機が変形し、ソニッ

クブレイドを左手にマウントして、切りかかってきた。
.....が.....

「遅い」

そう呟きつつ、〇ガンダムを一気に加速させて相手の懐まで入る。
相手はまだソニックブレイドを振り上げている途中だった。

実際の所、剣等の近接用武器で接近戦をする場合、対人でもそうだが、上段から剣を振り下ろすと言う動作は、自分が先手を取った場合にはあまり有効ではない。空中からの攻撃時にそれをするなんぞ以ての外である。

理由としては、隙がデカイから。特に今のヘリオンのように、振り上げながら突っ込むなんていうのは、格闘戦初心者のする初歩的なミスの中のひとつである。

この結果として、相手も初心者であれば、確かに敵が突っ込んでくるといふ威圧感を与えられるから、有効っちゃ有効ではあるものの.....

「ほいっと」

そう呟きながら、〇ガンダムの右腕の試作型2連ビームライフル.....
.....もうめんどくさいから、ツインライフルとこれから呼ぶが、その銃口からビーム刃を展開しヘリオンの腹部へとアップターの要領で、展開されたそれを叩き込む。

叩き込まれたヘリオンは、数瞬の間もがくように動いていたものの、その内動かなくなった。

.....とまあ、このように、相手が玄人の場合隙のデカさを利用して、反撃される、というのがオチとなる。

師匠がサラツと言っていた事なので俺は良く知らんが、日本にある刀を使うどの武道や武術でも、敵の間合いに踏み込む時には、剣を

振り下ろす動作を同時にしなければならぬ、という教えがあつたりする。これは振り上げながら突っ込むと今のヘリオンのようにやられてしまうと云うのが、理由の一つとして挙げられるが、もう一つの理由としては、振り下ろしながら突っ込んだ場合、最悪自分がやられたとしても、うまく相打ちに持ち込める可能性が大きいからである。

それって何か意味あるの？とか思った奴。それ以上は俺に聞くな。後は自分で考えるか、タイムマシンでも使つてモノホンに会いに行くか、そういった武に関する事をちゃんと学んでいる人に聞きに行つてくれ。

さつきも言つたが、この話は師匠が俺にビームサーベルの使い方を教えてくれている真つ最中に、小話みたいな感じでサラツと言つていただけだ。

実際師匠も最後に、「相打ち覚悟で戦いに臨むのは、戦士としては2流だと僕は思うがね」と言つて話を切り上げてしまったし。・・・ただ、一応理に敵つていと言つたら、それは間違つては居ないので、個人的には参考になっている所もあるのだが。

ピッピッピッピッピ・・・

「うん？」

ふと、コックピット正面のメインコンソールから音が鳴つた。

ロックオンされた音ではなかったたので、なんぞ？と思ひながらも、そちらに目を向けると、コンソールのモニターには友軍機　　つまり実働部隊のガンダムが移動を始めており、それを追えという旨のメッセージが表示されていた。

それを見た俺は、再び八口に立体映像による此処らへん一帯のマップを表示させる。

ご丁寧にも、マップには実働部隊の各機の次の目標ポイントが記載

されており、次に何処へ行けば良いのかが、一目で分かるようになっていた。

・・・だが、今はあまり意識を向けていられるような状況ではない。

仲間の一人を殺られた事がきっかけとなり、頭に血が上ったのか先程のヘリオンで残った三機の内の一機が此方に向かってきた。

しかしどちらも人型形態にはならず、戦闘機形態のままジグザグの軌道を取りつつ、こちらへとレールガンを乱射している。

どうやら高機動による攪乱を絡めたコンビネーションで此方を攻めようとしているらしい。

しかし・・・

「相手が悪かったな」

・・・その機動は地獄の特訓でキュリオスやアブルホールに散々やられたわ！！

そう口には出さずに呟くと、俺は○ガンダムをヘリオンの内の一機に向かって跳躍させた後、空中側転の要領で上を取り、そのままツインライフルから発生させたビームサーベルで通り抜けざまに相手を3枚におろした。

そのまま着地すると、後方で3枚におろされたヘリオンが爆散して、周囲が爆風と砂塵に包まれる。

レーダーを見ると、どうやらもう一機は上空へと飛び上がって爆風から逃れたらしいが、同時に上がった砂塵と、○ガンダムの装備しているGNマントの色の影響で、一時的に此方を見失ったらしく頭上でぐるぐる旋廻している。

これ幸いとはかりに、○ガンダムの右肩にあるキャノン砲を展開して照準をヘリオンにロックすると、そのまま発射した。

発射された砲弾は、そのまま真っ直ぐにヘリオンへと向かって行き、

程無くして着弾した。

ドンー！、という音と共に、空中に人の死を一つ内包した花火が出来る上がる。

それにあまり目を向けずに残ったもう一体のヘリオンを探す。

リーダーを見る限りでは、あまりまだ遠くに行ってはいないが・・・

「・・・チツ。逃げられたか」

思わず舌打ちが出てしまう。

これでこの機体の事も、世間にはれてしまう事だろう。

・・・まあ、師匠曰く、この機体の事は今回か次回くらいでもうばらすという事になっていたらしいから、そこまで問題にはならないだろう。

監視者の方々の会議は物凄い事になりそうだが（笑）

そりゃあ、自分たちもその行方を知らなかったガンダムが、突然追加装備付きで現れて、戦場に介入していたのだ。

しかもマイスターに登録されているのは、素顔も本名も不詳の謎の人物ときたら、まず計画を自分の思い通りに運ぼうとしていた人達は、顔面蒼白になってプランの練り直しに躍起になるだろう。

「・・・・・・・・ヤバイ。考えたら笑えてきた」

そこそこに歳を取ったおっさんが、顔面蒼白になって必死にブツブツ独り言を言いながら、何かを考えている姿・・・・・・・・事情を知らない物からすれば心配の一つでもしそうな光景だが、事情を知る者からすれば、その光景は意外とシニールだ。

「アムロ、イソゲ、イソゲー！」

ハ口の声で、俺は一瞬で現実に取り戻された。

見れば実働部隊の機体は全機目標ポイントまで到着しており、残っているのは俺だけである。

．．．．．あ、ヤバ．．．．

慌てて機体を動かして、目標ポイントへとすっ飛んでいく。

もうとっくにステルスはその意味を成していないので、今度は歩いてではなく空を飛んでいるので、そこまで時間は掛からないと思うが．．．．．

「．．．どうなるかは、分からないな」

エクシアが新たに追加されたGNロング・ショートブレイドを両手で縦横無尽に振るう度に、周囲のヘリオンは細切れになっていき、瞬く間に倒れていった。

……これがGNブレイド……エクシアの新装備。

これならイアン・ヴァステイ（ロックオン曰くおやっさん）が言っていた通り、大抵の物ならを難なく切断することが可能だろう。これなら確かにセブンスードという開発コード通りの機体に仕上がったと言える。

そのまま感動に浸っていたかったが、まだ周囲の敵が残っている事を鑑みて、すぐさま意識をそちらに切り替える。

すぐさま一番近い所にいたヘリオンに向かって駆け出すと、エクシアの体勢を低くし、そのまま右手に持ったGNロングブレイドで切り上げる。

「甘い！」

すぐさま背後から切りかかってきたヘリオンの攻撃をかわしてショートブレイドで反撃する。

ショートブレイドはヘリオンのコックピットのギリギリ上の方に突き刺さり、そのまま相手を両断した。

「次っ！」

私はそれを確認すると、すぐさま飛び上がりつつ、両手のGNブレイドを腰にマウントすると、そのまま武器をGNソードへと変更し、

ライフルモードで上空のヘリオン二体のリニアライフルを潰す。
そのままソードモードへとチェンジしたGNソードで、通り抜けざまに、二対を両断する。

「チッ！」

その直後に後方からリニアライフルで攻撃されたが、ギリギリでそれをかわすと、腰のGNダガーを投擲して、攻撃してきたヘリオン二対の頭部に突き刺す。

そして、振り向きざまに二本のビームサーベルを抜き、後ろから迫っていた二機を腰の部分から切断した。

「エクシア、フェイズ1終了。フェイズ2に・・・」

周囲に敵影が無い事を確認して、私がそう言葉を紡ごうとした瞬間、コックピット内にアラームが鳴り響く。

「っ！？」

咄嗟に操縦桿をきり、横から飛んできたリニアライフルの弾を避ける。

外れた弾丸は地上に着弾し、土煙を発生させた。

それにあまり気を向けずに正面に目を向けると、ディスプレイには上空を飛ぶ紺色と血の様な色をした二つの機影が見えた。

「新型か！？」

一瞬そう思ったが、冷静に観察するとどうやらそれは違ったようで、少し形が変わっているものの、それは私が計画発動の際、最初に相手をしたAEUの新型機“イナクト”だった。

血の色の方はこちらの出方を伺っているのかあまり目立ったアクションはしていなかったが、紺色の機体の方は、いきなり加速すると、此方へとリニアガンを撃ってきた。

「……………少々チューンして手を加えてあるようだが、性能は十分把握している。」

そう撃たれた弾丸を避けつつ、そう思っていたが、徐々に弾丸がエクスシアに近づいていき、遂には正確にとらえた。

「なに！？」

咄嗟にシールドで防御したが、動揺は大きな物ではなかった。

即座に回避のパターンを大きなものに変える。

だが、それでも敵は確実に当ててくる。

「……………まさか、動きが読まれている！？」

そう思ってしまうほどに、たて続けにイナクトは此方へと攻撃を当ててきた。

同時に度重なる動揺で動きが鈍くなった所に体当たりをしかけられ、エクスシアは倒されてしまった。

「ぐう！！」

『ははははは！機体はよくてもパイロットはイマイチのようだなあ。ええ！？ガンダムさんよ！！』

接触回線で、イナクトのパイロットの声が耳に届く。

しかしそれを聞いた瞬間に、私の頭の中は驚愕で埋まってしまった。

「あの声……ま、まさか!？」

驚愕に続いて、忌まわしい記憶が脳裏にフラッシュバックする。

自分をゲリラに仕立て上げた男。

自分の神への信仰を利用した男。

自分に両親を殺させた男。

……そして自分と仲間達と を見捨てた男。

『商売の邪魔ばっかしやがって!!』

「!?!」

脳裏にあの日の光景がはつきりと浮かぶ。

赤いウェーブのかかった長髪を風になびかせながら自分の前に立っていた姿。

ナイフの戦闘訓練で自分をあしらった時の、あの嘲笑。

そして、突如自分に襲い掛かってきた と1対1で白兵戦闘をしていた時の、あの狂笑。

………やはりそうなのか!？

『こちとらボーンナスがかかってんだ!!』

イナクトは可変しながら旋回するとそのまま蹴りを入れてくる。

私は腕をあげて防御するが衝撃でコックピットが揺れた。

しかし、そんな事は気にしていられなかった。

目の前にいるこの男が本当に奴なのかということしか頭にない。

そうもしている間に、イナクトが腕からソニックブレードを取り出す。

『別に無傷で手にいれようなんて思っちゃいねえ。リニアが効かないなら……切り刻むまでよ!!』

「っ!!」

私はブレイドを構えて向かってくるイナクトをかわすとビームサーベルで斬りかかる。
だが、

『ちょいさあ!!』

イナクトが振り向くと同時にエクシアの右手を蹴りあげ、ビームサーベルを弾き飛ばす。

……この動き……間違いない!!

激情に任せもう一方のビームサーベルで斬りかかるが、ブレイドで上手く弾かれビームサーベルを手放してしまう。

「……………!!」

私はは左腰に装備されたGNブレイドを抜いて再びイナクトをにらみつける。

GNブレイドは私の感情に反応するかのよう激しく振動している。

『一体何本持つてやがんだ……けどな!!』

そのままイナクトとエクシアは同時に相手へと踏み出し剣戟を重ねていく。

だが、エクシアは鎧迫り合いに持ち込まれるとそのままじりじり押されていく。

『動きが読めんだよ!!』

「くっ!!」

その時、再び脳裏に忌まわしい記憶がフラッシュバックした。

自分に銃を向けられ、驚きと戸惑い、そして悲しみの目を向ける母。

「やめて、ソラン・・・なぜ、どうしてなの・・・!!?」

そして、乾いた発砲音と小さな火花。

発砲音の余韻がなくなった後、母は力なく倒れた。

「う・・・う・・・ああああああ!!!!!!」

刹那の咆哮と同時にエクシアの胸部のジェネレーターが激しく輝き、解放された圧縮粒子とともにGNブレイドの切れ味があがっていく。そして、

『なに!?!』

危険を察知したイナクトはソニックブレイドを手放し、後ろに飛んで距離をとる。

ソニックブレイドはGNブレイドに刺さったような状態だったが、

離れた瞬間にガランと音を立てて二つに切断された状態で落下した。
それを見た私は、心の中でこんな事を呟く。

・・・・・・・・確かめなければ。

と。

光通信でイナクトのパイロットへと「出て来い」と告げると、エクシアのコックピットを開く。

そのまま私は、エクシアの外へと出た。

・・・・無論ヘルメットは付けた状態で。

暫らくすると、奴もコックピットから出てきた。

「素手でやりあう気か？ええ？ガンダムのパイロットさんよー!!」

同時に、奴は被っていたヘルメットを取る。

その下から現れた顔は・・・・・・・・

「・・・・・・・・!!」

・・・・間違いない！

あの頃と違って、顎鬚が生えて、髪も幾らか増えているが、この赤い髪に黄色の瞳は見間違えようが無い！

・・・・・・・・・・アリー・アル・サーシェス!!

その瞬間、私の中をありとあらゆる感情が駆け巡る。
戸惑い、疑問、決意、悲しみ、怒り、そして……憎悪。
忘れる筈が無い……忘れようが無い!!
この男の所為で、あの時、私は、私達は!!!!!!

カチャッ

気付くと、私は奴に銃口を向けていた。
奴も、既に銃を抜いて、狙いを私の頭につけている。

「なんだよなんだよ……わざわざ呼び出しておいてこれか
!! 面ぐらい拝ませろよ! ええ、おい! ?」

こっちも向こうも、徐々に引き金にかけている指に力を入れていき、
敵の眉間に向けて撃とうとする。

が、次の瞬間、上空からリニアガンが発射される時に鳴る、独特の
音が聞こえ、私は咄嗟にエクシアの中へと戻り、身体を固定させる
事もおざなりに、バックステップで直ぐにその場から退避した。

「チッ!!」

サーシエスも感付いたのか、いち早くコックピットに戻る。

直後に二人がさっきまで居た場所に、リニアガンの弾が2、3発ほど
着弾する。

私は弾が発射された方へと顔を向けた。

『……茶番はいい加減にして……いつまで先生と楽しい
事やってるのよ』

そこには先程サーシェスと共に此方へと攻撃してきたもう一機の血の様な色をしたイナクトが、MS形態に変形した状態でリニアライフルの銃口をエクシアへと向けていた。

外部スピーカーを使っているのか、その声はメガホンで拡声したかのように響いている。

しかし私はこの時、そんな事に構っていられるような精神状態ではなかった。

・・・この声・・・そして奴を先生と呼ぶだと・・・
・・・まさか!?

そして私のその疑問は、次のサーシェスの言葉によって確信に変わった。

『おい、ハディー!! テメエ何俺ごと撃とうとしてんだ!? 帰ってから【ピー】の【ピー】に【ピー】突っ込んで【ピーーーーーー】』

『イヤン 先生こわーい……………でも、そっちの方

があたしにとっては御褒美に『因みに俺じゃない奴にやらせてから、部下の連中の前に差し出す』マジすいませんでした』

・ ・ ・ ・ ・ ああ、うん。間違い無くこのやり取りはハデュージャ・アリエフだな。
確か ・ ・ ・ ・ ・ ド M ・ ・ ・ という物だったか？

「………たく………とりあえず謝ったから許すが………
次はもうねえぞ？」

『イエス！！マイ・マスター！！！！』

「………本当にコイツにはイラつかせられる………
見た目は良いんだが、いかんせん中身が駄目駄目っていうのはどう
いう事なんだろうか？」

コイツは？

「……まあ、それはともかく、だ。」

「で？」

『へ？』

「惚けんな。テメエが俺の邪魔をするのは、必要時以外ありえないからな」

なんだかんだ言っても、もうコイツとは10年近い付き合いだ。

流石にそれだけ長い間行動を共にしていれば、こいつの行動パターンなんて熟知できる。

『……流石は先生、私の事よく解ってくれてるよね（ボソツ）』

「何か言ったか？」

『うつん、何も？』

……チツ

「で？実際の所はどうなんだ？」

このまま漫才をやっても埒が明かない。

とにかく目の前の白と青と赤のガンダムが、既に体勢を整えていつ

でも此方に攻撃出来る様になっているのが見受けられるので、さつさと話を切り上げなければ何をされるか分かったもんじゃない。

そう考えて、ハディーの奴にさつさと言いたい事は何なのか言わせようと急かす。

するとアイツは、出撃前に見せた時のように、笑うところ言いやがった。

『……フフ。先生……どうやらメインディッシュが到着したみたいよ？』

ほら、と言って、ハディーは器用に自身の乗るイナクトの左手でガンダムの背後の空間を指差す。

それを聞いた瞬間、待ちわびていた玩具を手に入れた時の子供のように心が躍った。

そしてガンダムに対する警戒を緩めずに、俺もハディーが指差した方を見るが………

「……？何処だ？何処にもいねえじゃねえか」

そう、何処にも待ちわびていた、“まだ世界中の誰にも確認されていないガンダム”の姿は無い。

ハディーが冗談を言ったのかと一瞬錯覚するほど、そこには荒涼とした景色しか広がっていなかった。

しかしそんな俺の疑問を聞いたハディーは、笑みを深くすると、こう言いながら、

『……そうね……あたしも最初は見間違いかと思ったけど………』

イナクトにリニアライフルを構えさせて、

『………これで確信できるわ！！』

ガンダムの後方300mほどの距離にあった、MS大の大きな岩に向けて、弾を発射した。

すると次の瞬間、

シュバッ！

という音が鳴るかと思うくらいの勢いで、その岩が……いや。岩だと思っていた何かが突然空中へと飛び上がり、リニアライフルの弾を回避した。

その瞬間、俺はそれが何を意味しているか理解した。

……まさか擬態していやがったとでも言うのか！？

だとしたら恐ろしい事だ。

おそらく、化学的な小難しい理屈もあるのだろうが、だとしても“MSが擬態できる”という事実は、俺達のような傭兵やゲリラ屋にとつては恐怖ではない。

今さっきまでそこに岩や砂漠、もしくは密林のジャングルしか無かったと思っていたのに、次の瞬間、木や岩や砂漠だと思っていた物の中から敵が出てきたら、戸惑うだけでは済まないし、咄嗟に動けたとしても、反撃を始めた所の周囲や、逃げたりした先に擬態した敵が居たら完全にアウトだ。

もしもステルスなどであれば、逆に気付き易かったりするのだが……

『……あたしも、最初はただの岩かな、と思ったのよ』

不意にハディーが呟いた。

その間にも、飛び上がったそれは、先程まで岩表面そっくりの姿をしていたマントをたなびかせながら、太陽を背に此方よりも高い高度から此方を見下ろしている。

……まるで嘗て自分がまだ若かった頃に信じていた宗教にでてくる、神か何かのように。

『でも、目を離れた隙に、少しずつだけど、こっちに近づいてるのが、サブカメラの隅っこの方にチラッとだけ映っていたの。そ

れで辛うじて気付いたけど「そんな事は問題じゃねえさ……」

問題なのは……そう、そうだ。そんな事はたいした問題じゃねえ……

「行くぞハディー！上手い事やれば、追加ボーナスだ！！楽しむぞ！！！！！！」

コイツが楽しめるかどうかで事だ！！！！

『先生！本音が出ちゃってるよ！！コレ、一応仕事なんだから体面ぐらい取り繕って！！』

「五月蠅せええええええええええ！！！！！！！！！！！」

体面なんぞ構っていられるか！！！テメエもそんな事言いながら、もうとつくにリニアライフルぶっ放しながら、ソニックブレイド抜いて突っ込んでんじゃねえか！！

さあ始めようぜ！楽しい戦争をよお！！！！

「ええ！？マントのガンダムさんよおおおおお！！！！！！！！」

「ギアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！二人いつぺんに掛かってきたあ！！！！！！！！ちよ、やめて！！そんなに殺気発散しながら襲い掛かってこないで！！地獄の修行よりも遥かにマシだとは言え、流石にこれは無いでしょおおおおお！！！！？」

はい、只今大根RUN中でございます。

いきなり新システムの擬態モードキ見破られた上に、文字通り殺る気満々の二体に襲い掛かれたら流石にびびる。

しかしそうも言っていないのが現状！

「フンッ！」

まずはリニアライフルの弾をグレイズで避けつつ、ソニックブレイドで切りかかってきたワインレッド・・・と言っよりも、若干血みたいな感じの赤色のイナクトに一気に近づいて、その顔面に回し蹴りを打ち込む。

そのままよめいたイナクトの後ろから、もう一機青いイナクトが飛び出してくるが・・・

「甘いわー!!」

ソニックブレイドではなくリニアライフルの先に取り付けられていたブレイドで斬りつけてきた為、シールドで受け流しつつ、右手で胸の部分をぶん殴る。

そのまま今度は振り向いて、ツインライフルからビームサーベルを展開し、ツインライフルを捨ててソニックブレイド二本で切りかかってきたイナクトの攻撃を受け止める。

反対側から先程ぶん殴ったイナクトが、左手にソニックブレイドを持たせて同じ様に切りかかってきたが、

「分かり易いんだよ」

そう言いながら、シールドの下の小型シールドに予備的な意味合いも込めて装備したビームサーベルからビームを展開し、リニアライフルで撃たれる事も考慮して、シールドで相手を叩き落とすようにして、ブレイドを振り下ろされる前に、ビームサーベルでイナクトの左手首を切り飛ばす。

案の定イナクトは勢い良く振られたシールドに当たってバランスを崩したのか、地面へと吹っ飛ばされる。

「いつまでそんな物騒なもん押し付けとるかあ!!」

もう一機のイナクトも、同じ様にして吹っ飛ばそうとするが、その前に相手は此方の意図を読んだのか、ソニックブレイドの刃を消しながら、急降下で回避した。

舌打ちしながら肩のキャノン砲で追撃するも、向こうの方が小回り
は上なので5発ぶっ放したというのに、一発も当たらず逃げられる。
(文で書いている為密度はそこまで無いように感じられるが、実際
には5分くらい掛かっております)

再び舌打ちしながら、地上で呆然と此方を見ていたエクシアに対し
て、通信を入れる。

勿論、ボイスチェンジャーはONにして。

「エクシアのパイロット、色々と聞きたい事はあるが、ともかく今は
ミッションを続行しろ。出来るな?」

『っ。あ、ああ』

「それだけ返事できれば十分だ。丁度良く近くにお仲間も居る事だ
から、一緒に連れて行ってもらえ」

そう言いながら、視線を少しエクシアの右側面からちょっと向こう
に移す。

そこにはスナイパーライフルを構える白とモスグリーンの機体が、
映っていた。

「……心なしか銃口がこっちに向けられているような気がする
のは何故だろう?」

『なっ……ロックオン!?』

『まったくこの馬鹿！何やってんだ！？ギリギリで気付けたから良いものの、一歩間違えればお前は死んでたんだぞ！？わかってんのか！』

白とモスグリーンの機体

デユナメスのマイスター

ロッ

クオン・ストラトスと思われる人物の怒声がコックピットの中に響く。

どうやらかわいい妹分のアホな行動に、心配半分怒り半分といった感じで説教をしようとしているのだろっ。

……ただ、今はまだ困る。

「それくらいにしてあげてくれ。説教も良いが、まだミッション中だし、敵も残っている。お叱りだったら、ミッションが終わった後にしてくれ。序でにその銃口を下ろしてくれると、私はとても安心できるのだが……」

別に怒るなど言ってる訳じゃないが、今此処で説教されると色々とまずい。

『……分かったよ。銃向けて済まなかったな』

「問題ない。不本意だが、身内から（シミュレーターの意味で主に約一名から）銃を向けられるのは慣れている」

『……』

スピーカーの向こうで、なんとも言えない空気が広がっているのが感じられる。

まあ、そりゃあいきなりこんな事力ミングアウトされても、どう反

応するのか困るだろう。

俺だって・・・・・・・・・・たぶん・・・・・・・・・・そうなる・・・・・・・・・・等。

『・・・・・・・・・・悪い』

「そんな哀れむような声でそんな言葉を掛けないでくれ。泣けてきてしまうだろう」

結構マジだ。もうちょっとウルツと来ている。

「・・・・・・・・・・ともかく、今はミツシヨンの続行を優先してくれ。この2機は此方で引き受けよう」

そう言つて、俺は誤魔化すように先程のイナクト二体に向き直る。どうやらシールドでぶん殴った時に、何処かイカレたらしく、青い方のイナクトが上手く立ち上がれて居ない。

そのまま少しの間向こうと此方の間で膠着状態が続くが、どうやらこれ以上の戦闘続行は不可能と判断したのか、青い方はそのまま戦闘機形態となり、撤退していった。

「・・・・・・・・訂正しよう。残った一体は私に任せろ」

『・・・・・・・・んじゃ、頼むとしますかね。さっきは済まなかったな。刹那、行くぞ』

『あ、ああ』

そう言いながら、空へと飛び上がり、撤退していくエクシアとデュナメス。

それを逃すまいと、何時の間にかその手に戻したりニアライフルで、残ったもう一体の赤いイナクトが弾を発射しようとするが、それをリニアライフルだけ、ツインライフルで破壊することで妨害する。

『援護感謝する』

ふとそんな言葉を刹那に言われた。

本当に何処でも変わらない娘だな、この子は。

裏表が無いと言う意味ではいい事だと思うが……

「……別に感謝されるような事はしていないよ。君らを助ける事が私の仕事なのでね。ほら、さっさと行って、しっかりと叱られてきなさい。まだ若いんだから」

苦笑いしながらそう返すと、最後らへんが気に食わなかったのか、刹那は少しムツとした。

「そうそう。そうやってもう少し子供らしくしなさい。お前さん、普通にかわいいんだから……とと、今は気にしないでくれ」

危ね。今一瞬“O-O1”から“アムロ”に戻りかけた。

こつという事があるから気は抜けないんだよなあ……

……口説いたわけではないよ？あくまで保護者としての言

葉よ今の。

お解り？

『……！』ブツッ

あ、通信切られた。

くだらないと思ったのか、それとも照れ隠しか……たぶん前

者だろうなあ……と。

『さて……』

今度は外部マイクを使って、イナクトに語りかける。

ボイスチェンジャーで声はさつきと変えてあり、今は20代の女性のような声だ。

どうやら向こうは興味を持ったらしく、返事を返してきてくれた。

『何？大人しくあたしにバラバラにされる気にでもなった？』

『……中々物騒だな、君は。声の感じからすると、女性かね？』

『それはこつちのセリフよ。良いの？堂々と外部スピーカーなんかで話しちゃって？』

『本来は駄目なのだが……生憎と、この機体にはボイスチェンジャーが標準搭載されていてね。勝手に私の声をランダムで変えてしまうのだ』

無論嘘だ。

チェンジャー自体は任意でONとOFFの切り替えは可能だし、変声後の声も自分で設定できる。

それでも向こうはそれで納得したらしい。

『ふーん……あ、そう……それじゃ……』

そう言ってイナクトが再びブレイドを2本構えて……

『始めましょうか！！！！』

そう言つて突つ込んできた！

直ぐに此方もツインライフルから展開したサーベルでそれらを受け止めようとする。
が、

バチィ！

という音と共に受け止められたのは、右腕の一本のみ。
もう片方は……

『甘いのよ！』

という言葉と共に、横薙ぎに振られ、正確に此方の胴体と腰の接続部分を狙つてきた。

『お前がな』

ただ、その攻撃は少し考えれば分かる物だった為、左足を蹴りを入れるように振り上げ、その裏の展開式クローアームでブレイドの付け根ごと左手を掴み、そのまま握りつぶす。

『なっ……』

『まだだ』

直後に右手のブレイドを振り払いつつ、回転蹴りをお見舞いしてやる。
が、それは読んでいた様で、難なく避けられた。

しかし……

ドキュウン

という音と共に、回転蹴りの最中に相手の死角を利用してサーベルモードから元に戻したツインライフルを、相手の頭部目掛けて発射する。

が、驚くべき事に、相手はその攻撃をまるで最初から分かっていたかのように回避し、そのまま再び右手のブレイドで切りかかってきた。

思わず「あら」という間抜けな声が口から出てしまうが、気を取り直してイナクトに向き直る。

そして突っ込んできたイナクトの上を、宙返りの要領で越え、マントの裏から使い慣れたビームピストルを取り出して、イナクトの右腕を肩の付け根から吹き飛ばす。

バランスを崩したイナクトはそのまま地面に激突しそうになるが、その隙を見逃す俺ではない。

直ぐに接近して行って、あいての頭と腰を引っ掴むと、そのままダメ押しのつもりでコックピットのある腹部を思いっきり蹴り飛ばす。

バギン

という乾いた音と共に、イナクトの頭と腰が付け根から碎け散った。可哀相な気もするが、序でに左手と背面のブースターも破壊し、文字通り“達磨よりも酷い状態”になったイナクトに問いかける。

『……さて、どうする？続けるかね？』

返答は、無い。

『………一体なんの話かね？』

『惚けてるんじゃないわよ！！！！あの動きあのコンボ……あ
あ、やっぱりアンタだったのね！！！！ってことは、さっきのあの
トリコロールのガンダムはソランでしょ！？ソラン・イブラヒム！
！』

………っ！？

何故コイツ、刹那の本名を知っている！？

以前師匠からマイスターの詳細データを渡された際に、全員の本名
を見た事はあるが、アレはたしかランク5だか7の情報で、こんな
所で傭兵をやっているような奴が見られるはずが無いのに！？
……まさか、あの動きだけで分かったとも言っのか！？

そんな疑問が頭の中を支配しているおれに、次の瞬間、イナクトの
パイロットは、こう言った。

『勿論あんたにも会いたかったわよ！！！！ねえ！！』

エイジ・ヴェージェフ！！

『・・・誰の事かね？それは？そんな人間私の知り合いには居ないな』

あら？あくまで惚ける気かしら？
それとも忘れてるのかしら？

『忘れちゃってるの？だとしたらソランが可哀相ね？あれだけ双子の妹のように可愛がってくれた昔の恋人が、今はすっかり自分のことを忘れちゃってるなんて』

『・・・いや、本当に知らないのだが・・・』

・・・本当に忘れてるみたいね・・・

『つれないわね。昔はあれだけ楽しく愛し合っ殺しあったたのに』

『愛し合つと書いて殺しあつと読む人間は私の知り合いには居ない』

『・・・結構メタな発言するわね・・・』

『君のほうもな』

そういうと、エイジはガンダムの踵を返して、空の彼方へと跳んで行った。

それを見届けた後、私はある事に気が付く。

「……………いつけない。結局お仕事失敗だわ、これ」

だとしたら非常にマズイ。

先生からオシオキをされるのは一向に構わないが、今回は先生意外から淫猥なオシオキをされる可能性がある。

それは非常にマズイ。というかイヤだ。

最悪の場合変なことをしようとした奴らを切り刻めば問題は無いが、その場合は先生に二度と口を聞いて貰えなくなるかもしれない。

「……………全く、今日は厄日なんだか吉日だったんだか……………」

そう言いながら、辛うじて生き残ったカメラに先生の機体と、うちのPMCの機体が映る。

どうやらお迎えが来たようだ。

と、突然通信が入る。

大体この場合、かけて来るのは先生だ。

「…………ハア…………しょうがないから大人しく怒られるか。怒られるだけなら気持ち良くて興奮するんだけど、小言を言われ続けるのはなあ」

観念してスイッチを入れつつ、モニターに映った空を見上げる。
そこにはまだ、エイジの乗ったガンダムが撒き散らしていた翠の

粒子が微かに漂っていた。

七話

過去と対峙しました（またしても不本意）

後編（後書き）

如何でしたでしょうか？
どうも雑炊です。

いきなりですが、今回は補足説明をさせていただきます。

ハディーの口調が戦闘中と戦闘無しの時と変わっている理由ですが、簡単に言うと彼女は戦闘に突入すると、気合を入れるために口調をわざと変えているからです。

え？そこまで変わってない？それは失礼いたしました・・・・・・・・

・

で、アムロの過去っぽい物と、本作品の刹那の過去っぽい物もチラッと入れてみました。

これ、一応伏線です。

回収するのはもうちょっと後だけど。

で、此処からがアンケートになります。

簡単にご説明いたしますと、

『ロックオン兄貴^{ニール}って、原作通り死亡させちゃっていいの？それとも生き残らせた方がいいの？』

・・・と、言う物です。

一応活動報告には、片方のルートを選んだ場合のその後の進行が、簡単に書いてあります。

（変わる場合もありますが、概ねあんな感じです。因みにフラグやイベントの名前は、諸事情により代筆した妹が、プロットを見て勝手に考えた物らしいです）

基本的に特に何も考えずに気軽に書いてくださってOKです。

締め切りは・・・・・・大体、今月の末くらいまでですかね。

ただ、私の場合、結構優柔不断でフラフラしている節があるので、伸びる可能性もあります。

ま、そんな感じだと思ってくださって結構です。

所詮私ですから。

それではまた次回！

9 / 15

すみません。良くチェックし損ねていて分からなかったのですが、本来書き上げた部分がちゃんと投稿されていなかったもので、修正して再び上げさせて頂きました。真に申し訳ありませんでした。

八話 モラリアの後始末（相棒の秘密もあるよ）（前書き）

はい、八話です。

今回は前回のお詫びも兼ねて、早く投稿してみました。

ただ、その分お話はあんまり進んでいないし、いつもより若干短い
です。

すみません。

それでは本編をどうぞ

八話 モラリアの後始末（相棒の秘密もあるよ）

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ド初っぱから無言でごめんなさいね。

ちよつと考え事してたわ。

と、言うのも、先程の赤いイナクトのパイロットが言っていた、あの名前についてだ。

確か・・・・・・・・

「エイジ・ヴェーリエフ！エイジ・ヴェーリエフ！」

ハロがそう言つて、教えてくれた。

そうだ、“エイジ・ヴェーリエフ”だっけ。

妙にその名前が頭に残っている。

確かに俺は師匠に拾われる以前の記憶がすっからかんだから、もしかしたらそれが俺の“昔の名前”なのかもしれないけど・・・・・・・・

「・・・・・・・・なんかおかしいんだよな・・・・・・・・」

そう、おかしいのだ。

もし俺が、本当にその人物だったとしたら、何故ソラン・イブラヒム 刹那・F・セイエイは、初対面の時に、あそこまで無反応だったのだろうか？

本人が忘れているという事もあるかもしれないが、それにしたって昔会った事があるとしたら、もうちよつと何らかのリアクションを起こしても良いのだと思うが・・・・・・・・

・・・それに、その名前を聞いても、俺の頭には何の波紋も起こら

ない。

本当に聞き覚えが無いかのように。

・・・それとも・・・？

「ポイント到着！ポイント到着！」

ふと、そんなハ口の言葉で現実に戻された。

眼下を見下ろすと、青、緑、オレンジ、紫、赤のカラフルなパイロットスーツを着た、5人の男女が見える。

どうやら青いパイロットスーツの人物が、緑のパイロットスーツの人物に頬を叩かれてから、お叱りを受けているらしい。

・・・まあ、大体誰か分かるが。

「ハ口、降りるぞ」

「了解、了解」

そう言うってから、俺はOガンダムを近くの茂みに隠してからGN偏光特殊ステルスによって、Oガンダムが被っているGNマントの見た目を近くの茂みの木々にそっくりにしてから、ハ口を持ってヘルメットを被ったまま、機体から降りてその一団の近くへと歩き出した。

あの後、軍事演習上近くの狭い峡谷の中を抜けて、司令部を襲撃し、ものの5分足らずで無条件降伏信号を司令部から空へと打ち上げさせた俺達は、大西洋のある孤島に全員集まり、今回ミッション中に問題行動を起こしたお嬢さんにカミナリを落としていた。

パン！

「つつ・・・」

「・・・さて、刹那・・・さっきもミッション中に一応叱ったし質問もしたが、ここでもう一度お前に質問させてもらう・・・なぜ敵に姿をさらした？」

数秒間の沈黙。

だが、未だ刹那は顔を下に逸らしたまま黙っている。

「理由ぐらい言えって。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それでも刹那は喋らない。

俺は表情を一層厳しくし、脅すように問いかける。

「強情だな・・・お仕置きが足りないか？」

それでも黙ったまま。

業を煮やした俺が、もう一度叩こうとすると、横から銃を構える音がした。

ティエリアだ。

コイツもどうやら俺と同じ様に業を煮やしたらしい。

しかしそれはあまりにも拙過ぎる！

「言いたくないなら言わなくていい。君は危険な存在だ」

「やめろティエリア！」

慌ててティエリアの銃を押さえ込む。

「彼の愚かな振る舞いを許せば、我々にまで危険が及ぶ。以前のユ
フアイエンリ・花園のような事態に陥る可能性も無くはない」

それを聞いたユリが、顔を暗くする。

確かにあの時は危なかった。

もしあの時、正体不明の機体が来てくれなかったらと思うと……
ぞつとする。

……その時だった。

ガサッ

「あ、ヤベっ（ボソッ）」

そんな音と声が近くの茂みから聞こえた。

咄嗟に全員で銃を抜き、その方向に向ける。

そこに居たのは……

「ぬおおお！？いきなり銃口を向けるな！？決して私は怪しい物ではない！そしてその緑色の男！一日に二回も同じ人に銃口向けるとはどういう見だ！？……って紫色の優男は引き金にかけた指に力を込めるな！？怖い！怖いから！？」

黒い線が縦に入った、西瓜のようなカラーリングのハ口を両手で盾にしながら慌てている怪しさ満点の白いパイロットスーツを着た人物と、

「盾ニスルノ止メロ！盾ニスルノ止メロ！放セ！放セ！」

そいつの手から必死に逃げ出そうとしている、西瓜のようなカラーリングのハ口が居た。

「……………テラカオス」

「刹那。そんな言葉何処で覚えてきた？別に怒ったりしないからお父さんに包み隠さず話さない」

「……………で？つまりお前さんは、今日俺たちをコッソリと援護してくれてた、“あのガンダム”のマイスター……………だど？」

「……………あ……………嘘は言っていないから、いい加減その親の敵を見るような目とか、警戒心剥き出しの目は止めて欲しいのだが……………」

「悪いが、こっちも立場上、ホイホイとそんな言葉を信用する訳にはいかないんでね……………何か証拠になるような物でもあれば良いが……………」

その後、とりあえずその場にコイツを正座させて、俺メインでこの正体不明のガンダムマイスターに尋問をしている。

今分かっている事は、

- ・ボイスチェンジャーで声を変えている。
- ・正体をバラすと、計画が根本から破綻しかねない為、ヘルメットは脱げない。ボイスチェンジャーもOFFできない。
- ・監視者も自分と愛機のガンダムの存在は一切知らない。むしろ知られた場合、自分に知った人間の抹殺許可がヴェーダから直々に下りる。

・現状自分を知っているのは、今此処に居るマイスター全員と、彼の上司。そして王留美ワンユーミンのみ。

という事を話してくれた。

「他には？」

「禁則事項で『スチャ』待て待て待て！！本当に禁則事項なのだ！！なんだつたらヴェーダに直接聞いてみてくれれば良い！！それでも駄目だったなら、ええい！もういつそ煮るのも焼くのも好きにするが良い！！！！！」

そう言つてその場で腕を組んで胡坐でどっしりと座り込む白いパイロットスーツの人物・・・ああもう長いから、不審者でいいか。不審者がそうしてから、俺達は一度コイツから距離を取り、円陣を汲むようにして話し合う事にした。

「・・・どう思う？」

「嘘は言つてる様には見えないけど・・・ユリ。以前君を助けてくれた人は、あんな声だった？」

「・・・んー・・・いや、もっと若かったな・・・どっちかというと、刹那くらいの少年の様な感じだった・・・だがボイスチェンジャーを使っていると、その限りではないかも・・・しかし・・・うゝん・・・ティエリア。お前はと思う？」

「・・・あんなマイスターの存在は、ヴェーダからは教えて貰つてはいない・・・しかし、ヴェーダの名前まで出したという事は、信頼性は高い・・・彼が、此処から逃げ出す為に、嘘をついている訳ではなければの話だが・・・刹那・F・セイエイ。君の意見も、参考程度に聞かせてもらおう」

「お腹がへった」

「よし。黙っている」

「冗談だ。空腹なのは本当だが」

「冗談って言えるの？それ……」

突然の刹那のボケに、俺を含めて刹那を除いた全員が脱力してしまう。

刹那は以前よりも、雰囲気が柔らかくなった。

のは良いものの、最近はどういったシリアスな状況下で天然ボケをかます事が多くなってきた。

確かにリラックスは出来るが、若干KYになっているような感はある。めないんだよねあ……
本当に、一体何が原因なんだか。

「で、刹那。お前の意見は？」

「……信用は、出来ると思う」

「……ほう。意外な言葉が出てきたな。」

意外な刹那の言葉に、思わず驚いて目を見開く。

それはティエリアも同じだった様で、殆ど俺と同じリアクションをしていた。

「その根拠は？」

「助けてくれた事は事実だ。それに、何かを企んでいるのなら、今

でもそこで暢気^{のんき}に寝てなどいられない筈だからな」

意外な事に、刹那のやつは結構ちゃんと考えて物を言っていた。
計画発動当初と比べると、本当に随分と成長したもんだ……っ
て、ん？

寝ている？誰が？

刹那の言葉に驚いて、俺たちが振り返ると……

「Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z Z
. . .」

……そこには胡坐を掻いて腕を組んだまま、器用にヘルメツ
ト被りっぱなしの頭を前後に動かして船を漕ぎながら寝息を立てて
いる不審者が、西瓜柄の八口を抱えて座っていた。

………つてえ！

「起きろこの馬鹿！」

ガスッ！

思わず怒り半分呆れ半分で、不審者の頭を引つ叩ばたいてしまう。
引つ叩かれた方は、引つ叩かれた方で、「何だ！？敵襲か！？竹槍は？竹槍は何処だ！？非常食は！？」などと置きぬけに喚きつつアタフタしている。

「尋問中に寝てんじゃねえよ．．．．．つたく．．．とりあえず、お前さんの事を俺達は信用するって事で意見は纏まった」

「おお、そうか。スマンな」

先程の雰囲気とは打って変わって落ち着いた感じで話す不審者。
どうやら自分の言う事がやっと信じてもらえた事で、ホッとしたらしい。

「．．．．．こうやって見ると、何処かティーンエイジャーのような感じもするな、こいつ．．．．．」

ただ、落ち着いた状態のこいつと話していると、自分と同年代か、それ以上の人間と話しているように錯覚することもあるから．．．．．
．．．．．なんだかなあ．．．．．？

なんというか、この不審者、雰囲気がチグハグなのだ。
それが更にこいつの怪しさを倍増させている訳なのだが．．．．．
．．．

「？どうかしたかね？」

「．．．．．いや、なんでもない」

「？」

「．．．．．気付いてないんだろうなあ、こいつ．．．．．」

そんな事を目の前の男が考えているとは露知らず、やっと尋問から解放された俺は、当初の目的を果たす為に、ティエリア・アーデに頼んで、トレミーの艦長兼戦術予報士の“スメラギ・李・ノリエガ”へと、通信を繋げてもらった。

今、彼女を含めた実働部隊　プトレマイオス（通称トレミー）のメンバーは、今回のミッションのオペレーティングの為に、王留美が用意した別荘に居るらしい。

最初は渋っていたティエリアも、『頭を下げる　土下座　地面に頭を擦る　ボソツと「ヴェーダ」と呟く』というコンボの前には流石に耐え切れなかったようで、（凄く不本意そうではあったものの）快く貸してくれた。

ピピピピ・ピピピピ・ピピピピ・ピピ

程無くして、通信端末にもものっそい美人さんの顔が映る。

・・・なんだかすごく眠そうなのは何故だろう？

『はい』

「あ、始めまして。私今回トレミーのミッションのバックアップに当たらせて頂いた、“O・O1”といいます。以後、よろしく願います」

『あ、ど、どうも。ご丁寧にありがとうございます』

とりあえず人付き合いで大切なのは挨拶である。

特に初対面での挨拶で、その人の第一印象が決まってしまうのであるべくこういった組織の中では礼儀正しくしといた方が良いのだ。

・・・何？そんな事言っただったら、ヘルメット取れたと？

取れるんだったらもうとつくのとうに取っとるわい！

さて今何回『と』って言ったでしょう？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・い

かな。

精神的な疲れと正座をしていた事による足の痺れと、ずっと演技をしていた事によってフラストレーションが溜まり過ぎて、頭の中がパーになりかけている様だ。

さっさと用事を終わらせて、さっさと家に帰って、ゆっくり休もう。

『・・・・・・・・えつと、私も自己紹介した方が良いのかしら？』

「そちらの御判断に任せます」

『・・・・・・・・そしたら、通信を傍受されている可能性も考えて、此方は自己紹介しないという事で・・・ごめんなさいね？そっちにだけ名乗らせちゃって』

「いえ、お気になさらず。とりあえず、今回私がそちらへと連絡している理由を掻い摘んで説明いたします。というのも、私の上司から、今回、もしも実働部隊に会うようであれば、このデータを渡しておいてくれ、と言われておりまして」

そう言いながら、俺はハロを呼ぶ。

ついさっきまで楽しそうにオレンジハロと遊んでいたのを邪魔されたのが不服だったのか、若干後ろを向きながら、此方へと跳ねてきた。

「ナンダ？ナンダ？」

「ハロ、データを出してくれ。ああ、それと、初対面の人だからちゃんと挨拶して置くように」

「M E N D O K U S E」(・・)

「コラ」

そう言いながら、少し小突く。

するとブーブー文句を言いながらも、口からコードを出してくれた。それを端末に接続して、向こうのパソコンにデータを転送する。

データの中身は俺も良くは知らないが、おそらく師匠の事だから、また碌でもない事が書いてあるに違いない。

『・・・なんだか』

「はい？」

「ナンダ？ナンダ？」

『いえ・・・なんだか貴方のハ口って、私達の知るハ口よりも何処か感情豊かな気がして・・・』

ふと、スメラギさんが俺のハ口を見てこんな事を言った。

一瞬だがその言葉の意味が分からず怪訝に思ったが、ふと相棒を見た瞬間にその言葉の意味が分かった。

本来、ソレスタルビーイングで運用されている“ハ口”は必要最小限の人員で活動を行うために、回避運動などMSのサブパイロットから専属の小型ロボットによるメンテナンス活動など、あらゆる面をこなす独立型マルチAIとして存在する。

元々は2196年に太陽炉の製造に当たっていた木星探査船“エウロパ”で太陽炉の開発に携わったとあるイノベイドの手により、ハンドメイドで製作され、その1台がGNDドライヴと共に地球に送られ、それを発見したCBのメンバーがコピーしたものだ。

しかし、おそらくその当時はそこまで多種多様なシステムは搭載はしていなかっただろう。

閑話休題

で、この“ハ口”は、勿論人間とコミュニケーションを取る為に、会話機能が搭載されている。

・・・といっても、人間のように感情といった物は、きちんとプログラムはされていないのだが。

（例外として、一部の物にはイノベイドのパーソナルデータが入力されている為、それらに関してはきちんと人間と同じ様に感情もあれば、自身の本来の姿を映すためのホログラム機能も搭載されていたりする）

おそらくその為だろう。

スメラギさんが、俺のハ口を見た瞬間に少し驚いたのは。補足すると、俺のハ口が此処まで表情豊かなのにはキチンと理由がある。

以前も言ったと思うが、俺のハ口は師匠と俺の手によって、大幅な魔改造とも呼ぶべき処理が施されている。

その際に師匠は何を思ったのか、本来であれば手に入るはずも無いレベルの、丸い形をした超超超高性能スパコン 小型のヴェーダのとも言っべき、オーバーテクノロジーの塊を持ってきやがったのだ。

師匠曰く、“もう一つのヴェーダ”を作る際の副産物として出来上がった物らしいのだが……。調べてみた結果、本物と比べても容量が100ギガバイトくらい低いだけで、十分にヴェーダの代わりが出来るレベルの物品だった。

ハッキリ言って、これには流石の師匠もリアルに腰を抜かした。

どうやらこのヴェーダ自体は、師匠が他のイノベイドに“完璧なヴェーダのコピー”を作らせた際に失敗作として提出された物だったらしく、このときに調べるまで、師匠は『どうせ他のスパコンと変わらない物品』としか認識していなかったらしい。

というか、ちゃんとこれが何なのか解っていたら、絶対こんな物俺に渡したりしないで自分で使っような、この人。

閑話休題

とまあ、そんなチート臭い……。というか、チートそのものなスパコンを搭載している結果として、コイツは空き容量を殆ど無駄な機能に使っていたりする。

例えば大量のゲーム（ジャンル問わず）。

例えば膨大な映画やアニメやドラマやバラエティ番組のデータ（無論ジャンル問わず）。

例えば俺が取り付けたカメラ機能、及びヴェーダにアクセスした際

に記録した、地球上に一市民として存在しているイノベイドたちから送られてくるデータによる、様々な人や動植物の日常の映像。
e t c , e t c , e t c

そんな物を大量に保存し、暇な時には延々とそれらを見続けていた結果。

驚くべき事に、俺のハ口コイツは人間となんら変わらない【心】を学習し、獲得するまでに至ったのである。

因みに、知能は人間の3歳児程度らしい。
しかももつと驚くべき事に、コイツはいまだに自分で自分を改良しているらしい。

その根拠は、つい先日、暇潰しにこいつをメンテしたときに、ふとそのスパコンの容量を見てみたら、なんと10メガバイトほど容量が増えていたのだ。

一瞬目の錯覚かと思ったが、何度見返してみても、その10メガバイトは存在し続けている。

流石におかしいと思って相棒を問い質した所、なんとコイツは勝手に自分の中のスパコンの容量を増やす為に、色々と自分で細工していたらしい。

3歳児程度の知能でここまで出来るか？とも一瞬思ったが、よくよく聞いてみると、明らかに弁明の内容の所々によく聞き慣れた言葉の使い回しが見て取れた。

一体誰の使い回しかというと・・・・・・まあ、もう解ってるだろうとは思うが、やっぱり師匠だった。

どうやら相棒が自分の力で進化しようとしているのを面白がって、色々と助言したらしい。

閑話休題

とりあえず、スメラギさんには間違ってもこんな事言えないので、

適当に「自分と師匠で弄くった結果こうなりました」と言うておく事にした。

・・・それでも彼女は納得したようには見えなかったけど。

暫らくすると、データが全て転送された事を告げるメッセージが画面上に映し出される。

これで本日の俺の仕事は終了だ。

なんとも長い一日だったものだ（汗

・・・が、それもこれまで。

とりあえず師匠から渡された計画のプロットを見る限り、当分は俺にお鉢は回って来ない筈だったので、その分家でゆつくりできる・・・筈だ。何事もなければ。

「これでデータの受け渡しは終了。同時に私に課せられたミッションとそちらの今回のミッションは終了となります。お疲れ様です。夜分遅くに申し訳ありませんでした」

『んゝまだ“夜分遅く”という言葉にはちょっと語弊のある時間帯なんだけど・・・まあいいわ。そちらもお疲れ様。協力感謝します』

「いえいえ、大した事はしていませんよ」

そう言うてから、「それでは」と言いながら頭を下げて、通信を切った。

そして後ろを向いてから、そのまま自分の機体のほうへと歩きだ

「おいちょっと待て」

せなかった。

内心で舌打ちしながらも、今声を掛けてきた青年 ロックオン・ストラトスの方へと振り返る。

「何か？」

「あ、いや、何かって言うかな……もう帰るのか？」

「ああ。元々私の仕事は今の一軒だけだったのでな。仕事が終わったら私はさっさと自宅に帰る主義だ」

「……そうか……いや、呼び止めて悪かった。それだけ聞ければ十分だ」

「何、特に気にはおらんよ」

そう言っただけを返そうとして……ふと立ち止まる。

……そうだ、面白い事を思いついた。

そう考えて、刹那の方へと振り返る。

向こうは突然俺が自分を向いたので、何事かと怪訝な顔をしている。そんな彼女に、俺はこう言っただけだ。

「アムロ・レイから伝言だ。『何か大ボカやったみたいだから、これから3日間、何か特別な事でもない限りは、お前のゴハンはおにぎりだけだ』だそうだ」

【せつなは めのまえが まっくらに なった ！！】

スメラギ・李・ノリエガは……いや。

彼女と共にその場に居たトレミーのメンバーは、今、もしかしたらソレスタルビーイングが計画を発動してから、嘗て無いほどに困惑していた。

理由は、謎のマイスター
O-01から送られてきたデータの
内容だった。

その内容はただ簡潔にこうとだけ書いてあった。

『何かマイスター達の息が合っていないというか仲が悪そうなので、日本にあるアジトで親睦会でもやろうと思います。日程は大体今から3日後。参加者はトレミーのマイスター全員（強制）と、参加希望者。及び現地のエージェントと関係者のみでやろうと思います。遅刻しないように。因みに場所は添付ファイルの中に、地図で書いてあります。』

P・S：一応これはヴェーダからの提案です。

更に追伸：刹那・F・セイエイへのオシオキは、おそらくこれを届けた人間がサラツと終わらせていると思うので、あまり追求してあげないで下さい』

「……………どういう事？」

おそらく今此処にいるトレミークルの全員が、そう思っていた。ただ、約一名、桃色の髪を持つ少女だけは、“現地のエージェント”が一体誰だかわかってしまい、密かに合掌して祈りを捧げた。

「……………どういうことっすかね？これ？」

まず最初に声を出したのは、プトレマイオスの操舵士“リヒテンダール・ツエーリ”
通称リヒティだ。

普段、陽気で調子のいい性格をしている彼も、このデータには流石に啞然としているらしい。

「どついう事って……………こついう事じゃ、ないの？」

彼の疑問の声に返答したのは、プトレマイオスの戦況オペレーター
の一人である“クリスティナ・シエラ”
。

かく言う彼女も、イマイチ文面の内容を理解できてはいないらしく、
リヒティに対する返答も、語尾が疑問形になっている。

「畏という可能性は無いのか？」

プトレマイオスの砲撃士でもあり、予備マイスターとしても登録されている“ラッセ・アイオン”が畏である可能性を指摘したが、

「それは……………無いと思う」

というフェルトの言葉によって、その可能性は即座に否定された。

それを聞いたスメラギが、ハッキリと否定の言葉をあらわしたフェルトに驚きつつも、彼女に怪訝そうな声で疑問を漏らす。

「・・・なぜ、そう言いきれなの？確かに地図までご丁寧に付けてきてくれているし、住所もしっかり・・・と言いか、電話番号まで書いてあるわね・・・まあ、いいわ。それはともかく、此処まで書いてあっても、そこまで信頼性のある情報ではないと思うけど・・・」

彼女がそう言った瞬間、フェルトはこう言った。

「・・・だって・・・」

「だって・・・何？フェルト」

少し口籠ったフェルトに、クリスが答えを促す。

そのまま少し口籠っていたフェルトだったが、その内ややあってこう言った。

「だって・・・その場所・・・少し前に私が刹那とユリと一緒に潜伏してた所なんだもん・・・」

そのエージェントの連絡先も分かるよ、と言って、携帯端末を取り出すフェルト。

暫らくしてからその一室から、驚愕の叫びが大音量で王留美の別荘全体に響いた。

「ブエックシヨイ!!!!!!……うろ?何なんだ
今日は?何か俺、今日こんな感じの事ばかりじゃない?」

「気ニスンナ!気ニスンナ!」

その頃、何も知らないアムロ^{生贄}は、Oガンダムに乗って、なんとも暢
気に日本海上空を、自宅に向かって飛んでいた。
……そこに悪魔が待っている事も知らずに。

「フフフフフ………アムロ。僕がこんな面白い事、放っておくと思っていたのかい？」

黄緑の悪魔は笑う。
子羊の哀れな行く末を思って。

八話 モラリアの後始末（相棒の秘密もあるよ）（後書き）

如何でしたでしょうか？

どうも雑炊です。

今回はモラリアの後話と、ハロの秘密。

そして次回の馬鹿騒ぎの下準備を描写してみました。

なので戦闘描写は一切ありません。

そしてトレミークルー（おそらく）初登場！（フェルト以外）

おやつさんとモノレ先生は、所用で只今席を外しておりましたが、次回にはちゃんと確実に登場すると思いますよ！

口調が合っているか、激しく心配です………

それではまた次回！

九話

親睦会やりました（一応家主の善俺になんの断りも無く話は進んで

今回は親睦会です。

・・・が、もしかしたらそこまでハツチャけられてないかも・・・

・

あと、一部の人間に激しいキャラ崩壊がありますので、そういうのが苦手な方はご注意を。

それでは本編をどうぞ

九話

親睦会やりました（一応家主の善俺になんの断りも無く話は進んで

「という訳で3日後に親睦会やるよー！！！」

「とりあえず色々と言いたい事は多々あるが、これだけは言わせてくれ師匠。どうやって入ったし」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・疲れた身体を癒す為に家に帰って見たら、何故か師匠と姉さん達が物凄く寛いでいました。」

何がおきているか分かりませんでした。

幻覚とかそんなちやちなもんではなかったと思います・・・・・・・・・・あれ？作文？

等と阿呆な事が余裕で考えられるくらいに、俺は混乱していた。とりあえず視界の隅で、リヴァイブ兄さんが何故かメイド服着せられて、グラীবさんとヒクサーさんが、頬を引き攣らせながら、そんな彼からお酌されているというカオスな光景が見えた事は確かである。

「・・・・・・・・つーか何やってんのさ、兄さん。」

「アンタそんなキャラじゃな・・・・何？スパジエネの試合で最下位になったからバツゲーム？」

「有り得ないだろ。第一リジエネ兄さんが居るんだからそんな事あるはず無い・・・・・・・・等。」

「そう思いながら、テレビの方を向くと、其処では・・・・・・・・」

「ばつ馬鹿な！？この俺がリジエネ如きにやられるだ！？」

「ちょ、ブリングだいじょ……って、シオウブレード振り
被りながらこっちに来るなあああ！！」

「っ！ヒリング援護す「見え見えなんだよおおお！！！！」」なっ
ジャクアラズ派ルバー
「！？シシオウブレード片手に、JTRで牽制だと！？」」

「遅い遅い遅い！！！そんなじゃ、この僕の新
たな愛機である、“R-1改”には何時までも勝てないYO
ooooooooooooo!!!!!!」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「うるっさいわ、このポンコツ発狂紫ワカメがあああ！！！アンタのそんな合体も出来ないR-1なんぞ、あたしの“ART-1”で真っ二つにしてやるわああああ！！！！」

「っ！！待てヒリング！！迂闊に突っ込むな！！！！デヴァイン！挟み込むぞ！！！！」

「言われなくても分かっている!!!」

リジエネ兄さんがあるう事か、シシオウブレード装備した“R-1改”で、うちらの中では“4強”に数えられる、ブリング兄さんとデヴァイン兄さんのタッグと、それなりに強いはずのヒリング姉さん相手に無傷で立ち回ってるよ。

一体如何したんだろう……
等と考えながら、兄さんの動きを良く見ていると、ある事に気が付いた。

……あれ？以前と動きも戦法も大して変わって無く

ないか？精々変わっているとすれば、武器を両手持ちしている程度・
・・・・

と、其処まで考えて、俺はある考えに行き着いた。

元タリジエネ兄さんは、R-1よりもサイズのデカイ、大型から超大型の機体をメインで使って、小回りを利かせて相手を翻弄するという、今R-1改でやっている戦法で戦っていたのだ。

・・・だが、その戦法は本来であれば、今彼が使っているR-1等の中型から小型の機体ですべき戦法だった・・・つまり、彼は本来すべき戦闘スタイルではなく、全く違う、ある意味間違った戦闘スタイルで戦っていたのだ。

本来、彼がいつも使っていた“ツヴァイザーゲイン”や“ケイサルエフェス”といった大型又は超大型の機体は、基本どっしりと構えつつ、パワーとコンボ等のテクニクで押し切るような戦法が正解なのだ。

だというのに、兄さんのように小回りを利かせて相手を翻弄するのが主体の戦法なんぞとてたら、隙が大きいのを利用されてボコボコにされるのは当然なのだ。

・・・が、三人が一方的にやられている理由はそれだけではないだろう。

考えられる事は、おそらく三人とも、いつもと違う敵の機体サイズに戸惑っているのだろう。

このゲームでは、機体サイズが大きくなればなるほどに、攻撃の当たり判定部分が大きくなっていく。

そのため、大型から超大型の機体。その中でも、特にスーパー系と呼ばれるような機体は、拳動もリアル系と比べると少しゆっくりしている為、攻撃が当て易いのだ。

たぶんだと思うが、三人はリジエネ兄さんのいつもの動きをしている物が、いきなり小さく、そして拳動もスピーディーになっている

為、動揺してしまっているのだろう。

……ただ、その事に気付いている人が、今此処に果たして何人いるのやら……俺の予想では、とりあえず師匠とグラীবੇさんと、ヒクサーさんあたりは気付いていると思うが……

そんな事を考えながら、三人へと視線を向ける。

三人は俺が向けている視線の意味をリジエネを見た瞬間に分かったのか、苦笑して返してきた。

……残念ながら、絶賛女装中のリヴァイブ兄さんには伝わらなかった様だ。

それにしても兄さん。

何でそんな恥らったような表情とか仕草してんですか。

もつと逆に堂々としていなさいよ。身内しか今居ないんだから、誰に見られたって困るもんじゃないでしょう？

ただでさえ見た目が中性的だから、女性に一瞬見えてしまっ、いろんな意味で胸クソ悪くなるのですが。

主に一瞬とはいえ「カワイイ」と思ってしまった、自分とかに。

そんな感じで暫らく経つと、『フィニッシュ!!』という音声と共に、決着が着いた。

結果はなんとリジエネ兄さんの一人勝ち。しかもパーフェクト。恐るべき事態である。

あれだけ以前俺達から徹底的にボコボコにされていたリジエネ兄さんが、俺達の中では随一の実力を持つブリング兄さんとデヴァイン兄さんのタッグと、決して弱いとは言えないヒリング姉さんの三人を相手にパーフェクト勝ちしているのだ。どれだけ兄さんとR-1改相性良いんだ？

逆に最下位になったのは、大方の予想を裏切る事無く、ヒリング姉さん。

まあ、あれだけ突っ込んでいれば、真っ先にやられても不思議ではない。

（因みにプリング兄さんとデヴァイン兄さんは、二人纏めて仲良くT-LINKソード（投擲）の餌食となって、2位タイ）

「……………」と、言う訳で、今姉さんはバツゲームである、黒猫服（露出の多い奴。一瞬水着と間違えた）にお着替え中……………」
しかも俺と会わない間に、身体女性にしてもらったのね……………」
良かったじゃん。細いドラム缶体型から脱却して、少し凹凸が付いて」

「あたしのこの姿を見て第一声がそれか！？もっと他に言う事無いの！？」

「結構似合っててカワイイです」キリッ

「バツ、真顔で言うな！！！！／／／／／／／／」

あらあら真っ赤になっちゃって。

いつもの仕返しも兼ねて言ってみただけど、こういう一面があるから姉さんは地味に可愛かったりするんだよな。

……………勿論弟としての意見ですよ？

男としてじゃないですよ？

……………で。

「リジエネ兄さん、勝負しようぜー」

「ハハハハハ！！！！今のこの僕に自ら勝負を挑むなど無謀な！！」

！その思い上がった性根を叩きなおしてくれるわああああ！！！！」

・・・・・・・・馬鹿め。

俺がやるといった瞬間に目が思いっきり光った人間が居た事に気付かなかったのか。

そう思いながら、テレビの前まで言っつて、コントローラを握った時だった。

「では、僕も混ぜてもらおう」

そう言いながら、ズイツという擬音が聞こえる様な勢いで、師匠が俺の隣に座った。

そのままコントローラを操作して、機体を“スーパーアースゲイン”に決定し、俺に視線だけで話しかけてくる。

・・・・・・・・・・こんな形で少し不満だが、そろそろここいらで決めようじゃないか。

と。

最初何を言っているのか分からなかった俺だが、少しその目を見返しているうちにその意味を理解した。

同時に俺も、機体をスーパーアースゲインに決定する。

・・・・つまり師匠が言いたかった事はこうだ。

・・・・・・・・いい加減にどちらが真の“スーパーアースゲイン使い”か決めようじゃないか。

・・・・と。

・・・・あまり認めたくは無いが、俺も基本的に“アースゲイン系統”の機体はよく選択するし、尚且つ師匠と同じ様に、“スーパーア

「スゲイン」はその中でも一番使いこなせていると言っても過言ではない。

故に師匠のこの密かな申し出を断る理由はない。

……望む所だ、クソ師匠！！

俺と師匠の間に、緊張した空気が走る。

リジエネ兄さんがその空気を読めずに何か言っているが、既に火花を散らしていた俺達にとって、その声は別に気にするほどの物ではなくなっていた。

そうこうしている内に、画面に試合開始のカウントが表示される。

コントローラを握る手に汗がじんわりと浮かぶ。

意図せずに息を止める。

始まる瞬間を見逃さんと、目を見開く。

そして次の瞬間、

始まりのブザーが鳴ると同時に、

俺と師匠は、

自身の倒すべき相手に対して開始早々に、

最大級の攻撃をぶっ放した。

「フハハハハハハハ……！……！シオウブレ」「奥義……！！鳳凰光覇
あああああ……！！……！！」「アッ……！！……！！」

結論：どんなになっても、やっぱりリジエネ兄さんはリジエネ兄さんのままだった。

「買出し〜。買出しブギ〜と」

「は、ははは・・・アムロ、なんだかご機嫌だね」

「沙慈よ、本当にそう見えるのなら、お前の目玉今すぐ割り抜いて眼科に持っていくぞ」

「いきなり怖い事言わないでよ!？」

「は、ははは・・・相変わらず二人って絡むと漫才始めるよね・・・ちよつと羨ましい」

「ルイス何言ってるの!？」

「・・・あれから2日が経った。

師匠達は相変わらずアジトに居て、思いつきり寛いでいる。

ただ、師匠以外の皆は兎も角、師匠自身はどうかのお偉いさんの小姓やってた筈である。

大丈夫なのか？と、不安になり聞いてみた所、どうやらヴェーダの場所が何処にあるのか調べて来るといふ名目で此処に居るとの事。だから、精々1ヶ月程度であれば、ブラブラとしていても大丈夫らしい。

きつと今頃、アジトで俺のゲーム機を勝手に引っ張り出して、スパジエネでもやっている頃だろう。

他の連中は・・・イマイチ良く分からない。

姉さんは、俺の部屋を物色しているか、どこぞへと買い物に出ているかなのだが・・・あの人数の中でたった一人だけで買い物に行くような人じゃないし・・・リヴァイ兄さんは・・・パソコンでMSの各データ閲覧・・・とか？

ブリング兄さんとデヴァイン兄さんは・・・なんだろう？よく考えてみると、俺、あの二人がゲームマニアで、コーヒーマニ

アで読書家って事位しか分からな・・・って、分かってますね。たぶん師匠に便乗してゲームしてるか、自分達でオリジナルプレンドのコーヒー作って、読書タイムに突入してるかですね。

リジエネ兄さんは・・・。たぶんスパジエネで師匠に勝負挑んで返り討ちされて真っ白になってるかな？

で、グラীবさんとヒクサーさんは、アジトに在るシミュレータの調整かな？

地獄の修行が、なんかもっとパワーアップしてそうで怖いんだけど・・・。(汗)

因みに只今は明日の夕方からある親睦会の料理の材料の買いに行っている最中である。

何故沙慈とルイスが居るかというと、ただ単に途中でデート中の二人に会ってしまい、そのままズルズルと一緒に行動する事になってしまっただけである。

「しかし・・・何もこんな時に出かけなくなっちゃって」

ふと、沙慈がこう呟いた。

それに反応したルイスが、訝しげに彼に問いかける。

「何？まだモラリアのこと気にしてるの？」

「・・・うん。まあね・・・って言うか、ルイスこそAEU側じゃないか。気にしないわけ？」

「モラリアなんて行ったことないし、わかんないって・・・。そういえば、アムロは」

「悪いが、俺は生まれも育ちも此処だし、あっちの方の事には基本

興味ないのよ」

そう言いながら、俺は再び歩き出す。

どうやら二人は授業の合間にソレスタルビーイングに関するニュースを見ていたみたいだ。

それを見ていた沙慈の心境は複雑なものなのだろう。

以前も言ったと思うが、以前二人は謀らずしも、結果的にソレスタルビーイング 厳密に言うと、キュリオスにだが 助けられている。

しかし、その自分とルイスを助けてくれたガンダムと、その仲間が今度はあの時とは正反対の行動をしている。

きつと、沙慈の心の中には、こんな疑問が渦巻いていることだろう。『何故、自分達を助けてくれた彼らが、新たな憎しみの連鎖を生み出すような事をするのか』と。

そんな彼に、もしも俺が、あの時ガンダムに乗って当事者の一人になつていたと言ったらどんな反応をするだろうか？
冗談だと笑い飛ばすのか、それとも

そんな彼とは正反対にルイスは一向に気にしていない様子だった。

「で？お前ら今日は何処に行こうとしてるんだ？」

いつまでもこんな話題では、話が続かないな。

そう思った俺は、二人に差当たりのの無い質問を投げ掛ける。

そんな俺たちの隣を一台のバスが通りぬけていく。

チラッと、そんなバスの中から、不穏な気配を感じ、チラッと目だけを其方へと向ける。

すると、本当に一瞬だけだが、黒い服を着た男が見えた。

しかし、次の瞬間その不穏な気配も霧散してしまい、俺はその事を気のせいだと思つて、其処まで気にするほどの事ではないと、直ぐ

にその事を思考の外へと追いやってしまった。

「ウフフ、まずは洋服を見て、洋服を見て、洋服を見る」

「洋服見るしかないし……第一、それみんな自分のでしょ」

「全くだな……せつかくのデートだつつのに、そんなんで良いのかよ？」

「良いのよ」

沙慈が呆れてため息吐き、俺が興味なさ下に頭を書いて口を出し、そんな俺たちからの言葉を一切気にしない様子で、ルイスが笑い、それを見て俺達が再び溜息を吐こうとした、その時だった。

………っ!?

突如として、ゾワッとした嫌な感覚が、全身を駆け巡る。

「伏せろ!!!」

咄嗟に、俺は叫んでいた。

同時に、沙慈とルイスに覆い被さる。

と、次の瞬間!

ドウン!!!

そんな音と共に、つい先程俺たちの横を通り過ぎて、およそ8M先のバス停で止まっていたバスが突然大爆発を起こした。

爆風の衝撃波で周りの建物のガラスが割れ、黒い煙があたりを包み込み、バスの周囲に居た人や乗用車が吹っ飛ぶ。

「つく……！！なんだ……！！？」

起き上がった沙慈が、前方を確認する。

同時に俺もそちらを見た。

其処には、地獄が広がっていた。

倒れている人、転倒した車と小さな火がいくつも道路上に存在している。

そして、バスの周りには目を向けるのも躊躇われるような状況が広がり、周囲の空気には生き物の焼ける酷い臭いと、鉄臭い血の臭いが充満していた。

咄嗟に、沙慈とルイスの口と鼻を覆うようにして、肩から掛けていたバッグからタオルを取り出し、押しつける。

「バスが……！！」

沙慈の言葉に反応して、バスの方を見る。

気の毒だが、あれでは中の人は、もう誰も生きては居ないだろう。と、その時、周りが騒ぎ始める中、関西弁の男が声を張り上げる。

「テロや！！これはテロやで！！」

「う………？テロ………って？」

その声で意識を取り戻したルイスだったが、いまだに状況が把握できていない。

「ここから離れよう、ルイス！早く！」

沙慈はルイスの手をとり立たせると、周りには目もくれずその場を後にしようとした。

しかし、俺はその後が続こうとしたとき、ある者を視界の隅に入れたしまったため、反射的にそちらへと走り出した。

後方から、「アムロ!？」という沙慈の叫ぶ声が聞こえたが、構っている暇は無いので、後で謝る事を決意しながら、先程目に入れた者を追う。

それは黒い服を着た男だった。
さつき、バスの中にいた男だ。

男は、追ってくる此方に気づいたのか、慌てて駆け出して、人混みの中へと逃れようとする。
……が。

「甘いわ!!!」

そう言いながら、俺は瞬間的にズボンのポケットから財布を取り出すと、思いつきり男の頭目掛けて投擲する。

一瞬のタイムラグの後、

ゴビン!!

という、財布にあるまじき音と共に、男の後頭部にそれが突き刺さり、堪らず男はぶっ倒れる。

その隙を見逃す俺ではない。

一気に距離を詰めると、男の背中に急降下式の全体重を乗せたどび蹴りをお見舞いし、バックから荒縄を取り出すと、一瞬で手と足を縛り上げる。

そのまま懷に手をつ込んで調べると、まあ出て来るわ出て来るわ銃刀法なんぞ完全にブッチしている物品の数々。

同時にリモコンのような古典的な物品も見つけたので、それは手袋を取り出して着けた後に適当な袋に入れて、そこら辺に転がしておく。

十中八九、先程のテロはコイツの仕業だろう。

とりあえず警察に連絡を入れた後、猿轡を噛ませて自殺できないようにし、器用に身包みを剥いでから、その他の持ち物を調査する．．．

．．．お、財布見つけ。迷惑料と慰謝料として少し払いとこ。

ん？こいつはＩＤカードか？一体何処の．．．．．って、これモラリアに本拠地がある、PMCの個人情報特定カードじゃん！

って事は、この男の目的は、こないだのモラリアで、出張ってきた俺達への警告か、もしくは意趣返しのために、あんなテロを起こしたのか．．．．．後で師匠に渡しとこ。

．．．．．何？半ば追い剥ぎじゃないかだと？人の命を自分のエゴで奪うような奴は、自らの人権を放棄している物と俺は考えているから、別に追い剥ぎでもなんでもない。うん。

お前が言える立場かって？．．．．．自覚してるよ？うん。

それにしても、主犯がこんな事になってるって言うのに、一切仲間が出てくる気配が無い。

見捨てられたのか、或いは単独犯だったのか．．．．．何れにせよ、そこらへんの仕事は警察が本来やるべき事なので、俺はもう首を突っ込みませんがね。

ピーポーピーポーピーポー．．．

おおっと、うわさをすれば影、とは良く言ったもので、古き良き音を立てながら、パトカーが付近に到着した事を、そのサイレンが告げる。

基本、俺は警察や、お上の方々には本来顔を見られてはいけけないので、到着される前にトンずらくとしますかね．．．くわばらくわばら．．．．．っと．．．．．

で、親睦会当日である。

ついが昨日のテロ騒ぎの翌日である。

あの後、帰って早々にテロに巻き込まれた事を師匠に報告。

そして、沙慈とルイスに連絡し、無事な事を報告する。

どうやら沙慈はともかく、ルイスも大いに心配してくれていたようで、さつきまで半泣きの状態だったらしい。

変わってもらったら、物凄い剣幕で怒られた。

曰く「勝手に何処行つた」だの「沙慈と一緒に散々心配したんだから、まず最初に顔を自分達の所へ出せ」だの、いろんな事を言われた。

その内、緊張の糸が切れて、一気に疲れたらしく、ソファで寝てしまったと言うのは、散々怒られてから代わってくれた沙慈の談だ。・・・まあ、心配を二人に掛けてしまった事は本当なので、その内何らかの形で返したいと思う。

そんな事を考えながら、ただいま俺は親睦会のメインとなる料理
鍋を作っている。

具材は色々。

只の鍋と侮る無かれ、キッチンと出汁をとり、尚且つ野菜や肉も火が
通り易いように、考えて切っている。

．．．．．のだが．．．．．

「．．．．．姉さん。いくらお腹が空いたからって、生野菜をまん
ま食べるのはどうかと思うんだが．．．．．それと師匠。その手に
持っているツナの缶詰は何だ。入れろってか。入れろってか？」

「．．．．．テヘッ」

「可愛く返しても駄目です。ただし師匠のツナ缶だけはギリギリ譲
歩して入れてやる」

「ツシャア！！！」

「師匠。キャラ崩壊してるから。戻して戻して．．．．．そしてグ
ラーベさん。何故にコンビーフの缶詰を持って俺の隣に立っている
のですか。そしてヒクサーさんは、なんでコンソメのブロックを持
ってその隣に立っているのですか」

「．．．．．駄目か？」「駄目なの？」

「駄目です」

「「エエエエー」」

「そんな残念そうな声を出しても駄目です。．．．．．で、もうあん

「駄目（か）（かい）（なのか）？」

「おお、以前よりも突っ込みのキレが良くなってきたね。これなら安心だ」

「……ハア……ハア……だ、駄目だ。このま
までは親睦会が始まる前に、俺の体力に限界が来てしまう。実働部
隊の連中はまだ来ないのか……？」

ピンポン

239

………ついに来たか！！実働部隊！！！！

今度は以前のような事が無い様に慎重に。それでも幾らか急ぎ目で玄関まで向かう。

そしてドアの前に立ってから、深呼吸を一つすると、意を決してドアを開ける。

そこに居たのは・
・
・
・
・
・

「……あんれま団体さん？そして刹那。何で土下座しとる？」

「ごめんなさい。謝るので3日間おにぎりだけは勘弁してください」

「服が汚れるし、ご近所から誤解されるから止めなさい。つーかむしろ今ので冗談で言ったあの言葉を実行しようと思った」

「!!!!!!? ? ? ? ? ? ? ?」

「なんでそんなショック受けたような絶望的な顔すんの……？
とりあえずもう直ぐご飯だからさっさと服とかの汚れ払ってから入
りなさい。後ろの団体さん方もどうぞお入りください」

「……了解……。ただいま、アムロ」

「はいはい、お帰り刹那。ユリとフェルトもお帰り。言い方は悪い
ですが、その他の皆様方、いらっしやいませ」

そう言いながら、俺は全員を迎え入れた。

しかしこれから起きるであろう騒動の事を考えると……。手
放しで楽しめそうも無いな、こりゃ。

「と、言う訳で、自己紹介とかすっ飛ばしていきなりお食事始める
よー！ー！ー！ー！」

「音頭とってねえで手伝えクソ師匠！！！！」

台所から凄まじい剣幕でアムロが私達の前で音頭をとった黄緑色の髪を持ち、中性的な顔立ちをした男に思いつき怒鳴り散らす。その声に驚いて、フェルトと刹那とクリスが一瞬身を縮こませた。話を聞くところによると、今“師匠”と呼ばれた人物の所為で、用意する料理が一品増えてしまったそうだ。で、その責任を取って少しは手伝え、という事らしいのだが……なんか、言い方がキツ過ぎないか？

そう思っ、以前聞いてみた事があるのだが、彼曰く「いつもの事」なのだそうだ。

……まあ、師匠と呼ばれている人物自身も其処まで気にした様子は無いから、大丈夫だとは思うが……

「アムロー、もうご飯食べちゃって良いのー？」

其処まで考えた所で、以前会った事のある女性……確かヒリングとか言っていたな。

彼女が台所に居るアムロに、食べだして良いかを確かめるために声を掛ける。

そんな彼女に対して、アムロは先程とはうって変わって穏やかな声で答えを返す。

「あ、うん。冷めない内に食べちゃいな。刹那も今日だけは、暴走さえしなければおにぎり地獄解禁を許す。腹いっぱい食べなさい」

「……何故かな……僕の時とは反応が違わないかい？」

「自分の胸に手を当てて、何故俺がこんな口調で返しているのか考えなさい師匠」

そう言つて、再び料理に戻るアム口と、“師匠”。

次の瞬間、私の目の前にある鍋を中心にして地獄絵図が始まる。

最初に動いたのは刹那。

まるで今までの鬱憤を晴らすかのように、一気に鍋の中にあつた肉を全て取るうと腕を伸ばす。

次に動いたのはヒリングだ。

彼女も刹那に負けじと、凄まじい勢いで鍋へと腕を伸ばす。

しかし二人の箸が後一步で肉へと届くか届かないかという所になつた所で……

ガキッ！

という音と共に、二人の箸が複数の人間の物によつて、横合いから止められた。

刹那を止めたのは、ロックオン、アレルヤ、ティエリア。

ヒリングを止めたのは、薄い紫の髪と赤い瞳を持った、これまた中性的な顔立ちの……少年？と、赤い髪に赤い瞳を持った、長髪と短髪の男だつた。後述の二人は顔があまりにも似ている事から、一卵性の双生児なのだろう。

「おいおい刹那……禁止令が解かれたからつて、いきなり肉を取ろうとするのはマナー違反でもんじゃないかねえのか？」

「彼　　ロックオン・ストラトスの言う通りだ、ヒリング。食べても良いと言われたからと言つて、いきなり暴走するな」

「う……」

ロックオンと、赤髪の長髪の方にそう言われて、二人は言葉を詰ま

らせた。

二人がそのまま押し黙った所で、赤髪の短髪の方が、私達に謝罪の言葉を掛けて来た。

「すみません、実働部隊の方々。我が家の愚妹がお見苦しい物を見せました」

「あ、いえいえそんな・・・此方も一人暴走しかけたから、お互い様ですよ」

「全くだな」

短髪の男に対して、アレルヤが慌てて返事を返し、ティエリアが、それに続いた。

それを聞いた刹那とヒリングが、ますます小さくなる。
と、次の瞬間、

クウッ

という可愛らしい音が、私の腹から響き渡る。

咄嗟に顔に血が上って真っ赤になるのが分かった。

・・・このタイミングで鳴るのか・・・？・・・
物凄く恥ずかしいぞ・・・！

そう思いながら私は俯いた。
が、次の瞬間、

グウッ

という音と、

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！！！

という音が、ほぼ同時に鳴る………ってちょっと待て！？最後の一体なんだ！？

見ればフェルトがお腹を押さえているが、彼女も最後の音に驚いている方なのだろう。

その目には驚愕の色が浮かんでいる。

………では誰が………！？

まさか刹那か！？

そう思っ
て刹那の方へと目を向けようとした瞬間………

「あ、ワリィ。腹の虫鳴っちゃったわ」

そんな能天気な声が、台所から聞こえてきた。

見れば周囲の私を含めた人間の目は其方へと向いており、誰の目にも。こんな感情が渦巻いているのが見えた。

・・・・・・・・・・よりもよってお前かい！！

と。

そのまま5秒ほど私達は硬直していたが、いち早く再起動を果たしたスメラギさんが、ロックオンにこう提案した。

「・・・まあ、とりあえずせつかくの親睦会なんだし、楽しまなきゃ損ね。そんな訳だからロックオンと、それから・・・」ブリングです。ブリング・スタビティ。彼は私の双子の弟である、デヴァイン・スタビティです」そう。自己紹介ありがとうね そしたら、ブリングさん。悪いんだけど、各自の皿に、適量だけ鍋から具を盛ってあげてくれないかしら？下手をすると、また暴走する可能性があるし・・・」

「OK、ミス・スメラギ。んじゃ、こっちは俺がやるよ。ブリング

つつたつけ？アンタはそっちの方を頼むぜ」

「承知した。それではリヴァイブ、皿を出せ「えゝ！？あたしは！？」…………お前は最後だヒリング」

「刹那も一応最後な？安心しろって。ちゃんと肉も残しといてやるよ。んじゃ、まずはカワイイ音を鳴らしたフェルトからだな。ほら、皿かしな。ユリはその次で良いよな？」

「ああ、それで良いぞ」

私がそう言うと、ロックオンは「そりゃ良かった」と言って、フェルトの皿に具を盛っていく。

ふと隣を見ると、既にトレミークルの大人組の一部は酒を開けて飲み始めていた。

…………と、言うか、スメラギさん。大吟醸持ってきたんですか？って、ああ！リヒティー！！リヒティーがおやつさんとモノレ博士に無理矢理飲まされて大変な事に！！

と言うか、以前リヒティーって自分から「お酒飲めない」って言うた事忘れたんですか二人とも！？

って、ラッセさん！？その手に持っているツマミはなんですか！？え！？自分で持ってきた！？

料理出るって言われてましたよね！？

っと言うか、スメラギさん、笑ってないで止めてくださいよ！！

ああ！もう！！

「・・・おい。ちょっと目を離れた隙に、ユリが大人組の対応に追われてんだけど、何で誰も助けてあげないの？」

「アムロ、良い事を教えてあげよう。この世で最も対応が厄介な物。それは“自然災害”と、“自分勝手な正義を振り翳す者”。“性質たちの悪い政治家”に、“腹黒い商人”。“狂信者”と、最後に“性質の悪い酔っ払い”と、昔から相場は決まっているんだよ・・・」

「・・・納得」

「……さて、師匠リクエストの最後の料理がやっと出来上がったわけなんだが……もう殆どの人間が出来あがってんな。とりあえず、この鍋置きたいから、テーブルの上ちよつと片付けてくれ……ってうわあ、何この状況？テラカオスすぎる」

やっと出来上がった、“ツナ缶鍋”を持って台所から出ると、そこには凄まじい光景が広がっていた。

実働部隊の大人組（マイスターとオペレータ除く）は、何時から飲み始めていたのか、日本酒のビンを何本も開けて、いまだに飲んでいるし、イノベイド組の何人かも、そっちに巻き込まれている。

と、言うか、よく見たら巻き込まれていたグラীবさんの顔が青い。どうやら悪酔いしてしまって、気持ち悪くなってしまったようだ。おそらく人前で吐く事は無いと思うが………注意するに越したことは無いな。

……とお、そんな事気にしている場合じゃなかったわ。

「あのー……そろそろ腕が限界なんだけど……」

「あ、ゴメンゴメン」

そう言つて、マイスターの内の一人である“アレルヤ・ハプティズム”が、テーブルの上の空になった皿を重ねて、隅に置いてくれた。その空いたスペースに鍋を置くと、俺も箸を持って席に着く。

「って、殆ど料理無くなってるな……」

ふと、テーブルの上を見渡して思わずそんな言葉をこぼしてしまっ
た。

そんなに時間を書けたつもりは無かったが、意外と人数が多かった
のと、酒という不確定要素を甘く見すぎていた為か、当初それなり
の量があつた料理の数々は、今や殆ど影も形も無くなっている状態
となっていた。

チラと隅を見れば、刹那とフェルトとユリが、三人並んで仲良く夢
の中。

おそらく刹那はお腹が一杯になったから、眠気が襲ってきてそれに
負けたという感じ。

フェルトはおそらく単純に、いつもはこの時間帯寝ているのだろう。
因みに今の時間帯は、深夜0時。

で、ユリはおそらく酔っ払った大人組の対応に疲れたのだろう。
今でこそ何人が撃沈して、少し沈静化しているが、先程までは台所
にまでそのドンチャン騒ぎの音が聞こえていたから。

その上から、プトレマイオスオペレーターのクリステイナが、三人
を起こさないように毛布を掛けてあげていた。

「あ、すみません」

つい謝罪の声が出てしまう。

彼女はそんな俺を見て少し微笑むと、「全然気にしてないよ」と言
って、再び席へと戻っていった。

そこで、今度は隣から声を掛けられた。

「よう、お疲れさん」

声を掛けられたほうに目を向ける。

そこに居たのは、デユナメスのマイスター、“ロックオン・ストラトス”だった。

咄嗟に反応して頭を下げる。

「あ、どうも初めまして。アムロ・レイって言います」

「ご丁寧にも。データは見ていると思うが、マイスターのロックオン・ストラトスだ。好きに呼んでもらって構わないぜ」

「んじゃ、ロックさんで」

俺がそう言つと、彼は突然微妙な顔になってこう言つた。

「すまん。それは何か危険な感じがするから止めてくれ」

「それじゃ、ロックオンさんで」

「・・・さんはいらねえよ。もっとフレンドリーに呼んでもらうて構わんぜ？」

「いや、でも一応目上の人ですし・・・」

「・・・お前つて、結構変な所で生真面目なのな」

「・・・まあ、よく言われますよ・・・あ、そういえば、料理どうでした？お口に合いましたか？」

「ん？ああ、凄く美味かつたぜ。少なくともトレミーのA定食よりかは何百倍・・・いや、何千倍もな」

「は、はははは……そう言ってもらえると、ちよつと恐縮しちゃいますね」

そう言いながら苦笑いしつつ、少しの間、俺は彼といろんな話を話した。

例えば、狙撃銃を使う時の注意とか、マイスターの中で誰が一番手の掛かる奴だとか、最近の刹那のポンコツ可愛さは異常だとか、刹那まじカワイイよ刹那とか、ユリがテラ不憫だとか、フェルトマジ天使！だとか………本当にいろんな話を話した。

で、気付けば、只今の時間帯は、午前の1時。

流石にこれ以上夕飯の時間が延びるのはヤバイ。

さて、それじゃ……

「いただき……」

其処まで言った所で、俺の目の前に師匠が座る。

その手には箸。口元にはニヒルな笑みが浮かべられ、その目には剣呑な光が湛えられていた。

……なんか、最近こんな事ばかりなような気がする……

しかし、売られた喧嘩は逃げられないのであれば、正々堂々真正面から買ってやるのが礼儀と言うものである。

………相手が師匠ならなおさらな！！！！

箸を持つ手を上に上げつつ、左手を構える。

無論、師匠もほぼ同じ型で、此方を待ち構える。

……緊張が、走る。

少しの衝撃で、今にも爆発してしまいそうな空気が、俺たちの間に流れる。

……そして次の瞬間。

「
・
・
・
ふ、
あ
あ
・
・
・
・
・
」

「あれ？ティエリアでも、欠伸してるんだ」

「あ、ホントだね」

「……クリスティナ・シエラ。そしてアレルヤ・ハプティズム。君らは僕を一体なんだと」「頂きまりやアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」（バキイ！！）」「思っ！！？？」

「えっ！？」

「んなあ!？」

ガンダムヴァーチェのマイスターである、ティエリア・アーデの何気ない欠伸によって、一気に決壊した。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオアアア
アアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

「フーハハハハハハハ！！！！フハハハハハハハ！！！！！！」

ガキン！！ガキツガキツ！ズガガガガガガガガガ！！！！！！

・ ・ ・ ・ ・ 一体コイツら何やってんだ!?

突如として始まった、アムロとその師匠と呼ばれている青年
リボンズ・アルマークの箸と素手によるガチバトル。
それに呆氣に取られていた俺は、直ぐに二人を止めようと、行動を
起こそうとした。

……が、それを実行する事はできなかった。

何故かって？そいつは、今の二人の手の動きを見れば一瞬で分かるだろう？

・・・何？こっちは文でしか見れないから、よく分からない？

ああ、スマンスマン。こつちとそつちじゃ、画面一つ挟んで、全く違う物しか見えないんだっとな。

簡単に説明すると・・・ハッキリ言つて、俺にも良く分からない。

いや、ふざけている訳じゃないんだ。

ただ、二人の手の動きが尋常じゃないくらい速過ぎて、上手く目で捉える事が出来ないんだ。

辛うじて分かる事と言えば、二人の箸が時々間にある鍋の中の具を摘んで口の中に持つていたり、それを阻止せんとお互いの箸を自分の箸を使って妨害したり、箸を持つていない方の手で相手の顔面などを狙つて、正拳突きを放つも、捕まれて阻止されたり・・・
・そんな所だ。

・・・つて、俺は今一体誰と話してたんだ？

流石に深夜を回つて、少し酒の入っている自分の頭に一抹の不安を持ちつつ、俺は周囲を見渡した。

見ればアレルヤも、俺と同じ様に二人を止めようとしていたらしいが、俺と同じ理由で断念したらしい。

此方からの視線に気付いたのか、俺の方に顔を向けると、気まずそうに顔に苦笑を浮かべた。

次にティエリアを見る。

基本的にミッション等以外には無関心なティエリアの事だから、きつと傍観しているだけだろうと思つたが、意外な事に果敢にもアム口の方に駆け寄つて、何とか二人の戦いを止めようと四苦八苦していた。

よく見てみると、リボنزの方には、ティエリアそっくりな顔の“

リジェネ・レジェッタ”という中性的な少年が駆け寄って、ティエリアと同じ様に四苦八苦している。

余談だが、この二人は当初、あまりにもその顔が似ていた為“実は生き別れの兄弟・・・一卵性の双生児では？”と周囲から言われていたのだが、アムロの「本当に一卵性双生児なら、声まである程度似てないとおかしいだろ」K。それにリジェネ兄さんは、俺が師匠に拾われたくらいの頃からその見た目だから、その線は無い」と言うセリフによって、その疑問は払拭されたのだが。

閑話休題。

で、次のこの騒動をあっさりと収めてくれそうな人達・・・ウチの俺達マイスターを除いた大人組と、向こうのブリング、ヒクサー、グラীব、ブリングと呼ばれた男達の固まっていた方へと、あまり期待しないで目を向ける。

で、目を向けた先では案の定酔い潰れずにまだ起きている酔っ払い達が、二人の大喧嘩を肴にまだ飲んでいやがった。

俺もあっちに混ざりたいぜ・・・とと、ちよつと本音が出ちまった。

・・・て、よく見たら、その隣ではリヴァイプと呼ばれた少年と、ヒリングと呼ばれた少女が顔を真っ赤にして、焼酎のビンを枕にして爆睡していた。

・・・あれは絶対しこたま飲んでるな。うん。

兎も角、これでまた増援と成り得る存在が離脱してしまった事に溜息を吐きつつ、今度はクリスの方へと目を向ける・・・って、いない？

一体何処にと周囲に目を向けると・・・居た。

なんと彼女はもう既に毛布に包まって寝てしまった、ウチの三姉妹に混ざって寝息を立てていた。

・・・・・・・・・・アレは逃げたな・・・夢の中へと・・・・・・・・

等と少し気障な事を考えながら、二人へと目を向ける。

どうやら鍋の中の具も、茶碗の中の白米も全て食べ尽くしたらしく、何時の間にかその手から箸は完全に消えて、彼らの足元にある箸置きに綺麗に乗っかっている。

・・・何時の間に置いたんだ？

そんな事を考えている内に、二人の攻防は次のステージへと移った。突如動きを止めたかと思うと、次の瞬間二人とも綺麗に回転しながら飛び上がり、そのままテレビの前へと着地する。

そしてアムロがゲーム機をセットして、それを起動させ、リボンスはテレビをつけて、モードを“ゲーム”へと切り替える。

と、次の瞬間テレビの画面に、最近刹那やユリが嵌っていたゲームのオープニング画面が流れ、そのまま二人は大戦モードを選ぶとそのまま遊び始めてしまった。

再び俺達は呆気にとられる。

・・・不意に、アムロが突然何かを思い出したかのように此方を見ると、テレビが置いてある台の下から、何を思ったか、突然コントローラを取り出してそれらを本体に接続させると、俺達に手渡してきた。

そして一言。

「一緒にやりませんか？」

「……………そう、だな……………たまにはゲームで徹夜するのも悪か無えか」

そう言いながら、俺はアムロの隣に腰掛ける。

「……こんな風に、ゲームしながら一夜を明かす、と言うのは何時ぐらいぶりの事だろうか？」

フツと瞼の裏に、もう長い事会ってはいない、双子の弟の姿が浮かび上がる。

まだ俺達が子供で、父さんも母さんもエイミーもまだ生きていた頃、しょっちゅう二人で新しく買ってきたゲームで遊びすぎて徹夜してしまい、母さんに二人一緒に怒られていたっけか……………

感傷に浸っていると、俺の隣にティエリアとアレルヤが腰掛けた。アレルヤは苦笑しながら。ティエリアは憮然とした顔で。

一方リボンスの隣には、リジェネの奴が、苦笑しながらも、目を爛々と光らせて腰掛けていた。

「……………どうやら結構乗り気らしい。」

そんな事を考えながら、俺は機体を“ライン・ヴァイスリッター”に決定する。

狙撃も出来るし、動きも早くてバランスが良いからしょっちゅう使ってはいるが……………何故か俺がこれを使うと、刹那の奴がブスッ

とした顔で拗ねてしまう。一体なんだというのだろうか？

と、他の連中も、自分の機体を決めたらしい。

画面が変わり、戦闘画面になる。

そしてそのまま、画面でカウントが始められ、ゲームが始まった。

・・・・・・・・・・そんなじゃま、ちょっと気合を入れますか。

そう思いながら、俺はいつものセリフを呟いた。

・・・・・・・・いつもよりも、気楽な感じで。

「狙い撃つぜ・・・・・・・・っと」

九話

親睦会やりました（一応家主の善俺になんの断りも無く話は進んで

如何でしたでしょうか？

どうも雑炊です。

今回は親睦会の話と、紫ワカメ大暴走の話と、アムロ君、テロに巻き込まれるな話でした。

しかも色々詰め込みすぎて、結構いつもより長いし……

途中でアムロが言っていた、「何らかの形で返す」というのは、実はちよつとしたフラグです。

覚えておくと便利です。

……というか、ロックオン兄貴の口調、これで合っているかしら……

なんか、アムロの時とあんまり変わってない気が……一応変えたつもりではありますけど、あまり変わってなかったらすみません。

そしてリボンスとリジエネ大暴走。

思ったよりも動きましたこいつら。

以降はこんな感じはナリを潜めますが……もしかしたらまたでてくるかも？

で、今回は一気にハレルヤ初戦闘の回まで進みます。

その後は、また一気に飛んで、マリナ姫と初接触かな……？
なるべく早く上げたい所ですが……次回だけで一気に其処までいけるか？

そんなわけで、次回もお楽しみに。

十話

折角キリが良い話数だというのに、果たして今回、俺が此処にいる理

最新話です。

今回は一気に話が飛んだりするので、何時もよりも2倍近く長いです。

そして今回も一部のキャラにキャラ崩壊注意報。

それでは本編をどうぞ。

十話

折角キリが良い話数だというのに、果たして今回、俺が此処にいる理

………一体如何してこうなった？

そう俺が思っのも仕方無い事だった。

正面には、中から物凄い凶暴な声が聞こえてくる上に、大絶賛此方へと武器を向けてきているキュリオス。

後ろには、先程まで目の前のキュリオスに、コックピットをシールドに隠されている小型ナイフで、ゆつくりと串刺しにされかけていた、宇宙用ティエレン。

俺はもう恒例となった、新装備（という名の実験兵器の一つ）を取り付けたOガンダムに乗って、キュリオスと対峙していた。

………いや、マジで、如何してこうなった？

それは思い返すこと、今から4〜5時間前。

思いがけず人革連による、“ガンダム鹵獲作戦”、その担当となった特殊部隊“頂部”の攻撃を受けた実働部隊の援護をする為に、寝耳に水の状態で急いで宇宙へと上がった俺だったが、現場に着いた時には既に遅く、ヴァーチェはその外部アーマーをオールパーシブで、本来の姿といっても過言ではない“ナドレ”を晒してしまい、更に最悪な事に、キュリオスは一瞬の隙を突いて特殊部隊に鹵獲された後だった。

とりあえず、見た所まだ特殊部隊の母艦は遠くには行っていないなさそうだったため、俺は実働部隊の母艦へと、謝罪文を送る事もそこそこに、急いでその後を追う事にした。

………ああ、そういやそうだったけ……

ところが追っている最中に、正面に翠色の粒子を散布しながら、シルド兼用のクローでティエレンを抑えているオレンジの機体

キュリオスをちゃっかり発見してしまったのだ。

これ幸いばかりに、俺はキュリオスに通信を入れて、さっさと母艦であるプトレマイオスへと戻るよう促そうとした。

・・・ところが通信を入れた途端に聞こえてきたのは、狂ったようなキュリオスのマイスターである、アレルヤ・ハプティズムである筈の男の笑い声と、これまた聞いているだけで胸糞が悪くなるような、一人の男が死の恐怖に震えて命乞いする情けない声が聞こえてきた。

と、次の瞬間、キュリオスは一時的にシルドアームからティエレンを放すと、一気に止めを刺そうとその腕を突き込もうとする。

瞬間的に、俺の身体も動いていた。

一気にOガンダムをティエレンの後ろまで近寄らせると、左手で徐々にティエレンの頭を引っ掴んで、後ろに引っ張った。

・・・結果的に、突き込まれたキュリオスの腕は空を切り、ティエレンは上手い事Oガンダムの後ろで止まる。

現在は、其処から膠着状態が続いているのであった。

「さて、如何した物か？」

なんともし難いこの状況。

とりあえず、接触回線を使って、ティエレンのパイロットに呼び掛けてみる。

「……ティエレンのパイロット。生きているか？生きているのなら、返事をしろ」

「な、何だ？何のつもりだ？」

間髪入れずに返事が来た。

どうやら先程よりも、幾分かは落ち着いてきているらしい。

「それなりに落ち着いてきているようだな。機体は動かせるか？」

「……助けるとでも言うか？」

「質問に質問で返すな。お前は答えを返すだけでいい。機体は動かせるのか？」

「……コンソールを破壊されたお蔭で、レーダーや、手足を動かす事が出来ないが、スラスターを噴かす位はできそうだ」

「なら向きはこっちで指定してやるから、さっさと母艦に戻れ。一度良く視界は開けているだろう？ハッキリ言って邪魔だ」

そう言いながら、武器を持っていない左手でティエレンの胴体を掴むと、ぐるっと向きを変えてやる。

勿論、視線はキュリオスから一瞬も外してはいない。

つか外した瞬間に襲い掛かれそんな気配がプンプンするんですけど。

『………すまない』

向きを変え終わった所で、ティエレンのパイロットから、謝罪の言葉が入る。

『お互い様だ。というよりも、言ってる暇があるのならさっさと離脱してくれ。向こうももう限界らしいのでな』

そう言うのと、今度は何も言わずに、ティエレンはスラスターを噴かして離脱していった。

……キュリオスからの追撃は、無い。

それに内心ホツとしつつ、今度はキュリオスに通信を入れる。

「……待たせてしまったかな？」

そう言つて、Oガンダムの右手をひょいと上げて少しおどけてみせる。

『……テメエ、この間のヤツか……何のつもりだ』

キュリオスが、何時の間にかその手に持ち直したビームマシンガンを此方に向けてきた。

どうやら、直ぐにぶっ放してくるほど短気ではないらしい。

内心正直言つて恐怖でガクブル状態だが、それを表に出さないよう

に気をつけつつ、返答する。

「・・・一応、助けに来たつもりだったんだが・・・別に要らなかったようだな。それと、タイムオーバーだ。君としてはもっと楽しみたかったのかも知れないが、生憎と、此方にそんな時間は無いのでな。さつさとプトレマイオスに戻ってくれないか？」

『ケツ・・・こっちはあの時もう終わらせるつもりだったんだがよ・・・』

「それは邪魔をして済まなかったな、ハレルヤ・ハプティズム」

そう言つて、俺は機体を翻す。

こっちとしては、この後さつき迄実働部隊を襲っていた、あの特殊部隊が何処を拠点にしているか、さつさと確かめたかったので、半ば強引に会話をぶった切つて、そちらに向かおうとしたかったのだ。・・・が、俺は直後に、自身が今犯した過ちに気付く事になった。

『・・・おい』

「？ 何かね？」

不意にキュリオスから通信が入る。

何なのかと、疑問に思いつい振り返ってしまう。

・・・それが失敗だった。

バチイン！！！！

「っ！？」

咄嗟に左手にビームサーベルをマウントして展開し、いきなり切りかかってきたキュリオスの凶刃を防ぐ。

そのまま右手のビームガンで反撃するが、簡単に避けられる。

「何のつもりだ！？」

思わず口から言葉が漏れた。

・・・まあ、いきなりこんな事されれば、誰だってこうも言う。それを知ってか知らずか、キュリオスからハレルヤの狂ったような声が聞こえてきた。

『ハッ！！よく言うぜ！！テメエなんで俺の存在を知ってるんだ！？仲間内でも知ってる奴はそうそう居ないぜ！？』

「何を言っているアレルヤ・ハプティズム！？」

『惚けんじゃねえ！！！！』

そう言いながら、キュリオスは高速形態に変形して此方に突っ込みながらビームマシンガンを乱射する。

急いで機体を捻りつつ、避け切れなかった物をGNABCマントで受ける。

案の定、着弾した部分は少し赤熱化しただけで、次の瞬間にはまた何も無かったかのように元に戻った。

『何っ！？』

キュリオスから驚愕の声が発せられるが、構っていられる様な状態ではない。

瞬時にマントの裏からある物を引っ張り出すと、右腕にそれを装着して、キュリオスの進行上に、それを発射した。

バフッ！！

という音と共に、黒い玉がそれから発射される。

と、次の瞬間玉は弾け飛び、中から所々が緑色に発光している巨大な網が姿を現した。

案の定キュリオスはその中に突っ込み、網に身体を絡め取られる。それを見た俺は、気合の入った雄たけびと共に一気に網を引っ張る！！！！

「どっせえええい！！！！！」

『うおおおお！？』

急に網ごと引っ張られて、ハレルヤ・ハプティズムは驚愕の声をあげる。

その叫びの発生源が、Oガンダムの目の前まで来たところで、

「必殺！！ガンダムパンチ！！！」

そんな叫び声を挙げながら、俺はキュリオスを殴り飛ばした。

『技名ダサッ！！！！』

．．．．．そんな声が聞こえたような気がするが、無視だ！！無視無視！！！！

「う．．．．．？」

軽い衝撃と共に、僕は目を覚ました。

ハレルヤはどうやら眠ってしまったようで、今は僕が身体の主導権を手にしていた。

『．．．．気が付いたかね？』

ふと、接触回線で、声が掛けられる。

目をそちらへと向けると、先程ハレルヤの操るキュリオスを、難無く網で絡め取ってから容赦無く殴り飛ばしたあのマントの機体

“O-01”が居た。

「・・・うん。ちょっと身体の節々が痛くて、頭がグラグラするけど」

『・・・フム、その様子から鑑みるに、“ハレルヤ”から“アレルヤ”に戻ったようだな。あと、身体の節々が痛かったりするのは、少し目を瞑ってくれ。あの時はああする以外に止めようが無かったのだ』

そう言いながら、器用にMSの手で頭を搔く“O-01”。

そんな見ようによつてはコミカルな仕草を見ながら僕は思わず苦笑を一つこぼす。

・・・が、今言った彼の言葉の意味を理解した瞬間に、一気に頭が冷える。

・・・彼は今、何と言った？

彼は今、確実に僕の事を“アレルヤ”と呼び、あまつさえ“ハレルヤ”から“戻った”と言った。

・・・つまり、彼はもう一人の僕とも言える存在 “ハレルヤ” について、知っている？

確かにさっきまで、僕はアレルヤと身体の主導権を交換していた。・・・だとは言え、一瞬で、例え此方が二重人格だと分かってても、その人格の名前まで分かったりする筈がない！！

『・・・あ、すまない。実は君達をサポートするに当たって、予めヴェーダを使って、君達の経歴以外のデータを全て見させてもらっ

ていたのだ。君のもう一つの人格を知っている理由も其処にある』

けど、次の瞬間彼が申し訳無さそうに言った言葉を聞いて、僕は警戒を解いた。

それだったのならば……まあ、すんなりと納得は出来ないけど頷ける物はある。

勿論、個人情報勝手に見られたのは不快な物もあるけれど、それも僕達をサポートする為に必要だったと言うのなら、我慢できる。

「……ハレルヤに変わってしまったとは言え、悪かったね。いきなり襲い掛かってしまって」

『何、気にするな。丁度良く試作装備のテストが現れてくれたと思えば、このくらいは何とも無い』

「……苦労してるんだね」

『大きなお世話だ』

そう言うと、彼は声に少しの苦笑を滲ませながら、マントを翻して去って行った。

「……なんとも気障な帰り方だなあ……不覚にも、一瞬だけカッコイイとか思っちゃったよ。」

『アレルヤ!! 無事なの!?!』

暫らくの間、彼が去って行った方を眺めていると、突然スメラギさんの心配そうな声が耳に入った。

後ろを振り返って見ると、何時の間にか、もうトレミーが目と鼻の先まで近寄ってきていた。

・・・・・・・・・・ボーっとしすぎちゃったかな・・・？

そう考えながら、僕は苦笑を一つ零すと、スメラギさんに無事な事を伝えながら、キュリオスをトレミーに向けて、帰還の準備を始める事にした。

経済特区東京 某マンション

「・・・・ツクショー・・・・ビームマシンガンの弾受けながら回転したり、ネットガンでキュリオス一本釣りしたのは、流石に不味過ぎ

たか……まさかオーバーホールする事になるとは……」

先日のハレルヤの暴走から約2日。

俺はマンシヨンの廊下を歩きながら、頭を抱えていた。

その原因は、今口に出したように、Oガンダムをオーバーホールする破目になった事に起因する。

と、言うのも、あの小規模な戦闘のあと、軌道エレベーターに隠してある小型ドックに入った途端に、突如としてOガンダムの両肘関節部分から嫌な音が鳴ったかと思うと、次の瞬間ビシィ！と言う音と共に、フレームに罅が入ってしまったのだ。

おそらく原因は、関節の酷使による疲労。

それを聞いた瞬間に、俺の頭にはボンヤリと、「よく考えてみれば、計画発動直後から今迄、まともにメンテしてなかったな」と言う言葉が浮かび上がってきたので、おそらくそれも原因の一つだと思われる。

まあ、そんなこんなで、Oガンダムは簡単な改修も兼ねて、全体をオーバーホールする事に。

お蔭で軌道エレベーターのステーションから、歩いて帰ってくる羽目になってしまった。

「チクシヨ……今度からマジ気をつけよう……もう金輪際、戸籍の偽造とか変装とかしないぞ……」

そう、愚痴りながら自室目指して進んでいくと、不意に眼鏡をかけた女性と長い髪の少女が言い争っている姿が見えた。

遠めなので少し分かり難いが、どうやら少女が眼鏡の女性を引っ張ってどこかに連れて行くこうとしているようだ。

……あれ？ルイス？何やってんだ？

案の上、少女はルイスだった。

・・・と、言う事は、あの眼鏡の女性は彼女の身内なのだろう。
髪の色とか一緒だし。

・・・それにしても厄介だ。

何しろ彼女たちが争っているのは自分の部屋の前。

近づいていくことに、二人の間に流れる険悪な雰囲気、俺の神経を突き刺していく。

「ルイス！私は彼に会うとは一度も言っていないわよ！」

「少しは私の話を聞いてよ！」

・・・話を聞く限りでは、どうやらルイスは、女性を自分の彼氏
沙慈に合わせようとしているのだろう。

何は兎も角、このままでは二人が邪魔なので、一端退いて貰うべく、
したくは無いが二人に声を掛ける事にした。

「あの・・・すいません。あまり言いたくは無いのですが・・・
其処、俺の部屋なんですけど」

「あらごめんなさい。お騒がせしたわね」

「ああ！アムロ！！ねえ聞いてよ、ママが！！！」

「・・・んあ？何？一体何したの？」

言いたい事は大体分かるけど・・・って、いつか、やっぱり身内だったのか。

そう、俺が口に出そうとしたときだった。

「あれ？アムロ？何してるの？ってルイス！？」

タイミングバッチリで、俺の後ろから沙慈がやって来た。

しかし、ヤツはルイスと彼女の母親を見た瞬間、顔をひきつらせる。

「
．．．．．」

そして、この状況を作り出した元凶の一人であるルイスの母親は、その沙慈の顔と俺の顔を交互に見ながら何かを考え込む。
その結果、

「ルイス！あなた、この子とこの子で二股をかけていたのね！！」

「ええええええええええええええええええええええええ！！？」

「はいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！？」

如何してそうなった！？

やはり親子。

少々ぶっ飛んだ思考は、ルイスと同じかそれ以上だ。

「ち、違っんです！お母さん！」

「そうよママ！！って言うか、如何してそんな考えに行き着くのよ！！？」

「ルイスは黙ってらっしゃい！」

「
．．．．．」

・・・言いたくは無いが、何じゃこのおばちゃん？

日本のおばちゃんとさほど変わらないそのテンションには、若干頭痛さえしてくる。

しかしこのまま黙っていたら、問題が何一つとして進まないのは明白。

俺は頭痛を覚えながらもルイスの母親に話しかける事にした。

「あの・・・すみません」

「ああ、ごめんなさいね、ウチの娘が・・・あなたからもじっくりお話を」

「いい加減に家に入って夕飯の支度をしたいのですが・・・」

「へ？」

そんな俺の言葉を聞いた瞬間に、以前計画の発動時に、俺の独り言を聞いた沙慈とルイスと同じように、キョトンと間の抜けた顔をした。

見れば二人も同じ様にキョトンとしている。

「・・・・・・・・・・」

「「・・・・・・・・・・」」

「・・・・あの・・・」

「?! は、はい？」

「……入っても、良いですか？」

「あ……は、はい。ごめんなさいね？」

そういつて、彼女はその場を退いてくれた。

すかさず、俺はドアの前に立って、鍵を使ってロックを解除すると、そのまま部屋に入った。

「……………今日のところはお暇させていただきます。それでは」

ドアが締め切るか締め切らないくらいで、向こうからルイスの母親のそんな声が聞こえたが、無視してドアをそのまま閉めた。

アザディスタン王国 居住区

人革連による、“ガンダム鹵獲作戦”が失敗に終わってから、約1週間後。

ここ、アザディスタンで、一つの大きな事件が起きた。

アザディスタンの保守派の高名な宗教的指導者である、マスード・ラフマディー。

その彼が、何物かに誘拐されたのだ。

ソレスタルビーイングは、この事件を、何時までも二の足を踏み続けるマスード氏に業を煮やした、超保守派による自作自演か、改革派による強攻策。

又は第三者による内紛を引き起こす為のものと睨んで、実働部隊をアザディスタンへと潜入させていた。

目的は、内紛を止める為、誘拐されたマスード・ラフマディー氏を保護し、全国民に無事を知らせること。

そして、現時点で起こっているどんな小さな紛争にも介入する事。

先日は、最近新設された太陽光発電受信アンテナ施設に、保守派の中でも、特に過激な超保守派と呼ばれる一派が、施設の警護に当たっていたMSの内数体を強奪し、施設を破壊しようと行動を起こした。

施設自体は、たまたま其処の警備に当たっていた、ユニオンのMS一個小隊と、事前に情報を得て既に待機していたロックオンとハロによって、ある程度は防衛できたものの、その乱戦の最中に第三者の手によって放たれたミサイルで、少なからず被害が出てしまっていた。

追撃した、とあるエージェントの話によると、その第三者はおそらく傭兵で、今だこの近くに潜伏している物と考えられているらしい。これを受けて、実働部隊はその傭兵、もしくはその仲間が今回のマスード・ラフマディー誘拐の件に、少なからず関係していると考え、調査を開始した。

その情報収集の為に、今刹那はこの国の一般的な衣服に身を包んで、街中を歩いていた。

彼女が街を歩いていると、否が応でも人々の視線を集めた。

刹那の出身地は確かにアザディスタンだが、より正確に言うなら元クルジスである。

アザディスタンの人間は戦争が終結した後も宗教上の理由からクルジスの人間を忌み嫌い、クルジスの出身者もまた、自分の故国を滅ぼされた恨みから、アザディスタンに対してドス黒い感情を抱いていた。

そして、地元の人間が見れば、クルジスとアザディスタンの人間との区別は、実は意外とあつという間についてしまう。

まるで日本人が、中国人や韓国人を何となく見分けられてしまえるように。

つまり、街に出た瞬間に刹那は周りから警戒と侮蔑を集める対象になっっているのだ。

そんなこの国の人間の様子を見ると、刹那はあの頃のことを思い出す。

瓦礫と化した街を駆け巡りながら、死の臭いが充満する中で神のために、仲間や自分を本当の双子の妹のように可愛がってくれた彼と共に戦っていた、あの頃のことを。

……あんな無意味な事を……まだ続けるつもりなの？この国は……

それは一種の絶望でもあったのかもしれない。
今はあの頃から、既に5年以上経っている。

・・・というのに、其処に住む人々は、未だに何も変わっては居なかった。

刹那が静かに怒りに燃えていると、目の前に10歳ほどの少年が歩いてきた。

肩には二つの壺がくくりつけられた棒を担いでいる。

「お姉さん！！水買わない？」

それを見た刹那は、その姿が少しだけ微笑ましくて、口元に少し笑みを浮かべてこう言った。

「いや、間に合っている」

「えゝ？ちえ。残念」

少年はそう言いながらなかなか刹那から離れようとしない。

「ひょっとして、ここは初めて？」

「・・・・いや、ずっと世界を旅している。此処に来るのは・・・・2回目か？」

その言葉を聞いた少年が目を輝かせる。

「ねえねえ！族長に聞いたんだけどさ、この世界にはすっごく高い塔があつて、宇宙まで行けるって本当なの！？」

「・・・・軌道エレベーターの事か？ああ。本当だ」

「もしかして行ったことある！？」

少年は怒涛の勢いで、彼女に質問する。

さしもの刹那も、16年生きてきてこういった質問攻めにあうという事は初めてだったため、思わず半歩下がってしまう。

「ま、まあ・・・何度かは」

「すっげえ～～！！」

少年は感極まって両手を強く握る。

「マリナ様が言ってたよ！いつか僕たちも宇宙に行けるって！」

「・・・？マリナ・・・？」

「知らないの？ほら、あそこにあるポスターが、マリナ・イスマイル様だよ」

そう言つて、少年は町の一角を指差した。

刹那が指の先に視線を向けると、そこには以前、ミッションの最中に出会ったあの女性の写真が確かにそこにあった。

「・・・マリナ・イスマイル・・・・・・・・」

「おい、なにしてる」

以前彼女と出会った時の事を思い出し、刹那が考えに浸ろうとした時、後ろにいた老人から敵意がこもった声をかけられる。

「お前クルジス人だな。顔見りゃわかる」

「おじいちゃん？」

少年は自分の祖父が何を言っているのか理解できない。

先の紛争を知らないのだから当然なのだが、そんなことなどお構いなしに老人はまくし立てる。

「ここはお前がいていい場所じゃない！とつと出ていけ！」

刹那は怒るでもなく、どこか呆れた、そして諦めのような顔をして歩きだそうとした。

だが、次の瞬間。

「オラア」

という声が聞こえると共に、

「プゲエツ！？」

という声を出しながら、老人が横から誰かに突っ込まれて……いや。

蹴っ飛ばされて吹っ飛んだ。

少年が反射的に「おじいちゃん！？」と、先程とは違うニュアンスで祖父を呼ぶ。

しかし刹那の方はそれ所ではない。

その目は老人を蹴っ飛ばした人物を凝視している。

老人を蹴っ飛ばした人物は男性だった。

しかしその格好は、場違いにも程があり、下は砂色のカーゴパンツで、上は灰色無地のシャツの上からボマージャケットを着込んでい

た。

髪は黒く、肌は黄色人種特有の色で、彼が中東ではなく、アジアの出身であるという事を如実に物語っている。

しかしそこら辺だけを見れば、下手をすると普通に何処にでも居そうな観光客とも解釈できる。

問題はその顔だった。

言い表すならば、顔は刹那とよく似ていた。

まるで双子かと思間違えるくらいに。

彼女は此処まで自分に良く似ている人間を二人しか知らず、また、その二人の内の誰であるか、直ぐに分かってしまった。

「アムロ!？」

「おう、刹那。観光旅行はどうだ？楽しいか？とりあえずあのジジイには今から俺とお前が本当の兄妹で、クルジス人って言うのは勘違いだと、徹底的に教えてくる」

案の定、老人を蹴っ飛ばしたのは、彼女にとって、（御飯的な意味で）絶対に逆らえない相手だった。

「いやー儲かった儲かった！」

・・・・うわー・・・凄く嬉しそうだ

先程の老人を路地裏に連れ込んで暫らくしてから、手の上でこの国の硬貨を手で弄びながら此方へと戻ってくるアム口を見て、思わず普段なら絶対に考えないような事を心の中で呟いてしまった。当のアム口は、ニコニコしながらおそらく先程の老人から奪ったのである。硬貨を見ている。

・・・何故そんな事がわかるかつて？

それは簡単だ。

二人が姿を消してから、物凄い鈍い音が周囲に響き渡った後、悲鳴のような物が聞こえて、それから彼が出てきたのだから。

「・・・アム口。あの・・・怒ってくれたのは嬉しいんだが・・・それは流石に・・・」

「その人の事が人種が違うからという理由で一方的に嫌う奴らに、

人権なんぞ無い」

「・・・・・・・・いや、それでも・・・・・・・・」

そう言うが、アムロは全然気にする様子は無い。

・・・・・・・・良いんだ、ろうか？

いや、悪い事に決まっている。

そう考えて、再び彼を咎めようと口を開こうとした、その時だった。

「・・・・・・・・あの・・・・・・・・」

「ん？」

「・・おじいちゃんは、大丈夫、ですか？」

・・・・・・・・先程の水売りの子だ。

おそらく自分の祖父が心配なのだろう。

不安そうな光を目に湛えている。

「・・・・・・・・」

それを見たアムロが、一瞬で渋い顔になる。

まだあまり付き合いの長くない私でもわかる事だが、彼は基本的に善人だ。

少々偽善的な所もあるし、先程のように、凶暴で理不尽な所もあるけれども、それでも基本的に誰かが“正当な理由で困ってたら”自分の事など放っぱり出して、その人の事を助けようとする。

実際、以前買出しに行った際に、迷子になった子供を見つけてしま

い、一緒に親を探してあげた後、無事見つけ出して引き渡したら、今度は自分が迷子になった事があると言っていたし。実際にハロがコッソリ撮っていた映像もあったので、法螺話でもなんでもない。

閑話休題だ。

そんな彼の前に、不安そうな顔をした子供　しかもその原因を作ったのは自分自身　が居たら、彼は間違はなく、その子供を笑顔にしようとして、無茶な行動をし始める。

「……あ、そういえば、さっきから喉が渴いてるんだっけ。さっきのジジイの所為で忘れてたわ」

……ほら、こんな風に。

「坊主。丁度いいから、その水全部俺に売ってくれ。それと、お駄賃でこいつもくれてやるよ」

そう言いながら、彼はポケットからそれなりのお金　明らかに、本来払うべき金額を少しだけ超えている　を取り出すと、先程から手で弄っていた硬貨と共に、少年に手渡した。

驚いて彼を見つめる少年から、アムロは水を受け取ると、少年に何か耳打ちした。

すると、一瞬で少年の表情は明るくなり、次の瞬間「ありがとう！」と彼にお礼を言うと、そのまま先程アムロが入っていた路地裏に消えていった。

「……さて、と。刹那。水も買えたし……んじゃ、行くか」

そう言つて、アムロは私の手を取つて歩き始めた……って！

「あ、アムロ！？」

「……んあ？何だ？」

「何故手を取る理由がある！？普通に私が付いて行けば良いだろう！？」

「いや……だつてお前、なんか美味そうな物があると、用事とかスツカリ忘れてそちに飛んできそうなんだもん」

「んなつ！？」／／／／／

心外な！！

流石の私でもそんな事あるはずな……

「あ、露店で肉が焼いて売つてゐるぞ」

「何っ！？何処だ！？」

………あ。

「……………」

「……………」(。°)ニヤニヤ

「……………」

「……………」(。°)ニヤニヤ

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」(。

。)ニヤニヤ

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・うえ」

「(。 ー)！！！何で泣くの！？」

「うえ・・・・・・・・うええええええええ」

「ああああああ！！！ちよちよちよちよ！！！ゴメン！
ゴメンって！！！な！？本当にゴメン！！！流石にかいかい過ぎ
た！！！！後で美味しいもん買っあげから泣き止んで！？ね！
？」

「・・・・・・・・うわああああああああ！！！！！」

「何でもっと泣き出すのおおおおおお！！？？」

うるさいー！

お前はもっと女心(と、言ったか？)を学習しろ！！！

「・・・・・・・・」

「なー・・・本当にゴメンって・・・マジで気まずいから機嫌直してくれて・・・なんか周囲の人の目が、心なしかキツイから。お豆腐メンタルの俺には拷問以上の威力を与えてくれるからって。マジで」

・・・誰が許してやるものか。

一応私だつて女なんだぞ？ガラスのハートなんだぞ？
お前の豆腐で出来たハートなんかよりも脆いんだぞ？
そこらへん分かってるのか？

「ほら、このプリンあげるから」

「ん、許す」

なんだ。最初からそう言ってくれば良かったのに。

「……なんか一瞬だけ、「うわやっす……」とか聞こえたような気がするが、気のせいだろう。」

「……む、意外と美味いな」

「そりゃどうも。言いたかないが、口に出てるぞ刹那」

「むう……」

「……意外と恥ずかしいな。」

以前クリスやユリが、何か考え事をしている内に、考えていた事を声に出していた事があって、それを指摘したら直ぐに顔を赤くしていた。

当時は何故顔を赤くしたのか良く分からなかったが……成程。実際に指摘されてみると、これは恥ずかしい。

「……どした？いきなり手、止めて」

「ん？いや、何でも無い」

「あ、そう……って、あそこか？目的地？」

暫らくしてから、アムロが何かを見つけた。

其処は近くに小さな崖がある岩場だった。

咄嗟にプリンを簡単に包装してからしまい、端末を取り出して目的地の場所と現在地を照合する。

結果はビンゴ。

直ぐに計器を取り出して、近づいていく。

其処は昨日、アンテナ施設の防衛戦中に、第三者によってミサイルが発射されたと思われる場所だった。

昼間にも関わらず人っ子一人いない。

昨晚あれだけ激しい戦闘が行われていたとは思えないほどだ。

まあ、当たり前的事だが。

「ロックオンの情報では、確かこの辺りからミサイルが発射されたようだが……」

私はは地面に計測用の端末を近づけて様々な数値を計測する。

するとある地点で、微量ながらMSのスラスターに使われるプラズマによる、残留反応が見られた。

「残留反応？という事は、確かに此処にMSがいた………？しかし、どこに………」

私は立ち上って、計測しながら小さな崖になっている場所へと歩いていく。

が、その途中で、いきなりアムロに肩を掴まれて、動きを拘束された。

何をするのかと抗議の声を出そうとしたが、口に手を当てられて、声が出せない。

ならばと目で抗議しようとした所で、アムロは自分の口元に指を当てて、「シ……」と言って来てから、崖の下をコツソリと指差した。

訝しげに指の先を目で追うと、そこにフラッグと二人の人影を見つければ、ハッとして体勢を低くした。

それに体勢を崩されて、アムロが倒れ掛かってきたが、何とか支える。

アムロの体勢が元に戻り、彼も体勢を低くしたのを見計らって岩陰に隠れ、あちらの様子を窺う事にした。

「フラッグという事はユニオン？ 奴らもここの搜索を？」

「おそらくな。 大方、昨日の戦闘で施設の防衛に当たってた連中の一人じゃないか？ もう一人はパイロットって言うよりかは、学務みたいだな」

私の呟きに、アムロが明確に返す。

どうやら向こうからこちらはまだ認識できてはいないらしい。

・・・認識されていたら、それはそれでアウトな気もするが・・・同時に特に風も無いため、向こうの話し声も明確に聞こえた。

「回収したポッドもそうだけど、この反応はやはり間違いないね。」

「PMCトラスト側の見解は？」

「モラリアの紛争時に紛失した物、とは言うてはいたけど・・・」

其処まで眼鏡を掛けた白衣を着た男が話を進めると、軍服を着た男が話を手で制止し、鋭い視線を私達がいる崖の上まで向けてきた。

「なんだい？」

「・・・立ち聞きはよくないな。」

「……………ッ!? 見つかった!?

見ればアムロも……………あ、いや。どうやらあまり驚いてはいないらしい。

それでも、一瞬だけ「おや」という声は聞こえたから、それなりに驚いてはいる……………んだろう。たぶん。

「出てきたまえ!」

そんな声を聞いた私は、慌てる事なく、訓練の通りに一般人を装って岩陰から出ていく。

アムロも一緒に立ち上がった。

私は弱気な地元の少女を演じながら。

アムロはそんな私の兄役を演じながら。

彼らの前に姿を現した私達は、両手をあげて無抵抗の意志を示す。

「あれ? 地元の子かな?」

「どうかな」

白衣の男は疑っていないようだが、軍服を着た男は此方を警戒したままだ。

「あ、あの……………私、このあたりで戦闘があったって聞いて、それで……………」

私はあくまで興味本位でここを訪れたと思わせようとする。

この国の……………厳密には、元クルジスという隣国出身である私だからこそできるカモフラージュだ。

「なるほど」

白衣の男はフムとうなずく。

が、軍服の男の視線は更に鋭い物となった。

……何かミスでもしたか！？

私はそう思って不安になる。

が、彼の視線の先は、よく見るとアムロの方に向けられていた。

「……君の方は、何故此处にいるのかな？」

軍服の男がアムロにそう質問する。

するとアムロは何でも無い様に、平然としてこう言った。

「俺はこの子の双子の兄貴分だな。こいつがどうしても此処を見たいといったから、付き添いで此処まで来ただけだ。服装が地元のと違うのは、最近まで経済特区の方に住んでたからで、今日はたまたま里帰りしてただけだ。因みに伏せたのは、見つかったら面倒な事になりそうだったからだ……一応、自己紹介でもしたほうが良いか？人物照合しやすくなるぞ？」

それを聞いた私は、驚いてアムロを見る。

だが、それを聞いた軍服の男は、彼をじっと見据えたまま動かない。対するアムロも、ジッと彼の方を見続ける。

「……フツ……其処まで言われてしまつては、仕方が無いな」

「お、信じてくれるのか？」

「悪いが、それでも人を見る目はあるのでね」

が、暫らくしてから、軍服の男はフツと笑って、警戒を解いた。それを見てアムロもいつも通りにヘラツとした笑いを作る。

そのタイミングを見計らったのかどうかは知らないが、次の瞬間白衣の男が会話に入ってきた。

「・・・まあ、そういう事に興味を抱く年頃であるのはわからなくはないけど、このあたりはまだ危険だよ。早く立ち去ったほうがいい」

どうやら二人とも、私たちの事を信じてくれているようだ。

が、これ以上下手な会話をしたら、檻褸が出ないとも限らない。再び疑われない為に、早くここから立ち去ったほうが得策だろう。

「はい、そうします。失礼します」

「ほんとだよ全く。付いて来させられる、俺の身にもなれってんだ・・・お仕事邪魔してすみませんね」

「いやいや、気にしてないから大丈夫だよ」

「それでもお仕事の邪魔したのは事実ですから。ほれ。ナイナも頭下げろ」

そう言うと、アムロは私の頭を掴んで、無理矢理お辞儀させる。一瞬彼の言った言葉が何なのか分からなかったが、無理矢理お辞儀させられた後で、彼が咄嗟に考えた、私の偽名なのだと気付いた。

「お兄ちゃん。自分で出来るよ……」

「アホ。そんな素振り全然しなかったろうが……すみませんね、何分人見知りの激しい子で……」

「はははは……いや、可愛い妹さんじゃないか。大事にしてあげるんだよ?」

「そりやもう。例え婚約者連れてきたって手放したりしませんよ?」
アムロはそう言って一礼してから、「それじゃ」と言って踵を返した。

私も、彼に続くようにして一礼すると、彼らに背を向けて歩きだそうとした。

その時、

「少女。そして少年よ」

突然、軍服の男に声をかけられた。

瞬間、私は凍ったように固まる。

アムロは「んあ?」と言いながら気だるげに振り返った。

……相変わらず思うのだが、何故こんなに彼は余裕なのだろうか? 慣れているのか?

そんな私の心中にお構いなく、軍服の男は言葉を続けた。

「君達は、この国の内紛をどう思う?」

「え?」

「・・・・・・はい？」

・・・・私たちの事を探っているのだろうか・・・・・・？

それとも、たまたま・・・・・・？

それとも・・・・・・？

さまざまな推測が私の頭の頭の中を埋め尽くす。

「グラハム？一体何を・・・・・・？」

「カタギリ。スマンが少しだけ静かにしてくれ・・・・・・もう一度、聞こう。君達は祖国である筈のこの国の内紛を、どう思うかな？」

鋭い視線と、それに対応した鋭い声を背に受けながら、私は軽くパニックになった脳をフル回転させる。

・・・・しかし、答えは中々出ては来ない。

「・・・・・・わたし、は・・・・・・」

「・・・・フム・・・・客観的には、考えられんか。なら、君はどちらを支持する？」

その時、まるで頭の靄が晴れたかのように、ハッとした。

同時に、ある答えに辿り着く。

それは、この状況から逃れるための物ではない。

そんな物ではなく、自分が素直にそう思った答えを彼に告げる。

「・・・・・・支持は、しません。どっちも。どちらにも、その人達也の正義が、あると思うから。・・・・・・でも、この戦いで人は死んでいきます・・・・・・。沢山、沢山、死んでいきます・・・・・・」

言いながら、私の頭の中には、あの時失った仲間達の顔が、彼の笑った表情が、浮かんでは消えていく。

・・・だからこそ、分かる。

これはマイスターとしてではなく、素の自分の、カマル・マジリフとしての考え。

戦う事以外の事ができない道にいるから、だからこそ辿り着けた、自分なりの、自分だけの答え。

・・・今の自分自身と矛盾している事は、痛いほどに解っている。まともな答えにすらなっていない事も、しっかりと解っている。

だがそれでも、悩んで悩んで、悩み抜いた果てに導いた私だけの答え。

「・・・・・・同感だな」

意外な事に、私のそんな答えになっていない答えを聞いた軍服の男は、目を瞑ってそう答えた。

「・・・軍人のあなたが言うんですか？」

「・・・やはり、この国に来た私達はお邪魔かな？」

子供のようになつて無邪気な、それでいて凜々しい男の笑みを見て刹那は少し気を緩める。

「だって・・・軍人がたくさん来たら、私達みたいな市民の被害が増えるし・・・」

「・・・成程。確かにそうかもしれないな・・・だが、君だって戦っているだろう？」

「え!？」

そう言われた瞬間、再び緊張が奔った。

咄嗟に腰の後ろ側に隠した銃に手が伸びる。

「その後ろに隠しているものは何かな？」

「ッ!!」

男の笑みが鋭いものに変わり、私の後ろにやった手に注目する。

瞬間、この男が私の腰に隠された銃に気付いていた事に、今更ながら私は気付かされる。

私はそれまでの気弱な表情から一変して、鋭い目付きになって、男を警戒した。

「怖い顔だ」

二人はそのまま睨みあうが、軍服の男は一息つくと今度はアム口の方に目を向ける。

「君もそうかね？」

・・・それは、彼も銃を持っている事を確認する為の言葉だったのか、それとも先程の私の答えと同じ事を考えているのか、と、問いかける物だったのか・・・

少なくともアム口は、後者だと思ったらしい。

先程となんら変わらない口調で、彼に答えを返す。

「うん．．．．．個人的にくっだらないう．．．とは思って
ますね」

「!？」

「!．．．ほう。どういう事かな？」

そう言つて、男は更に眼光を鋭くした。

だが、アムロはそれに気付く素振りを全く見せずに、再び彼に答え
を返す。

「いや、そもそもこの国の紛争の根幹にあるのつて、お互いの利益
どうこうつて話じゃなくて、宗教上の理由で、お互いが気に食わな
いから引き起こされてるもんが大半でしょう?．．．いや、その
場合、一応利益の話になるのか．．．．?．．．．ならないよう
な気がするんだよなあ．．．．」

「．．．ふむ。確かに、私の目から見ても、利益どうこうと言つ話
では無さそうだったが．．．．」

「でしょう？此処らへんは特にそういうのが多いですよねえ・・・
・利益目的ならまだ人間らしくて、個人的にはまだ良いとは思
うんですけど、信仰する物の違いで殺し合いするって言うのは、何
人として間違っているような気がしましてね・・・あ、お二人
は軍服から見限り、ユニオンの方ですね。すみません。お二人に
は少し分かりにくいですかね？」

それを聞いた男は、不意に驚いた顔をして、こう彼に問いかけた。

「・・・いや、興味深い意見を聞いた。礼を言わせて貰・・・
む？君もこの国の出身なのだろう？随分と周囲の人間とは違った考
えを持っているのだな」

「・・・俺はコイツと違ってハーフなんですよ。日本人と、この
国の人とのね。簡単に言ってしまうと、俺とこの子　　ナイナは、
種違いの兄妹なんです。詰まる所、母親が一緒だけど、父親は違
って事なんです。元々、俺の親父は此方に永住するつもりだった
らしいんですが・・・まあ、そこらへんは、地方特有の変なしき
りで、どうやらダメだったらしくて、結局親父は生まれたばかりの
俺を連れて日本に戻ったんですよ。だから俺はコイツと違って、生
まれはこっちなんですけど、育ちは日本なんです。簡単に言っちゃ
うと・・・準日本人って感じなのかな・・・？」

「・・・よくまあ、次から次へと口から出任せをポンポンポ
ンポン出せる物だな・・・」

誤魔化す為とはいえ、結構作りこまれた話だ。所々無茶苦茶だが。

「・・・だが、情報によると、この国の村の幾つかの所では、確かに
そんな古いしきたりを持つ村は存在しているらしい。

それに、確かに私とアムコの顔は良く似ているから、これ位の法螺

話であれば、おそらくかなり突っ込まなければ、十中八九信じ込ませられるだろう。

実際、向こうは納得したような顔をした。

「……確かに、それならば、感性も変わってくるか……
・成程、済まなかったな、少年」

「いやいやしょっちゅう言われますし。それに、俺って結構我慢強い方ですから、これくらいならへっちゃらですよ」

「ほう。そうだとすれば、私とは正反対だな。基本的に私は我慢弱く、なおかつ人の話を聞こうともしない上に、落ち着きも無い。俗に言う嫌われ者だ」

「へえ、そうですか。サラッと言っただけなのに、必要以上の自己紹介ありがとうございます。因みにコソコソするのも得意です」

「ならば、君は私の嫌いな人種の一人のようだ。私は基本的に粘着質で諦めが悪い上に、姑息な真似をする輩が大の嫌いときている」

「……ん？一番最後の言葉だけなら、すんなり納得できるのに、その前の聞いてすらいらない質問の答えで一氣に訳が分からなくなっただぞ？」

「気にするな」

「いや、気にしますよ」

「気にするなと言っている」

「いや、そりゃそうですね……因みに和食は何が好きですか？」

「寿司と鍋だ。因みに甘味ならば、ドラ焼きと団子。飲み物であるならば緑茶が好物だ」

「あ、其処は俺も同じです。意外と気が合いますね」

「うむ、そこは同意しよう」

「……如何してこうなった？」

先程のあのシリアスな空気から一変して、今やなんだかよく分からない、カオスな空間が何時の間にか完成している。

「……以前ロックオンが、「ツツコミ役不在だと、ボケが飽和して宇宙の法則が乱れる」と言っていたが、今が、まさにそんな状態だった。」

流石にこれ以上は話が進まなくなるし、任務にも支障が出る。そう考えた私は、アムロを諫めようと、口を開こうとしたが、

「……グラハム。そろそろいい加減にするんだ。それ以上ボケられると、流石の僕でも捌き切れなくなる。そっちの子も」

「「何だつまらん」」

「……ハア……君らね……」（泣

……白衣の男に、遮られてしまった。

何か悔しい物がある。
そう思つて、私は頬を膨らませた。

「・・・なんで彼女は、僕を睨みながら、頬を膨らませているんだろう」

「自業自得だな。カタギリ、君はもっと乙女心を解つてあげるべきだ。それだから、私と同じ様に何時まで経つても彼女が出来ない」

「そうそう。女の子の見せ場を奪つちやダメですよモヤシ博士」

「そして君らは地味に酷いな！！後グラハム！！彼女云々は大きなお世話だよ！！！！と言つか君！！モヤシ博士つて一体何！？」

「見た目」

「おお、成程。言い得て妙だな」

「これ以上僕を虐めて何が楽しいのさ君達は！？あと、君ら実は初対面じゃないだろう！？息ピッタリじゃないか！？」

「いやいや、初対面だが（ですか）？」

「ああああああああああああ！！！！！！！！！！」

「・・・カタギリ。落ち着いたか？」

「……ああ、何とかね……」

「すみません。調子こき過ぎました。ごめんなさい」

「いやいや………」

「……どうやら、私が拗ねている間に、人悶着あったらしい。

白衣の男性は半泣きの状態となり、軍服の男とアムロはかなり生き生きとしている。

「……本当に何があった？

「あ、それじゃ、これ以上邪魔しちゃ悪いと思うので、俺達はこれで。ナイナ、帰るぞ」

と、突然アムロがこんな事を言い出して、此方へと歩いてきた。

チラと時計を見ると、予定されていた時間をかなりオーバーしている。

流星に拙いと思ったのだろうか？

気付けば、彼はそのまま私の隣を通り過ぎて、スタスタ歩いていこうとしていた。

置いてかれてはマズイ……そう思い、私は急いで彼の後を追いかけようとした。

その時である。

軍服の男が、計ったかのようなタイミングで、隣にいた白衣の男に話しかけた。

まるで私達に聞かせるように。

「そういえばカタギリ。先日、ここから受信アンテナを攻撃した機体はA E Uの最新鋭機、イナクトだったな」

「!？」「・・・？」

私は思いがけない情報に、そして、自分の前で話し始めた男に驚く。アムロは相変わらず「何を言っているのか解らない」と言った感じだが、よく見るとしっかりと聞き耳を立てているという事が分かる。

「いきなり何を・・・？」

カタギリと呼ばれていた白衣の男もそれなりに驚くが、それでも軍服の男は話すことを止めない。

「しかもその機体は、モラリアのPMCから奪われた機体という事らしいじゃないか」

そこまで話すと、男は満足そうに一息つく。

「さあ、撤収するぞ」

「あ、ああ・・・」

男は素早く背を向け、フラッグの元へと歩いていく。白衣の男も慌ててその後を追いかけて行った。

「・・・さて、刹那。意外な所から情報が入った訳なんだが・・・
心当たりあるか？」

その後、私は暫らくの間動かずに、アムロから声を掛けられるまで

彼の言葉を反芻していた。

「PMCのイナクト・・・・・・・・・・？」

「・・・微妙か？個人的には、あのモラリアの時の赤と青のイナクトが怪しいと思ったんだが・・・」

アムロにそういわれた瞬間、ハツとする。

「・・・・・・・・・・まさか！？」

あの時、イナクトの中から姿を現した赤髪の男、アリー・アル・サ―シエスのことを思い浮かべる。

「奴が・・・・・・・・あの男が、この内紛に関わっていると言っのか・・・！？」

「・・・・・・・・心当たり、あるみたいだな。やっぱりあの時のイナクトか？」

「・・・私の予想が当たっているならば、おそらく・・・・・・・・いや。十中八九、奴だ」

「・・・だが、奴はもう戦いが終わったこの国に用は無い筈だ。なのにまた、戦いを引き起こしている。」

「なぜだ？なぜ、今になって・・・・・・・・・・」

分からない。奴が何故、再びこの国で戦いを引き起こそうとしているのか・・・・・・・・

だが、もしそうだとすれば、奴がいるかもしれない場所は……
・いや、いるであろう場所はあそこしかない。

ピピピ・ピピピ・ピピピ

「うん？通信？一体誰……ってうわ師匠かよ……. 刹那、ちよつとスマン」

そう言うと、アムロは少し離れた所まで歩いていった。

師匠、という事は数日前の親睦会という物で会った、あの中性的な顔立ちの、黄緑色の髪 of 少年（？）の事だろうか？

そんな事を考えながら、私は彼の話し声に聞き耳を立てる。
悪いとは思ったが、万が一という事も有り得る。

「……はい？マジ？もう？……はい……はい……
……あ、そ。んで、今度は一体何を取っ付けたの？……ふーん……. は！？何で！？俺も一緒に行った方が……. って、ああそういう事……. オイ、今の音一体何……. 何？リヴァイ兄さんが何時の間にか姉さんになって、結果として姉さんが発狂した！？一体俺がいない間に何があつたのそっち！？え！？グラーベさんとリジエネ兄さんとプリング兄さんで今必死に押さえ込んでるけど、もう直ぐ拘束が破れそう！？ちょ、ヒクサーさんとデヴァイン兄さんは一体如何し……. 発狂直後にレバーブロー食らって沈んだだあ！？どんな状況よそれ！？……. ああもう！！」

そう言うと、彼は必死な形相になって此方に振り向き、こう言った。

「すまん刹那！！今緊急事態が起きて、色々とやばい事になってるらしいから、ちよつと応援行ってくる！！俺がいなくても、もう大丈夫だよな！？」

「あ、ああ。うん．．あ、でも「それならいいや！んじやな．．とど。道中買い食いつて、遅れるんじやな」さつさで行け！．．！」
「．．．．．ああうん。分かつた！んじやな！」

「行け！！さつさで行つて、その姉さんとやらにマウントポジション取られてボコボコニされて来い！！」

「地味に酷いな！」と言つて、彼は走つて行つた。

．．．．それにしても、心外だ。

私は其処まで食いつん坊じやな「お！お嬢ちゃん！！ラム肉焼いたんだがいかかな！」．．．

「頂こう」

「あいよ！毎度あり！！」

．．．．ムゲ．．フム．．．．美味いな．．．．ん？私は今、何故怒つていたのだづけ？

．．．．うう、思ひだせん．．．．．まあ、忘れてしまふという事は、別に大した事でもなかつたんだろう。

それよりも、今はミッシヨンの方を優先しなければ．．．．ム？アレはスイカか？．．．

それから2日後

アザディスタン首都 郊外

其処に、俺は居た。

あの後、マスード氏の奪還を実働部隊に任せた俺は、バックアップの為という名目の元、Oガンダムを“O-01”として回収し、一旦家に戻って、発狂した姉さんを延髄切りで気絶させた後に、今回のミッションでのサポートの為に、此処に機体をカムフラージュしながら待機していた。

「に、しても斬新なミッションだよなあ……………一応保険として俺も待機してるけど、武器は最低限だし……………」

「基本装備！基本装備！」

「いや、そうだけどさ……………」

今行った斬新なミッションというのが、今回俺がサポートを行う事になった、マスード氏の返還ミッションだ。
が、ただの返還ではない。

なんとエクシア単機でアザディスタンの王宮まで、大観衆が見ている中で向かい、王宮の前まで来た所でやっとな返還するという物だ。
しかも、今回作戦に参加する機体は、俺のOガンダムを除くと、刹那のエクシア しかも完全（という訳ではないが）非武装
だけである為、ある意味益々心配である。

ピッピッピッピッピッピ

「！！ハロ！ハロ！エクシア接近！エクシア接近！！」

「……来たか」

あれこれ考えている間に、作戦時間になったようである。
リーダーを見ると、俺から見て六時の方向、上空から、緑の粒子を
撒き散らしつつ、エクシアが降り立って来ていた。

Oガンダムの頭を動かして、そのエクシアの姿を視界に入れる。
……どうやら当初の予定通りに完全非武装のようだ。

「……あ、良い事考えた」

ふと、そのとき俺の脳裏に、事ある毎に彼女が呟いている、とある
言葉を思い出した。

確か、『私がガンダムだ』……だったっけ？

ガンダム馬鹿らしい刹那の言いそうな事だが………どう
いう意味かは分からなかった。

だが、良い機会だから、この言葉の意味を、教えて貰う事にしよう。
その行動をもって。

「ハロ。エクシアにメッセージを送ってくれ」

「了解！！ナント？ナント？」

「ん？結構シンプルだよ。」

“

”
って
」

アザデイスタン王宮前

その日、王宮の前には多くの市民が集まっていた。

王宮の前には、武装した市民や、軍の兵隊、そして輸入品であるアンフが、まるで睨み付けるかの如く、空を見上げていた。

それを取り囲むようにして集まっている市民のその全員が、口々に配置されたアンフに向かって、罵声や恨みの言葉を浴びせる。

よく見ると、物も幾つか飛んでいた。

また、各国のテレビ局の人間も、王宮前の至る所からカメラを回しながら、これから起こる事を決して撮り逃すまいと集中している。

見れば、配置されているアンフ達から距離を置いた所に、ユニオンのフラッグが立っているのが見える。

その内の一機は黒く塗装され、また、一目で分かる位に手が加えられていた。

グラハム・エーカーのカスタムフラッグだ。

普段は自分で明言するだけあつて、落ち着きの無い彼ではあつたが、流石に自重して、黙ってこれから起こる事の成り行きを見守ろうとしている。

また、他のノーマルフラッグのパイロットである“ダリル・ダッジ”と“ハワード・メイスン”も、彼らが敬愛する上官と同じ様に、その場を固唾を吞んで見守っていた。

そんな中、一人の市民が後ろの空から近づいてくる光に気付いた。

「あ、あれは!？」

その声にアンフに罵声を浴びせていた人々が、一斉に後ろを振り向く。

空から降りてくる青と白の機体、ガンダムエクシアにその場にいた全員の注目が集まり、大きなどよめきが起こる。

そしてエクシアが王宮の前に着地した時、兵器について多少の知識がある者はある事に気付いた。

カスタムフラッグを駆っている、グラハムや、彼の部下であるダリルとハワードも、ほぼ同時にその事に気付いた。

「っ!?! 武装を解除しているだ!?!」

基本的に肝が据わっているグラハムも、これには流石に驚いた。そのままノコノコと此処まで出向いてくれば、間違いなく此処にいる殆どの人間から反感を買うのは目に見えていたが、まさかここまでとは思わなかった。

「馬鹿よ！ここに非武装で来るなんて！！」

そのとき、王宮の二階にいたマリナ・イスマイルの付き人をして「シーリン・バフティヤール」は、慌ててそう叫んだ。と、同時にマリナも慌てる。

昨夜、ソレスタルビーイングのエージェントと名乗る人物から、まさかのホットラインによる連絡を受けた際に、マスード・ラフマデイーを保護したという耳を疑うような知らせを受けて、彼女達は会談の準備をして彼らを待っていた。

しかし、約束通りに現れた当の本人は、周りに旧式とはいえ中退並みの量のMSが王宮を守る為に出張っている所へと、わざわざ非武装でやって来るという、半ば自殺行為も同然の事をしながら、ここまでやってきていた。

この場合、もしもマスード・ラフマデイーがガンダムの中に、そのパイロットと共に居たとして、万が一ガンダムが攻撃されて中にいるであろう彼のの身に何かがあれば、それこそ大変な事になる。

「ガンダムに攻撃はしないで！」

アザディスタン王女 “マリナ・イスマイル” は、その場にいた兵士にそう命令する。

「し、しかし……………」

「これは命令です！！」

その時、遠くにいるマリナ達にもエクシアの居る辺り　　丁度彼女らが居るテラスの正面くらいから、銃声が聞こえた。

それは、おそらく過激派の内の何人かであろう、若い男達だった。彼らは憤怒の形相を浮かべて、こちらへと歩いてくるエクシアに、カービン銃を撃ち続けている。

「来たなガンダム！！」

「約束の地から出ていけ！！」

男達がエクシアに向けて銃を発砲する。

しかし、ただの対人用の銃で、MSの、しかもガンダムの装甲が抜ける訳も無く、空しく放たれた銃弾はエクシアの装甲に当たって、砕け散った。

当然の如く、エクシアはこれに動じる事無く、ゆっくりと着地すると、王宮へ向けて歩きだす。

それを見たアンフ隊は慌てて右腕の滑空砲の矛先をエクシアに向けた。

それでもエクシアは止まらない。

それを見たアンフ隊は、それまでおざなりに銃口を向けているだけだったが、直ぐに本格的な物へと体勢を変え、同時に付け焼刃でもこれだけあれば、と言わんばかりにメインカメラの下の対人用機銃の銃口もエクシアへと向けた。

アンフ隊の纏う雰囲気が変わったのを察知したのか、それまで彼らに罵声を浴びせているだけだった市民達が、我先にと慌てて逃げ出し始めた。

その間も、エクシアは王宮へと歩き続ける。

暫らくして、アンフ隊の足元から、市民や歩兵の影が完全に消えた

のを見計らって、隊の隊長機から、エクシアへと警告が発せられた。

「ガンダムに告ぐ。保護した人質、マスード氏を解放せよ！繰り返す、マスード氏を解放せよ！」

だが、それでもエクシアはゆっくりと、しかし確実に王宮へと近づいていく。

そんな中、エクシアを王宮へと進めている刹那は、こんな事を考えていた。

「……まだ……まだ……今ここで開放すれば、また何者かに撃たれる可能性がある。そうなれば、今度こそこの国の紛争は終わらなくなってしまう。」

エクシアを動かしながら刹那は思考を働かせる。

しかし、無情にもアンフ達の大砲から轟音とともに弾が発射されてしまった。

ドオン！！

「グウっ！」「ぬっ！」

強い衝撃を受けて、コックピットの中にいた刹那とマスード氏は、思わず苦悶の声を漏らす。

特にマスード氏に至っては、狭いコックピットの中に立ちっぱなしの状態である。

高齢である彼には、この状況は辛いだろう。

「……まったく。世間であれほど騒がれている“ガンダム”という物の乗り心地がここまで悪い物とは思わなかったな。足腰にく

る」

「申し訳ありません。ですが今は我慢して下さい」

「なに、単なる老い耄れの独り言だ。気にしなくても良い【ドオン！】ぬぐお！？」

「クツ……」

再び、アンフ隊の内の一機から放たれた滑空砲の砲弾が、今度はエクシアの左肩に直撃する。

それを受けたエクシアは、今度こそその衝撃から、一瞬歩みを止めてしまう。

そして、それを見逃すほど、この国の兵達は馬鹿ではない。

アンフ隊はここぞとばかりに、ありったけの砲弾や機銃の弾をエクシアへと撃ち込んだ。

「どうして！？」

マリナから悲痛な叫びが上がる。

彼女はそのまま居ても立ってもいられずにテラスに飛び出そうとするが、もう少しでテラスの扉に手が届くという所で、シーリンに袖を掴まれて止められた。

「っ、シーリン、離して！」

「……マリナ、落ち着いて。……ほら、あれを見なさい」

シーリンに促されるままマリナが外を見る。

と、目の前に広がっていた爆煙の中から、体の前で両手を十字に重

ねて攻撃を防いだエクシアが無傷で現れた。

「ガンダム……………」

マリナは小さくその様子を見ながら呟く。

……あの日、スコットランドで出会った少女が乗っているであろう機体。

自分とは違う方法で平和を作ろうとしている者。

彼らのしている事を、理解できない訳ではないが、認めたくはない。でも、確かに今、自分の目の前で彼女は戦っているのだ。

この国にある、多くの人間の悪意や策謀などから生まれた、“紛争”という怪物と。
たった、一人で。

砲弾や銃弾の嵐が止んだのを見計らって、刹那は再びエクシアをゆつくりと歩かせ始める。

普段の自分ならここまでされれば容赦なく目の前のアンフ達を、手に馴染んだ獲物で斬り捨てているのかもしれないが、今は武器がないせいか、不思議と落ち着いたままエクシアを操縦できている。

まるで、自分がガンダムになったように。

ピピピピピ・ピピピピピ

不意に、そんな電子音が耳に届く。

何事かと正面のコンソールに目を向けると、其処にはミッション中にマイスター間で使われる極秘回線用のメールが届いている事を告げるメッセージが表示されていた。

……メール、だと？一体こんな時に誰が

其処まで彼女が思案したところで、勝手にメールが開封された。

有り得ない事に、（ヘルメットの上からでは分からないが）刹那は目を見開いて驚く。

しかし次の瞬間。

其処に表示されたメッセージを目にした瞬間、彼女は思わず声を上げそうになった。

メールの内容

それはこんな物だった。

『ここがお前の、お前が目指す“ガンダム”になる為の第一歩だ。
だから、しくじるなよ』

瞬間、刹那の脳裏に、昨晚のロックオンとの会話が甦る。

最初、スメラギから送られてきた、今回のミッションの概要を見た刹那達は驚きを隠せなかった。

なにせ一切の武装無しで、王宮にマスード・ラフマディー氏を届けろと言うのだ。

無謀などというレベルをすっ飛ばして、気が狂っているという言葉がピッタリなその内容に、ユリが疑問を留美になげ掛けた。

「………すまない。私は目がイカれた様だから、ちょっと目薬差してくる」

「ご安心ください。私にも同じ物が見えていますわ」

「それじゃ、貴方の目もどうにかなってるんだ。一緒に目を洗いに行こう」

「ユリ。いい加減に目の前の現実を直視しようぜ。大丈夫。俺はもう色々諦めた」

何時までも目を洗いに行こうとするユリに、ほっとしても何も変わらないなと感じたロックオンが、止めの一撃と言わんばかりに、彼女に現実を突きつける。

そんな彼の言葉を聞いたユリは、ガックリと肩を落とした後、再び留美に向かって問いかける。

「……………本当にこのプランが送られてきたのか？」

「信じられませんか？なんならこの場で確認をとってもよろしくですよ」

「……………いい……………ある意味あの人らしいと言えば、あの人らしいプランだ……………ただ、何で刹那なんだ？ただ送り届けるだけなら、強力なGNフィールドの張れるヴァーチェや、ある程度装甲の厚い、私のサキエルの方が適任だと思っただが……………」

「……………私もそう思う」

確かに刹那自身もそう思う。

機体の特性を考えれば、今ユリが言ったように、ヴァーチェやサキエルの方が適任だ。

それに、最近問題ばかりを起こしている自分よりも、基本的に模範となるようなユリとティエリア二人の方が人間的にも適任だと彼女は感じていた。

「それは、刹那だから・・・じゃねえのか？」

そんな彼らの疑問を払拭する様な答えを導き出したのは、ロックオンだった。

「知つての通り、このおてんば娘は誰よりもガンダムとしての戦いに憧れるてる・・・というか、“ガンダム”その物に憧れてんだ。だからこそ、このミッションはコイツに最適なんだろうよ」

そう言いながら、彼は刹那の方を向いて、少し笑いながらこう言った。

「行ってこいガンダムオタク娘。お前の信じる“ガンダム”になつて来い」

．．．．．そうだ．．．．．！

操縦桿を握る手に力が漲る。

．．．．．今度こそ．．．．．！！

見据える先は、あの日会った女性 マリナ・イスマイルルが居る、王宮。

．．．．．ガンダムに！

その前に居るアンプなど、眼中に入らない。

．．．．．ガンダムに！！

目指す所はただ一箇所のみ！！！！

「ガンダムに、なるんだ！！」

．．．．．私は！！！！！！

裂帛の気合と共に、刹那の口から咆哮に良く似た声上がる。

そんな彼女の手足も同然となっているエクシアもまた、彼女の堅い決意を受け、真っ直ぐに王宮を見据えながら、まるで修験者か何かの様に、力強く歩を進める。

同時に、刹那の心に応えるかのように、エクシアの太陽炉から膨大な量のGN粒子が生成され、エクシアの背後に広がっていく。

・・・まるで、光の翼が広がるかのように。

その姿に圧倒されたのか、王宮の前に居たアンプ達は、段々と武器を降ろし、まるでモーゼの十戒の如く、その中央に行くエクシアに道を譲った。

その場に居た全ての人々は、エクシアを見つめていた。

マリナも、

シーリンも、

グラハムも、

ダリルもハワードもアンプ隊の面々も歩兵の人達も王宮前に居る市民も各国のテレビ局の人間もその人たちが流している映像を通して世界中の人間も、

果ては王宮の屋根の上で羽を休めていた鳥や、近くの路地裏に居た野良猫や野良犬ですらも、

力強く王宮へと歩き続けるエクシアを、見つめていた。
まるで、尊い物を見るかのごとく。

その内、エクシアは王宮のテラスの直ぐ前で、立ち止まっていた。刹那はエクシアとテラスの距離、そして周囲の状況を確認すると、エクシアをその場に屈ませて、右手をハッチとテラスの間に持つて行く。

そして、ハッチを開くと、安全確認の為にまず自分から外に出て、その直ぐ後にマスード氏を降ろした。

無論、何処から狙撃されない様に、自分の身体とエクシアの右腕を盾にしつつ、しっかりと彼の手を取って。

「王宮へ」

「うむ……やはり、最後まで良い乗り心地ではなかったな」

「申し訳ありません」

そう言いながら、刹那は頭を下げた。

無論、氏が狙撃されないように、調整するのも忘れない。

マスード氏は自身の皮肉に変わらず真面目に答える彼女に対し、軽く頭を下げた。

「……………すまない。礼を言わせてもらっ」

「お早く」

彼は刹那に促されテラスへと降り立った。

すぐさま、王宮のSPが周りを固め、マリナの許へと彼を誘^{いざな}つ。

・・・狙撃されるような様子も、襲撃されるような様子も、無い。氏の背中を見送り、周囲を一度見渡してからそう判断した刹那は、さっさとエクシアのコックピットへ戻ろうとした。だが、後ろから声をかけられる。

「刹那・F・セイエイ！」

その言葉に、聞き覚えのある声に、刹那は足を止めて後ろを見る。其処には来ている服はあの時と違って、青と紫主体のドレスに変わってはいるものの、確かにあの時の女性が、必死な顔で自分を見つめていた。

「本当に・・・・・・・・本当に貴女、なの？」

それを聞いた刹那は、少しの間黙ると同時に動きを止める。そして数秒の後に、彼女は後ろにいるマリナの方へと振り返り、しっかりと真正面から向き合った。

「マリナ・イスマイル、私達がまた来るかどうかは、これからのこの国次第だ」

違う。そういう事ではない。

マリナとしてはもつと話したい事があるのに、今改めて彼女の前に立つと、それらは全く言葉にはならなかった。辛うじて、再び彼女の名前を呟く。

「刹那・・・・・・・・」

「・・・・・・・・戦え。お前の・・・・・・・・お前自身が信じる、唯一の神のために！」

それだけ言うと、刹那は素早い身のこなしで、エクシアのコックピットへと戻っていく

「刹那！」

マリナが彼女の名前を叫ぶが、刹那はそれに応じる事無くハッチを閉めると、そのままエクシアを遙か上空まで、一気に飛び立たせた。マリナは、その後姿をただ黙って、悲壮な表情で見上げる事しかできなかった。

『中尉、追いかけましょう！』

『今ならあのガンダムを追いかけます!!』

ダリルとハワードが追跡を申し出る。

しかし、

「できるものか！」

グラハムはそれらの考えを、一喝すると共に一蹴した。

「そんな事をしてみる。我々は世界の鼻つまみ者だ……」

だが、グラハムが追跡をしなかった理由はそれだけではない。
先日会ったあの少年と少女の言葉が胸を締め付ける。

「……支持は、しません。どっちも。どちらにも、その人達
也の正義が、あると思うから。……でも、この戦いで人は死ん
でいきます……沢山、沢山、死んでいきます……」

「うん……個人的にくっだらないな……とは思って
ますね」

『利益目的ならまだ人間らしくて、個人的にはまだ良いとは思うん
ですけど、信仰する物の違いで殺し合いするって言うのは、何か人
として間違っているような気がしましてね……あ、お二人は
軍服から見る限り、ユニオンの方ですね。すみません。お二人には
少し分かりにくいですかね？』

この国へと支援名目でわざわざやって来ておいて、結局何もできな
かった自分へ苛立ち。

そして、一方で、あれほど世界から嫌われているガンダムが、結果
的とは言え、この国を救ったという事実。

それらがグラハムの心の中に、様々な思いとともに渦巻き、結果的

にガンダムを見逃すという選択肢を与える事となった。

「・・・・・・・・すまん、少女・・・・・・・・いや、もしかすると少年か・・・・・・・・これが今の私にできる、私なりの精一杯だ」

グラハムは顔を顰めて上を見上げながら、無意識に操縦桿を強く、強く握りしめた。

見上げた空は、思い切り飛べたらどれだけ気分が優れるのかと思うくらいに綺麗で、其処に撒き散らされた、あのガンダムの発する緑色の光る粒子と相まって、とても幻想的な風景を映し出していた。思わず、グラハムはそれを美しいと感じ、また、そう感じてしまった自分に軽い嫌悪感を覚えた。

「…………あれ？これってもしかして、終わっちゃった感じ？」

「今回出番無シ！出番無シ！残念！残念！」

王宮のある首都から少し離れた郊外で、マントに身を包んだとある機体の中から、そんな少年の声とその相棒の機会音声が響いたが、気付く者は誰も居なかった。

「…………今回、俺がここに居た意味って……………？」

「特ニ無シ」

「・・・だよなあ・・・」

十話

折角キリが良い話数だというのに、果たして今回、俺が此処にいる理

如何でしたでしょうか？

どうも雑炊です。

今回はハレルヤの暴走と、マスード氏の誘拐事件を纏めてみました。

そして刹那が書いている内に完璧な食いしん坊キャラへと昇華して
いるという現実・・・・・・・・

如何してこうなった・・・・・・・・！！

そしてアムロとグラハムの絡み。

基本この二人が絡むと、ツツコミ不在の場合は今回のようにカオス
な空間が展開されます。

たぶん真面目な場面ではないとは思いますが・・・・・・・・

あ、それとアンケートは、もうちょっとだけ期限延ばします。

具体的にはあと一週間。

結果は活動報告にてご報告させて頂きます。

因みに現時点では1：1で同点な感じです。

え？お前も存在忘れてたんじゃないのかって？

ハハハハ、何を馬鹿なことを。ハハハハ・・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7756s/>

ガンダム00 マイスター始めてみました

2011年10月7日00時53分発行